
東方傀儡異聞 2 ～ 想い映えたる不死の躰 ～

碓井央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方傀儡異聞2 ～想い映えたる不死の躰～

【Nコード】

N9558K

【作者名】

碓井央

【あらすじ】

霊夢そっくりの人形という器を得た魂はチビ霊夢と名付けられて博麗神社に居候することになった。ある日、霊夢と魔理沙とともに紅魔館にやってきたチビは、パチュリーとアリスによってある魔法をかけられることになった……。

この小説はシリーズ物で、

東方傀儡異聞 (<http://ncode.syosetu.com>)

m / n 5 0 6 6 k / の続編にあたります。まだお読みでない方は
そちらから読んでいただくことをおすすめします。

その1（前書き）

東方傀儡異聞〜御霊宿りし巫女の器〜の続編です。

おおざっぱに前作のあらすじを紹介しておきますと、霊夢の身体に憑いた魂が紆余曲折を経て霊夢そっくりの小さな人形に移され、ヒトの心をもった人形として行動し始めるというお話です。

人形はチビ霊夢（略称チビ）と名づけられ、博麗神社に居候することになります。

この人形に宿った魂は自分がどこから来た何者なのか定かな記憶をもっており、自分自身の過去をなんとかして知りたいと考えています。

できれば前作を先に読んでいただけると幸いです。

その1

1

天井近くにある西洋風の明り取りの窓から拡がる光が次第に薄くなり、赤みを増してきた。

吸血鬼の少女を当主とするこの洋館は、どこも窓が小さい。しかも赤褐色を基調にした床や壁を使っている。そのせいか、夕暮れが迫るにつれてこの部屋の空気が沈み込んできたように感じる。

霊夢は私を膝の上に抱いたまま部屋の中央の長椅子に座っている。一方、壁の隅にもたれかかって立っている魔理沙は、はす向かいの小窓から外を眺めていた。

二人がこんな風に黙ったままでいると、すこし不思議な雰囲気が漂う。もつとも、神社にいるときもこんな状況はよくあるのだが…
…いつもと場所が違うせいかもしれない。

腕を組んで外に眼を向けている魔理沙の横顔は庭からの夕陽の照り返しを受けている。その陰影が、西洋の美少年を思わせる彼女の容貌に言いようのない深みを与えていた。

「……なんだ、チビ」

『え?』

「人の顔をそんなにじろじろと見るもんじゃないぜ」

魔理沙は頭をわずかに動かし、にやりと笑みを私に向けた。

『そういう風に感じたのか？』

「油断しちゃだめだ。なんせお前はそんなちっこいなのくせに一人前のヒトの魂を宿してるからな、たとえ動きがなくなつて気配で分かる。で、この美しき乙女の横顔を鑑賞しながら何を考えてた？」

そのまま言葉にするのはさすがに気恥ずかしい。だから、とりあえず言った。

『いや……なんかこう、絵になる感じだなと』

「は？　なんだそりゃ」

すると、頭上から霊夢の声が響いた。

「魔法使いは畳に座布団敷いて座ってるより、洋風の部屋のほうが納まりがいいってことじゃない？」

『まあ、それも確かに言えるが』

黒いサロペットスカートにフリルのついた白エプロンという魔理沙の服装は魔法使いとしてはいささか変則的な印象だが、少なくとも西洋風のコスチュームであることには違いない。

「わたしは東洋に生きる西洋魔術師だから、中身は和風なんだが。でも絵になると言われるとまんざらでもないな」

「チビは最近、さりげないお世辞ってのが巧くなってきたから用心した方がいいわ」

霊夢が私の頭をぽんぽんと叩く。その叩き方が妙に優しい感じがするのがすこし怖い。

「じゃあ、お前には『今日も腋出しのお召し物が一段とお似合いだ』とか言うのか？」

「そんなわざとらしいことは言わないわよ」

霊夢がすこし困ったような顔で身じろぎをしたとき、ノックの音がした。

「はいよ」

魔理沙が返事をすると思厚い木製の扉が重そうに軋みながら開き、数人のメイド妖精たちとともに小柄なロングヘアの女の子が入ってきた。頭にかぶっているフリルつきの帽子には三日月形のエンブレムが輝いている。今回の件のいわば責任者、パチュリー・ノーレッジだ。今日は服の上に裾長の黒い外套を羽織っている。

彼女は霊夢の膝の上にいる私にまっすぐに眼を向けて言った。

「準備が整ったから、来て」

『分かった』

私がうなずくと、彼女はすたすたと霊夢の前に近づいてきて、両手を出した。

「えっ？」

霊夢がすこし戸惑ったような声を出すと、魔理沙がテーブルから黒い三角帽子を取り上げて被りながら言う。

「先生御自らチビを現場にお連れしてくれるとさ」

「ああ……」

霊夢が、膝の上から私を抱き上げてパチュリーに差し出すと小柄な魔法使いの細い腕が、私の身体を抱き取る。

「いまは力を使わずに移動したほうがいいから。それと、すこし話もある」

パチュリーは私を両腕で包み込むようにしっかりと抱き、夕闇に包まれた庭園の中の小道を進む。半透明の翅を背にもつメイド妖精数人が明かりを手に先導してくれており、後ろからは霊夢と魔理沙がついてきている。

私はすこし緊張していた。霊夢や魔理沙以外の人物にこういう風に「抱っこ」されたことはあまりない。耳元にはかすかな息遣いが聞こえ、しかもさきほどからお互いに沈黙したままだ。

だが、さきほどの彼女の言葉を思い起こし、勇を振るって尋ねて

みることにした。

『ところで、話があるということだったけど……？』

するとパチュリーは静かに答えた。

「あれはとりあえず言っただけ」

『は？』

ちよつと意外な感じがした。そんな言葉がこの見るからに几帳面な感じの魔法使いの口から出るとは。

「術式の前に集中力を高めるために、あなたの身体に触れていることが必要なの。でも、それをあの二人に説明するのが面倒だったから」

『……そうなのか』

理屈はよく分からないが、そういうこともあるのかもしれない。

そこで話が途切れた。しかし集中力を高めようとしているわけだから、こちらから話かけるのもどうかと思い黙っていた。

が、少しして今度はパチュリーが口を開いた。

「あなたのこの服、最初に着ていた服ね」

『うん？ ああ、そうだ。霖之助さんに頼んで修繕してもらったんだ』

この巫女服は前にチルノと戦ったときに袖の一部が破れてしまった。だが、その程度で処分するのは勿体無いとこのことで霊夢が霖之助さんに依頼してくれたのだ。

「不思議な香りがする」

『香り?』

「ええ。いままでに嗅いだことがない匂い。香水とか、花とかとも違う」

すこし唐突な感じの話題だったので、私はどう返事をしていいものか分からなかった。

と、パチュリーはすこし口調を柔らかくして言った。

「わたしがこんな話をするとおかしい?」

『あ……いや、そんなことはないが』

「別に深い意味はない」

彼女は私の身体を抱え直す。

「こういうとき、あなたの思考はいつも相手の心を捉えようとする。それは強みになることもあるけれど、逆に惑わされやすい場合もあるかもしれない」

『……………』

「幻想郷にはいろいろな者がいるから、その点には注意したほうがいい」

『それは、貴女も含めて？』

一瞬、間があったが、かすかな笑い声とともに返事があった。

「そう。わたしも含めて」

小道はやがて林の中へと続き、さらに進むと小さな広場のような場所にたどりついた。木々が壁をなすように弧を描いて周りを囲んでいる。暗くなりかけている空を見上げると大きな落とし穴の底にでもいるような雰囲気だ。地面は専用の機械が何かで仕上げられたように固く平らで、草一本生えていない。

この円形の広場の中央に、ほぼ正方形の頂点を成すようにかがり火が四基配置されていた。金属の柱の上に深い皿のようなものが取り付けられていて、その上に透明な炎がゆらめいていた。油のような燃料による炎とは違うようだ。

かがり火に囲まれて長方形の台が置かれていた。複雑な紋様が刺繍されている布に覆われたそれは寝台のようでもあり、見ようによつては棺のようでもある。

その傍らには三人の人影があった。私たちが近づくとその中のいちばん小柄な人物が声をかけてきた。

「あなたの門出にふさわしい良い夜ね、チビ」

リボンとフリルで飾られた裾長のドレスに身を包んだ吸血鬼の少女、レミリア・スカーレットは鋭く尖った犬歯を見せながら笑みを浮かべる。

『門出というほどのことになるかどうかは分からないが』

「自分が変われば周りも変わり、新たな世界との関係が生まれてそこにあなたは踏み出すことになる。それはまさに門出というべきものではなくて？」

「パチュリーの魔法がどれぐらいの効果を生むかにもよるな」

魔理沙が無遠慮に口をはさむ。

「チビにとって世界が変わるほどのものになったら大したもんだが」

「それは正直、やってみないと分からないわね。でも、こちらとしてはそれなりの準備をしたつもりよ。咲夜」

「はい」

傍らに控えていたメイド長の咲夜さんが進み出てきて、小さな箱をレミイに手渡す。

レミイはその箱を開けて、私たちに見せる。

箱の中には青い宝石が嵌めこまれた金色の腕輪が鈍い輝きを放っていた。もっとも、私の腕に合わせて作られたものなので、輪の径は一回り小さい。

「それをチビに？」

霊夢が問いかけると、レミィはうなずいた。

「ええ。わたしの持っている宝石の中ではいちばんの年代物だろうと思うわ」

「サファイアか……あまり見たことの無い色合いだな」

魔理沙が箱に顔を近づける。

「コーンフラワーブルーというのよ。産地特有のものらしいわ」

「いいの？ そんな高そうな石をチビに使わせて」

霊夢が訊くと、レミィは大したことじゃないわよ、と手を振った。

「わたしにはこの石がチビの運命と相性が良さそうに感じられたの。そこがいちばん重要なことよ。でもまあ、魔理沙の言う通りまずは結果を見てみないとね。その人形遣いさんの働きにもよるとは思っけど」

少し離れて立っていた金髪の少女、アリス・マーガトロイドが青い瞳の上の細い眉を少し寄せた。

「言われなくても、わたしも最善は尽くすつもりよ」

「期待してるわ」

吸血鬼の少女は腕輪の入った小箱をアリスに渡すと、ちょっと感

情の読み取りにくい笑みを見せる。たぶんアリスはレミイにとって多少距離のある存在なのだろう。

パチュリーは敷物に覆われた台の前に進み出ると、私を仰向けに横たえた。

星々が輝く真っ黒な空が広がっている。そこに、アリスの顔が横からひよいと出てきて、伸びてきた手が私の服の左袖をまくる。

「じゃあ、腕輪を付けるわよ」

『ああ』

アリスは私の左の二の腕、半ばあたりの位置に腕輪を固定した。

パチュリーはそれを確かめたあと、静かな声で言った。

「術式を開始する。わたしとアリス以外は明かりの外に出て」

脇から霊夢の顔が出てきた。

「それじゃ、あの……しっかりね」

『ああ、だいじょうぶだ』

「うん……」

霊夢はまだ心配そうな顔だったが、パチュリーに促されて台の側から離れて行った。

パチュリーは確かめるように周りを見回してから、私に視線を戻した。

「では、始める」

『よろしく頼む』

彼女は小さくうなずき、片腕を真つすぐに空に向けて掲げ、囁くような声音で呪文を唱え始めた。

キン、という鋭利な音とともに白い光があたりを包み、その後外からの物音が一切聞こえなくなった。

その2につづく

その2

2

鮮やかな赤色に染まった空を背景に、黒い影たちが飛び交う。

身体が熱い。腹から胸、そして肩から腕。熱湯が駆け回っているようだ。

これ以上は、もう無理だ。

早く吸い取ってくれ。この……と一緒に……。

彼らに安らぎを与えてやってくれ。

『……わたしのせいだね』

いいんだ。見つけてくれたのは、君なんだから。

そのうち、また会うことになるさ。

「返事をして、チビ」

うん？ 誰だ……。

「わたし。パチュリー・ノーレッジ」

パチュリー？ ええと、それは……あれ？

ああ、そうか。

たしか、いま私は……。

『ぐっ……？』

いきなり、身体全体が燃えるような熱さに包まれた。

「落ち着いて。あなたの状態は分かっている。いま、術式の最後の段階。どうしても、あなた自身に協力してもらわないと、完成しない」

『……どうすれば……いいんだ？』

熱さに耐えながら、私は必死の思いで問いかける。

「左の腕に意識を集中して。そこに吸い込み口のようなものが感じられるはず。身体の熱がそこに向かって集まっていくな、そういうイメージを持って」

左腕……たしかに、なにかがある一点に流れ込んでいるような感じはある。

「言葉ではなく、あなたの感覚そのもので移動している流れを『視て』」

熱さそのものが……移動してゆく。

身体全体から……。

……………。

………？

突然、すべての熱がすつと嘘のように引いていった。

「繋がったわよ！」

アリスの声がした。

私は眼を開けた。

身体の周りを包んでいた光がゆっくりと消えてゆき、視界の真ん中から黒い夜空が広がりはじめる。

と、パチュリーの顔が横から出てきた。

「気分はどう？」

『……だいじょうぶだ。さっきまでは死ぬかと思うような熱さだったが』

今度は反対側からアリスの顔が現れる。

「起き上がる？」

『うん』

私はゆっくりと上半身を起こし、さらにひざを曲げて立ち上がった。それから、両腕と両脚の関節を軽く動かしてみる。

『おかしいところはない感じだ』

「運動機能には問題ないみたいね。良かった」

アリスはほっとしたような顔になった。

そこへ、レミイの少し甲高い声が割り込んで来る。

「でも、力の方はどうなのかしら？」

『えっ？』

振り向くと、台から離れていた一同が側にやってきていた。レミイの背後に魔理沙と並んで立っている霊夢が心配そうな顔でこちらを見ている。

「術式はきちんと終わったのね？」

レミイの問いに、パチュリーはうなずいた。

「予定通り、チビの魂と石の間に魔力の伝導路が完成した。これでチビは自然界に満ちている魔力を吸収することができるし、それを蓄えることもできるはず」

「お疲れさま。人形遣いさんもご苦労だったわね」

するとアリスは軽く息を吐いて言った。

「わたしはたいしたことはしてないわ。それより、パチュリーが疲れてると思うから、すこし休ませてあげた方がいいと思うわよ」

「あら、それは問題ね。咲夜、パチュリーを館まで送ってあげて」

「わたしは別に大丈夫……」

首を振るパチュリーの肩に、アリスが手を乗せる。

「高度な術式の直後だから、回復を図ったほうがいいわ。術式のことについてはわたしからこの人たちに説明しておくから」

「そう。じゃあ、悪いけれど」

私はあわててパチュリーのそばに走り寄った。

『今日は本当にありがとう。そんなに無理をしてもらってまで……』

すると彼女は小さく笑った。

「わたしは自分が興味のあることをやりたいようにやっただけ。それと、そんなに疲れたわけじゃないから。またあとで」

そう言うつと、小柄な魔法使いは、咲夜さんに付き添われて館の方へと歩み去って行った。

その後姿を見送っていた魔理沙が腕組みしてつぶやいた。

「こついつタイプの魔法つてのは案外大変なもんなんだな」

「実際、時間もかかったしね」

と霊夢。

「具合はどうなの、チビ？　大丈夫？」

『うん、問題ない。ただ、前とは何か違う感じはあるけどな。うまく言葉で説明できないが』

するとレミィが興味津々といった顔つきで私を見た。

「ためしにちよつと飛んでみてごらんなさいよ。いままでとは違った感じで飛べるかもしれないわ」

『そうだな、じゃあ』

「あ、ちよつと急に……」

アリスの言葉を最後まで聞かないうちに、いきなりドン、下から突き上げられるような衝撃がきて、下顎を胸に打ちそうになった。

『がつ？』

同時に頭上から猛烈な風圧がきて、身体全体ががくがくと揺れ動いた。

揺れが収まり、ようやく視界が戻ったと思ったら、すでに空の上にあった。しかも相当な高度だ。地上を見下ろしたが、自分がどこか

ら飛び上がってきたのかすら分からない。

「なにやってるのよ、馬鹿」

霊夢が下から飛んでくるのが見えた。私を追いかけてきてくれたらしい。

『いや、ちょっと上昇しようとしてみただけなんだが……こんなに一気に昇ってくるとは思わなかった。驚いた』

「驚いたのはこっちよ」

振り向くと、アリスもすぐ側に来ていた。すこし怖い顔をしている。

「まだ自分の力がちゃんと制御できない状態なんだから、気をつけてもらわないと……これが屋内だったら悲惨だったわよ」

『いや、いまでも結構悲惨だよ。風圧で首が砕けるかと思った』

まったくもう、とアリスは溜め息をつく。

「腕輪は何ともない？」

『うん、すこし暖かい感じがするが……異常ではないみたいだ』

「念のためにあとで点検してあげる。それとひとつ注意しておくけど、その腕輪を無理にはずそうとすると自動的に攻撃魔法が発動するから」

『あまり触れない方がいいということか』

「普通に触るぐらいなら大丈夫。攻撃魔法といっても電撃が出るだけだし。相手に対する警告の意味でね」

「とりあえず、ほら」

霊夢が空中でわたしの手をとり、引き寄せた。

「試運転はまたあとでゆつくりすればいいでしょ」

『……分かった』

霊夢は私を胸に抱くと、アリスとともに下降し始めた。

さきほどの森の中の広場に降り立つと、レミィと魔理沙が待っていた。

「悪かったわね、チビ」

吸血鬼の少女はすこしばつの悪そうな顔をする。

「どのぐらい効果が出てるのかと思って……」

『気にしなくていいよ。私もちょっと迂闊だった』

「ははは、レミリアらしいって」

魔理沙が笑いながらレミイのかぶっている帽子をぽんぽんと叩く。

「こんだけ手間ひまかけたんだから、ちょっと試してみたくなるのは人情ってもんだ」

「……わたしのこと馬鹿にしてるでしょう？」

「まあまあ、無事に成功したんだし、とりあえず館に戻って祝杯を上げようぜ？」

「結局そっちが目当てなの？ まあいいけど」

並んで館への帰り道に向かう二人のあとに、私を抱いた霊夢と、アリスが続く。

歩きながら霊夢がぽつりと言う。

「アリスにも引き続き面倒をかけてるわね」

「いいのよ。パチュリーじゃないけど、わたしも好きでやってるところがあるから。それより……」

アリスは私をちらりと見る。

「霊夢のほうがあとあと大変なんじゃない？」

「別に、わたしは何も。とりあえず行動範囲を拡げたいっていうから、レミリアに相談したらこうなっちゃっただけだし」

「チビさんは穏やかな性格だけど、ときどき大胆な行動もとるからわたしはちょっと心配よ。このあいだのチルノとの件もあるし」

『あれは事故みたいなものだよ。私は基本は臆病者さ』

「本当に？」

色白の魔法使いは首を傾げ、青い瞳を私に向ける。多少疑いを含んでいるような眼差しだ。

すると、霊夢が少し諦めの入ったような口調で言う。

「なるようになるでしょう。先のことを考えてもしようがないし、あとは本人次第」

それは私のことをある程度は信じてくれているということなのだろうか。それとも言葉通りの意味か。

まあ、後者だろう。そう思っておいた方が、私としても気が楽だ。たぶん。

その3につづく

その3

3

紅魔館の中庭は臨時の宴会場となった。

私は霊夢とともにレミイと白いクロスの掛けられたテーブルを囲んでいた。魔理沙、アリス、パチュリーは別のテーブルに着席して話をしている。そのほかにも来客が増えてきていて、周囲を行き交う給仕の妖精メイドたちの動きが忙しげだ。新たにテーブルを出してきたり、追加の料理を出してきたりしている。

『内輪の宴会にはずいぶんにぎやかな感じになってきたな』

「いつものことよ」

レミイは鮮やかな紅い液体の入ったグラスを軽く揺らしながらゆったりと言う。

「そこらへんの妖怪が適当に混じって来てるからね。美鈴には知った顔なら通してやるように伝えてあるし」

「考えてみれば、レミリアは社交的なほうよね。来るものは拒まずって感じで」

霊夢がそう言うと、吸血鬼の少女は赤い唇の隙間から鋭い犬歯を

わずかに覗かせて笑みを浮かべる。

「集まりは賑やかなほうがいいもの。でもそれはあなたのところだ
って似たようなものでしょ。しょっちゅう宴会とかがあるじゃない
の」

「しょっちゅうというわけでもないわ。でもそういえば、ここんところ
その手の客はあまり来ないわね」

「そうなの？　だとしたら、ちょっとは遠慮してるのかもね」

「遠慮？」

「同居人がいるとなると、そういうものよ。気づかなかったかもしれないけど、かくいうわたしだって多少は遠慮してるわよ？」

「それは全然気づかなかったわ」

霊夢は肩をすくめる。

「相手に気づかれないように慮るのが遠慮というものよ」

とレミィ。

『しかし私から言うのもなんだが、あまりそういうことは気にしないで欲しいな。私はどちらかといえば置物みたいなものだし、同居人というほどの存在じゃない』

すると霊夢が私をじろりと見る。

「それじゃまるでわたしがふだんからあんたを置物扱いしてるみたいじゃないの」

『いやいや、そういう意味じゃなくてさ』

するとレミイが手を軽く上げて言う。

「チビが言いたいことは分かるわよ。たとえ魂を持っていなくても人形という外見は存在感という意味では確かに微妙なモノではあるわでもねチビ、だからこそあなたは霊夢のそばにいられるとも言えるのよ」

「それって、どういうこと？」

私よりも先に問いを発した霊夢に、レミイが顔を向けて答える。

「もしチビがあなたそっくりの人形じゃなくて、単なるヒトや妖怪でしかないということであれば、同居なんか認めないって言い出す連中がわんさと現れたでしょうよ。もしかするとわたしもその一人になっていたかもしれないわ」

「はあ？　なんだか意味が良くわかんない」

霊夢は不思議そうな顔で首を傾げる。

『……………』

五百年生きているという彼女の言葉は時折深読みをしてみたくなるような響きをもつこともあれば、ただまっすぐに自分の言いたいことを言っているのだと感ずるときもある。たぶんこれは後

者だろうか？　だとすれば、実はレミイは私という存在に対して案外複雑な思いを持っているのかもしれない。

『レミイにとって霊夢は大切な人だということだよ』

私がそう言うと、吸血鬼の少女はにやりとした。

「あら、心の壁に大事にしまっていたわたしの想いを代弁してくれてありがとう、チビ」

「よく言っわよ……まあ、今回の件については感謝しているけどね」

と霊夢。

「そう言ってもらえるだけで十分よ。ただ、いずれにしてもチビの得た力がこの先どんな道を拓くかは分からないし……場合によっては、霊夢にとって面白くないことが起きるかもしれないわ。それは覚悟しておくことね」

「面白くなかったら『面白くない』ってチビに言っただけのことだわ。そこから先は本人が考えるでしょ」

「そっいうことね」

くすくすとレミイは笑う。

「お嬢様はずいぶんと上機嫌みたいだな」

レミリアたちのテーブルを横目でながめつつ魔理沙がグラスを傾けワインを干すと、アリスは軽く息を吐いた。

「そりやまあ、チビさんとの約束を無事果たせたわけだしね」

「なんだ、アリス？ お前はあんまり嬉しくなさそうだな」

「そんなことはないわよ、成功して良かったと思ってるわ。これでもいろいろ段取りとかがあって苦労したんですからね。ただ、思ったより効果が強力みたいだから心配なだけ」

「でもいくら強力だとしても限度があるだろう。使いこなせないほどのもんじゃないだろうさ」

すると白い陶製のカップから紅茶をすすっていたパチュリーがぼつりと言う。

「限度があるかどうかはわたしにも分からない。魔力の蓄積容量は、魂の強さに比例する。でもそれを外から測ることはできないから」

「おいおい、怖いこと言うなよ」

「魔法は機械の技術とは違う」

「そりやそうなんだろうがさ」

魔理沙は空になったグラスをテーブルの上に置いた。

「メイドさん、おかわりをお願いするぜ」

「は、はい……」

テーブルの傍らに控えていたメイド妖精がワインの瓶を手にしてあわてて歩み寄ってくる。

「すこし飲みすぎなんじゃない？ 足腰立たなくなっても知らないわよ」

アリスの言葉に、魔理沙は手をひらひらと左右に振る。

「わたしのアルコール代謝能力をそこらの連中と一緒にしてもらっちゃ困るぜ。霊夢のところで鍛えられてるんだからな。そんなことより、パチュリーさんにひとつ訊きたいんだが」

「……何？」

綺麗に切りそろえられた前髪の下の瞳は、ワインが注がれている魔理沙のグラスへと向けられている。

「チビが今回の件をレミリアに持ち込んでからせいぜい五日ぐらいだろ。こんな短期間で術式を組み立てたってのは正直驚きだったぜ。たとえアリスの協力があったとしてもな。この手の魔法はどっちかというと専門外なんだろうに」

「経験の多寡はあまり関係ない」

パチュリーは静かに言う。

「問題を解くための筋道がはっきりとしていれば、答えはおのずと出るもの」

「なるほど。ただ、それにしてもやや尋常ならざるものを感じたのさ、わたしのこのへんが」

魔理沙は空いているほうの左手で自分の胸のあたりを指し示す。

「動かない大図書館という二つ名にはちとそぐわない……まあ言うてみれば情熱、みたいなものをな」

「……………」

パチュリーは表情を動かさない。

アリスは少し当惑したような顔つきで二人の様子を見比べたが、口ははさまなかった。

「つまりさ、単にお嬢様の依頼だからというだけじゃなく、お前さん自身にもそれなりの思い入れているか……もっと言えば、チビそのものへの興味があるんじゃないかと思ったわけなんだが。どうだ？」

そのへん」

「……ちよつと待って」

パチュリーは控えていたメイド妖精を呼び寄せ、小声で何事か命じた。メイド妖精はうなずいてテーブルから離れた。

それから魔理沙に顔を戻し、言葉を継いだ。

「人形そのものには以前から興味があった。ただ、それは魔法の道具としてではなくて、呪物の一種としてだけねど」

「そりゃ、どう意味合いが違うんだ？」

魔理沙は首をかしげつつ、グラスに口をつける。

「言い方を換えると、人形に係わりあう精神の問題ということになるかもしれない。人形というものに対してどういう想いを抱くかという」

「ふうん……じゃあ、パチュリー自身は人形に何を感じるんだ？」

「その前に、専門家の意見を聞きたい。あなたはどう、アリス」

「えっ？ わたし？」

アリスはびつくりしたように眼を見開き、すこしうろたえ気味に応える。

「わたしは……その、そうね。人形は道具でもあるけど自分の作品でもあるし……意味合いはいろいろ変わるけど。ふだんの生活では使用人みたいなものかしら。でもなんかそれもしっくりこないかな」

「つまり、アリスの場合は人形に囲まれているのが普通だからあまり『人形って何なのか』なんていうこだわりはない。でも、ふだんそんなに人形に接しているわけじゃないヤツ……つまりお前さんやわたしから見ると、違うというわけか？」

魔理沙の問いかけに、パチュリーは小さくうなずいた。

「ただ、あの人形……チビ霊夢の場合はヒトの魂が入っているから、呪物としての不気味な面を忘れさせる。でも、意識と無意識の隙間に働きかけてくるような、ある種の力は失せていない」

「つまり人形ならではの、そういう奇妙な魅力があるというわけか」

「そう。だからこそ、場合によっては人の心を捉えて、取り込んでしまうことさえある」

「だが、もうひとつ別の見方もあるぜ。人形は、自分の子供の姿だということさ。あくまで象徴的な意味でだがな」

「……？」

パチュリーは首をかしげる。

「母親と自分の関係を、自分と人形の関係に置き換えて観るのさ。そして母親になったつもりで人形を観る……それは自分の子供の姿を視ているのと同じだ」

「ふうん、魔理沙にはずいぶん真面目なことを考えたものね」

とアリスが言うと、魔理沙はすこし眉をしかめる。

「なんだそりゃ。わたしだってそれぐらいの頭はあるぜ」

「でも、つけ加えさせてもらえば同時にそれは自分自身の姿でもあるわ。母親に愛されている自分をそこに再現したいという欲望を満

たすための器なのよ」

するとパチュリーが静かな口調で言う。

「ある意味、チビは霊夢にとっては他者であると同時に自分の子のように感じられる存在かもしれない。なぜなら、外からやってきた魂を受け容れて、その魂が身体を得て自分の中から外に出た、そういう存在だから」

「ほう」

魔理沙が感心したような顔になる。

「……なるほどな。そこまでは思い至らなかった。眼から鱗だぜ。ま、しかし……こんな話はいづらにしてみれば余計なお世話か」

そこへさっきのメイド妖精が戻ってきて、新しいワインの瓶とグラスを三つ、テーブルに置いた。

「ん、それは？」

魔理沙がパチュリーを見ると、彼女はすこし伏し目がちになって言った。

「もし良かったら、あらためて乾杯をしたいと思って。いちおう、これはわたしが自分用にとっておいたものだけど」

「ほう、いいな。ローズワインか。なかなかいい色だ」

メイド妖精はワインの栓を開けて、それぞれのグラスに注いだ。

「それで、何に対して乾杯するの？」

アリスが問うと、グラスを手にしたパチュリーは答えた。

「今宵、こうしてこの場に居合わせたわたしたちの運命に。そして」

パチュリーは隣の席の霊夢とチビ霊夢を見て付け加えた。

「……彼らの未来に」

グラスが差し上げられ、魔法使いたちはワインを干した。

「あの娘たち、案外仲良くやってるみたいね。魔法使いつてのは孤独が性に合ってるものかと思っていたけれど」

レミィが隣のテーブルの様子を横目で見ながら言うと、霊夢がそれに応じる。

「基本はそうだと思うわよ。ふだんはそれぞれにやることがあるんでしょうから。だいたい、魔理沙なんて、パチュリーからすれば加害者そのものじゃないの？ 例の地下図書館でいろいろとやらかしてるんでしょ？」

「らしいわね。でもまあ、図書館の中のことはわたしはあまり関知してないから。パチエからも特別にどうこうという話は来ないしね」

「そうなの？」

「ええ。まあ、いちおう警備担当からはときどき何か言ってくるみたいだけど、あんまり伝わってこないわね」

咲夜さんが軽く咳払いをする。

「お嬢様、その点につきましては……」

「ああ、別にわたしはあなたを責めているわけではないわよ、咲夜」

レミイは笑う。

「なにもかも完璧でなければいけないなんて野暮なこととは言わないわ。要所を締めてくれればそれで十分なの。この館は広いしね」

と、霊夢が椅子から立ち上がった。

「わたし、ちょっと向こうの様子を見てくる。なんかいやな予感があるのよね。ああいうときって共通の知り合いの悪口とかで盛り上がるのがよくあるじゃない」

「あら、霊夢がそんなこと気にするなんて珍しいわね」

「今日だけよ、今日だけ」

そう言つと、霊夢は魔法使いたちのテーブルへと歩み寄って行った。

私はいい機会だと思い、前から疑問に思っていたことを言ってみた。

『レミイ、実はひとつ訊きたいことがあったんだ……私自身のことについて』

「あなた自身？」

『ああ。もう少し正確に言うと、この私の器である人形についてだ。初めて紅魔館で会ったとき……まあ、そのときは私はまだ霊夢の身体の中にいたわけだが、君はこの人形を知り合いから託された、と言っていたな』

「ええ、その通りよ」

『その知り合いというのは誰か、あるいは、その人物がどこでこの人形を手に入れたかを知りたいんだが、訊いてはダメかな』

「うーん……まあ、その質問はいつかくるとは思っていたわ」

レミイはちよつと眼を細めた。

「ただ、人形を譲ってもらうにあたって約束したことがあってね……それはまさに譲った本人が誰か、それをどうやって手に入れたかについては他人には言わない、っていうことなの」

『……………』

「どうしてそれを秘密にする必要があるのかよく分からないんだけど、約束は約束だし、わたし自身の信用にもかかわるから」

『なるほど』

ある程度は予測されたことだ。これまで人形の由来については詳しいことが語られることはなかったのだから、伏せておきたい事柄だったのだろう。

「ただまあ、それを調べたいというのなら、別に邪魔はしないわよ。わたしの口からは言えないというだけだから」

『それは助かる』

「やっぱり、何か引つ掛かるものを感じるの？ その人形そのものに」

『ああ。まあ、魂をこの人形に移したのはあくまで霊夢が私の件でここに相談に来たときにこの人形があつたというめぐり合わせに過ぎないわけだから、私という精神の由来とこの人形と関係があるという根拠はないように思える。ただ、突き詰めて考えるとそうでもない気もするんだ』

「というと？」

『もし、この人形が……素材から考えて外の世界から来たものだとするなら、外の世界に霊夢そっくりな人形というものがあり得るかということなんだ』

「……なるほどね。霊夢に関することを外へ伝えていない限り、そんなことはあり得ないものね」

『そうだ。それと、私自身が外から来た存在だとして、霊夢に対して何かの理由で執着しているのだとしたら……それもまた、奇妙じゃないか？　つまり、外にいた私がこの幻想郷の住人である霊夢を元から知っている、ということにならないか？』

「面白いわねえ。たしかにその通りだわ」

『少なくとも、この人形と私にはそういう意味では共通点がある。だからといって、関係が必ずあるはずだというわけではないがね』

「もともと、このめぐり合わせ自体にはそれなりに理由があるという感じはわたしにもあるのよ。そういう風に理詰めで考えたことはなかったのだけれどね。でも、面白いわ」

ワインのせいか、頬にほんのりと赤みがさした吸血鬼は妖艶な笑みを浮かべる。

「でも悪いわね、人形そのものの件については、今言ったような事情だから」

『いや、約束も信用も大切だ。もしかしたらと思って訊いてみただけだから、自分でなんとかしてみるよ』

「……あるいは、わたしがこういう約束をさせられたということも、運命の一部かもしれないわね。回り道が実は本当の道だった、なんてことも世の中にはよくあることよ」

レミイは私を近くに来るように、という風に手招きをした。

テーブルを横切って彼女の前に立つと、レミイは私を両手で抱き

上げ、その赤い唇で私の頬にそつと口付けをしてささやいた。

「いずれにせよ、今夜あなたは道を進むための力を得た。うまく使いこなせることを祈っているわ」

その4につづく

その4

4

夜も更けた頃、私と霊夢はレミイに挨拶をして紅魔館をあとにした。

試しに自力で飛行してみたら、初めのうちは多少不安定だったものの、そのうち力の加減が分かってきてすっかりとした軌道が保てるようになった。

『とりあえず、前に較べるとかなり楽になったような気はするよ。背負っていた荷物が軽くなったような、そんな感じだ』

「ふうん……まあ、それはそれで良かったけど」

横に並んで飛んでいる霊夢の横顔は、月の光に照らされているものの、表情が見えにくい。

『……なあ、霊夢』

「何」

『これはあくまでも念のためというか、万が一に備えてやったことなんだ』

「分かってるわよ、そんなこと。この先、どういうことが起きるか
知れないし」

『だから、前よりも少しばかりその……力を得たからって、軽はず
みな行動はしないつもりだ』

「アリスの言ったことを気にしてるの？ わたしはあなたがそんな
愚かな人だとは思っていないわよ」

『そうか……』

なんだか自分の言葉で自分を縛ってしまっているような気もする。
しかし、霊夢が今回の件をどう思っているかを測るには致し方ない。

「ただ、これからやろうとしていることぐらいは前もって聞かせて
欲しいわね。幻想郷にはまだ、あなたが知らないことが沢山あるん
だから」

『そうだな』

まあ、あまり焦ってはいけない。ただ、方針ぐらいは説明してお
く必要はあるだろう。

『……実は、ひとつ調べておきたいことがあるんだ。この私の身体
……霊夢にそっくりな人形を、誰がどこで手に入れたかをね」

「え？ それならレミリアに……」

と言いかけて、霊夢はああ、という顔をした。

「そうか、訊いたのね」

『うん。でもレミイには預かった本人からは口止めされていると言われた』

「へえ……なにか訳ありなのかな。でも、逆に考えればその答えも手がかりにはなるわね。レミリアに口止めさせるぐらいの知り合いなんて、そうはいないだろうし」

『そうなんだ。そのあたりは彼女も意識した上で言っていた節がある』

「また面白がつてるんでしょね、きっと」

霊夢は苦笑を浮かべた。

ただ、私はすこし不思議だった。どうやら霊夢は私という魂とこの人形の関係は自明なもの、つまりもともと何らかの関わりがあると思っっているようだ。そこらへんの『縁』のような感覚は私とは違うのかもしれない。

森を超えて神社の近くまで来たとき、霊夢が「あれ？」と声を出した。

『どうした』

「母屋に明かりが灯いてる」

見ると、たしかに母屋の縁側から前庭に向かって光が洩れていた。

『お客さんか』

「まあ、こんな夜更けに勝手に上がり込むようなのはろくな客じゃあないという気はするわね。めんどくさいなあ……」

霊夢はぶつぶつ言いつつも神社の境内に向かって下りてゆく。

「いちおうわたしの後ろにいなさい」

『分かった』

私は霊夢の背後に回り、同じ速度で降下して行った。

拝殿の前に降り立つと、霊夢は用心深い足取りで母屋へと向かった。私は霊夢の背中に貼付くような形で移動する。

と、霊夢が急に歩みを止めて、溜め息をついた。

「……なんだ、あんたたちか」

「あら、ずいぶん言い方」

私が霊夢の肩からそつと顔をのぞかせると、縁側には二人の人物が座っていた。

夜中だというのに日傘を手にした洋装の婦人。そして、九本の金色の尾を背中に輝かせ、尖った耳の形がそのままの奇妙な帽子をかぶった異国風の扮装の女性。

「お久しぶりね、チビちゃん」

八雲紫さんはにつこりと微笑み、小さく手を振る。

私は縁側に降り立って、お辞儀をした。

『どうも……今晚は。藍さんも』

紫さんの式神である藍さんは口元に小さく笑みを浮かべ、私にうなずき返す。

「二人そろってここに顔出すなんて、ただ事じゃない感じねえ。何かめんどろなこともあったの？」

「いいえ、何も。ちなみに藍がいるのは、ひとりで待ってるのも退屈だったから、すこし相手をしてもらうためにね」

見ると、縁側には明かりの他に、陶製の瓶と杯、それに肴を乗せた皿がいくつか置かれていた。

「人の家に入り込んで酒盛りとはいいい度胸ね」

「ついでに台所と道具も借りた」

藍さんは霊夢に白い陶製の杯を差し出す。

「むろん、材料はこちらで用意したが。酒もな」

「……………」

差し出された杯を霊夢は黙って受け取り、紫さんと藍さんの間に

腰を降ろした。すると、藍さんが丁寧な手つきで霊夢の持つ杯に瓶から酒を注ぐ。

「チビちゃんはここにいらっしやいな」

紫さんが自分の膝をぽんと叩く。

『はあ……いや、あの』

霊夢の顔を見る私に、紫さんはくすりと笑う。

「もしかしてわたしの悪い評判をいろいろ聞いてしまったのかしら」

『いや、そういうわけでは』

すると杯を干した霊夢がすこし無愛想な口調で言う。

「だいじょうぶよ。紫も今更つまらないことをするつもりはないでしょ。それに、今回の件をある程度分かった上でここに来てるんでしょうからね」

「あら、なんでそう思うの？」

「あれだけ屋外でいろいろ派手にやってたわけだし……ま、それに勤勉な式神さんもいることだし」

霊夢が付け加えた一言には藍さんはかすかに笑みを浮かべたが、何も言わなかった。

「まあね。でも、わたしは魔法使いさん二人組がチビちゃんに何を

して、その結果何がどうなったかなんてことはあんまり気にはしてないのよね」

紫さんは縁側へのりから私を抱き上げると、自分の眼の高さまで差し上げた。

「あの吸血鬼のお嬢さんがいったい何を考えてるのか、とかもね」

「なら、いいじゃないの」

「ただ、あなたたち二人の関係がどう変わるかがちょっと気になるわ」

紫さんは私の身体をすんと自分の膝の上に降ろした。

「わたしとしては、当面あなたたちには『安定』していて欲しいから」

『安定……ですか』

「ええ。とても大事なことよ」

すると霊夢はふん、というような顔をした。

「わざわざあなたにそんなこと心配してもらうまでもないわ」

「……まあ、そう言うとは思ってたけど」

紫さんは薄く苦笑を浮かべる。

「とりあえず聞いた話では、チビちゃんが動くための力は自分で補給できるようになったということだから、その点ではかなり身軽な立場になったのは確かなようね」

「いったいどこからどう聞いたのか分からないが、その内容と認識がかなり精確だという点が恐ろしい。」

『そう身軽というわけではないですよ。まだ周りのこともよく知らないですし、どういう眼で見られているかも分からない』

「それに、あなた自身の知り合いがまだ少ないものね」

「はあ？」

霊夢が不審そうな表情で紫さんを見る。

「どういう意味、それ？」

「少なくとも、霊夢の紹介無しに知り合った人はほとんどいないでしょう」

まあ、言われてみれば確かにそうだ。霊夢とともに行動していれば、知り合いは確かに増えるが、それはあくまでも霊夢との関係の延長でしかない。

「それは、わたしから見ればどうってことがなくても、チビにしてみれば『知り合い』になるには面倒過ぎる相手ばかりだからよ。もちろん、あんたもその一人だけど」

「あら、本当に？　こんなバアさんの相手は面倒くさい？」

紫さんは私の頭に指先を当てて撫でる。

『……面倒ではありませんが、緊張します』

「そう？ でもあの吸血鬼だって、場合によってはかなり恐ろしいわよ？ きつとあの見かけで得をしてるのね」

『こういう喩えは変かも知れませんが、レミィには霊夢と少し似た匂いを感じます』

「なっ……」

霊夢は私をびっくりしたような顔で見る。

「何よそれ。聞き捨てならないわね」

『だから喩えだよ、あくまでも』

「つまり、わたしにはその二人に共通するものはないというわけ？」

紫さんは少し真面目な顔つきになって訊く。

『ないというか……色合いが違うというか』

するとそれまで黙っていた藍さんがぽつりと言った。

「むしろ自分の方に近い、ということかな？」

『！』

藍さんの目つきは穏やかだったが、うかつな返しかたはできない
感じでもあった。

紫さんはにやりとした。

「なるほど、面白いわね。その発想はなかったわ」

藍さんは微笑んで軽く会釈を返す。

「……なによ、なんだかさっきからわけのわからない話してるわ
ね」

霊夢が不満そうな顔で言う。

「さて、それじゃそろそろおいとましましょうか」

紫さんは私を抱き上げ、霊夢の膝の上にすんと置いて縁側から
立った。

「へ？ 帰るの？」

「ちよっとおふたりさんの顔が見たかったただだから。藍」

「はい」

藍さんもうなずいて立ち上がった。

「……？」

霊夢は首をかしげて二人を見つめる。

「神社からの月も堪能したしね。まあ、あなたがたもせっかくだからこの宵待ち月をすこし楽しむといいわ。それじゃあ、また」

そう言つと、紫さんは例によつて空間に切れ目を開き、そこへずるりと身体を滑り込ませるようにして姿を消した。

一方、藍さんは空中に浮かび、軽く片手を振つたかと思うとあつという間に上空へと去つて行つた。

霊夢は少しぼんやりとした顔つきで彼らが消えたあとの空間を眺めていたが、やがてふん、と鼻を鳴らす。

「相変わらず何を考えてんだか腹の底が知れないヤツね」

『心配してくれてるんだよ、霊夢のことを』

「わたしには何かあなたに釘を刺しにきた、みたいに思えたけど」

要点だけは直感で理解してところが霊夢らしい。

『まあ、はたから見れば私がわけの分からない存在であることは確かだよ。その分、多少警戒されるのも無理はない』

「わけの分からなさで言つたら、幻想郷にはあなたどころじゃないのがゴロゴロしてるわよ。紫はもちろん、このわたしも含めてね」

『……………』

そういう風に見てくれるのも、霊夢だからこそだ。だが、紫さんの立場ではそうもいかないのだろう。

しかし、彼女のその立場を私がなく感じ取っているというのも妙な話ではある。ま、そもそも私自身、私というものが分かっていないのだが。

その5につづく

その5

5

朝食の後片付けの手伝いを終えた私は、いつものように母屋の縁側で日なたぼっこをしていた。これは、一緒に暮らしているうちにいつのまにかでき上がった習慣で、霊夢が境内の掃除をしている間はここでいわば留守番をすることになっていた。

霊夢と一緒にいる時間は日によってまちまちではあるが、離れている時間というのはだいたいあらかじめ暗黙のうちに決まっていた。これといって決まった仕事もなくこの神社に居候している身である以上、こうした「仕組み」は不可欠だった。同居はしていても、私と霊夢は世間一般で言うところの家族というわけではない。とはいえ、まったくの赤の他人と言い切ることも現状では難しい。

『……………』

私は昨夜の紫さんの言葉を反芻していた。

——当面、あなたたちには『安定』していて欲しいから。

それは、単に仲良く暮らせというようなありふれた忠告とは異なる響きをもつ言葉だった。

逆に考えると不安定ということはどういう状態を指すのだろう？

単に喧嘩をするとか、そういう感情的な対立などとは違うのは確かだ。ならば、何なのだろう。力関係のバランスということか？

少なくとも、現状からの大きな変化は望まないというニュアンスはあった。行動面でも自重して欲しいという風にも受け取れる。

だが、いつまでもこのまま何もせずにごすいうわけにもいかない。この私という存在が無限に続くという保証があるわけでもないのだから。

まずはこの幻想郷、結界によって閉鎖された特殊な世界を実際に自分の眼でよく見て回る必要がある。少なくとも、今の段階ではまだこの世界の内側の仕組みを実感しているという状態にはほど遠い。その上で、自分の「出どころ」を調べるための段取りを考えてゆかなければならない。

ただ、それはそれとしてレミィがこの人形を手に入れた経緯についても見当をつけてゆく必要がある。彼女に口止めをすることができるぐらいなのだから、幻想郷の中でもそれなりの位置にいる者だと考えられる。だとすれば、候補となり得る人物の数はぐっと絞られるはずだ。

いずれにしても、まずはどこから手をつけるかを決めなければならないが……。

と、ふいに私の身体を包んでいた陽の光が遮られた。

顔を上げると、日傘をさした赤い服の少女が目の前に立っていた。

「こんにちは」

彼女が柔らかな笑みを浮かべて私に会釈をする。

『……こんにちは』

私は立ち上がり、お辞儀をした。

『霊夢はいま掃除をしていますが、呼んできましようか？』

「ああ、いいのよ。今日は別に霊夢に用があるわけじゃないから」

そう言つと、少女は日傘を閉じて縁側に腰を降ろした。

「どうぞ、あなたも座つて」

『はい』

私は彼女の整つた輪郭をもつ横顔を見つめた。ウェーブのかかった緑色の短めの髪。すこし釣り上がり気味の瞳の色は赤い。

そこで、ようやく彼女の名前を思い出す。

『風見……幽香さん？』

「あら、覚えててくれたの？ このあいだの宴会で紹介されたときは霊夢も酔っぱらってたし、まともな話ができるような雰囲気じゃなかったから、あらためて挨拶に伺つただけだよ」

幽香さんはそう言つと、首を回して私の顔を見た。

「それと、面白い話も聞いたしね」

『え……』

「ここでは、その手の話はあつという間に広まるのよ。一晩もあれば余裕。なにしろ妖怪が活動するのは主に夜だしね」

『ははあ』

嫌な予感がした。その「話」の中身が何であるかは容易に想像がつく。問題は、それを面白がる理由だ。

「聞けばあなたって、霊夢と同じスペルが使えるっていうじゃない？ しかも今回、なにやら魔法をかけてもらって力も一気に強くなった」

『それは……たぶん誤解を含んでいます。私は霊夢のように特殊な修練を積んだというわけでもないの』

「でも、このあいだは八雲紫のところの黒猫さんを倒したじゃないの、『夢想妙珠』で。あれは間違いなく霊夢の技よ」

『自分の思う通りに力を発動できるわけじゃありません。あのときは相手の攻撃をかくぐった末に訪れた一瞬だけの反撃の機会に、勝手に身体が反応したような感じだったんです』

「なるほど。逆に言えば、力を発動させざるを得ないような、そういう状態に追い込まれればいいわけね？」

ずっと幽香さんが立ち上がる。

まずい。状況が悪化しているような気がする。

「わたしは強い力をもつ者が好き。それが人であろうと人外であろうと関係ない……ただ、手のうちを知っている相手よりは知らない相手のほうがより魅力的に見えるわ」

どうするか。

「生き死にを賭けて戦うというようなことはこの幻想郷ではあり得ない。ただ、相手の力を知っておきたいという欲求は当然起きるのよ。このわたしに限らずね」

『つまり、そういう意味での挨拶を交わしたいと』

「そういうこと」

幽香さんはふたたび笑みを浮かべる。その笑みになんの屈託もないというところが恐ろしい。

『申し訳ありませんが、そういった種類の挨拶は……』

私も立ち上がり、幽香さんを見上げた。

「……？」

一瞬、彼女の表情が動く。その隙を突いた。

静かだった境内の空気が続けて二度、震えた。一度めは小さく、二度めはそれよりやや大きかった。

地面に散らばる落ち葉を竹箒で掃き寄せていた霊夢は、顔を上げ眉をひそめた。

「……？」

少しの間周囲の気配をうかがった霊夢は、首をすこし傾げつつもふたたび箒を動かしはじめた。

だが、その竹箒の動きはひどく緩慢で、掃除としてはあまり効率的とは言えなかった。しかも掃いているのか、集めた落ち葉を散らしているのか、よく分からない。

そんな彼女の前に、黒い影が空中からふわりと降りてきた。

「いよっ」

つばの大きな黒い三角帽子を被った少女は、金色に輝く髪を揺らしながら手を振る。

「ちよっくらお茶をいただきにきたぜ！」

「……………」

「……………霊夢？」

ぼんやりとした表情のまま反応を返さない霊夢に、魔理沙が少し戸惑ったようにもう一度手を振る。

はっとしたように霊夢の眼の焦点が戻る。

「なんか考え事でもしてたのか？」

「ええ？ いや、別に何も。掃除してただけよ」

霊夢は魔理沙を見つめ返して言った。

「お茶でしょ」

「ああ」

霊夢はくるりと踵を返すと、歩き出した。その後について歩きながらすこし遠慮がちな口調で魔理沙が訊いた。

「その、なんだ……チビは変わりないか？」

「うん。いつもと同じよ」

「そうか……」

「もしかして心配してくれてたの？」

「そりゃまあ、昨夜のあれはチビにしてみれば身体を改造されたよ
うなもんだろ？ なんか具合がおかしくなっていないかとか、普通思
うぜ」

「ああ、まあそうね……たしかにね」

拝殿の脇から小道を抜けて母屋の前庭に出る。

「あら？」

縁側にいるはずの小さな人形の姿が無かった。

「ん、どうした？」

「いや、いつもだとそこに座ってるわけなんだけどね……」

そう言いつつ霊夢は縁側に上がり、母屋の奥へと姿を消す。

ややあつて、湯気を漂わせた湯呑を二つと菓子鉢を載せた盆をもつて戻ってきたものの、落ち着いた表情だった。

「やっぱりいないわ」

「どこかに出かけたんじゃないか？」

「だとしてもなにか一言あるもんでしょ。わたしがそこらにいるのは分かってるんだし」

「まあな」

霊夢は魔理沙の隣に腰を降ろし、湯呑を手渡す。

「そつえば、さっきちょっとおかしな気配がしたのよね。何か飛び出して行くような」

「ああ、そりゃわたしもここに来る直前に見たぜ。人の影みたいのがすごい勢いで飛んでった」

霊夢は驚いたように眼を見開く。

「どこから？」

「いや、どこって言われても……一瞬だったからな。ただ、あれはどう考えてもチビじゃなかったぜ。チビだったらもつと小さいはずだ」

「でも、そいつが例えば別の何かのあとを追いかけて行った、ってことだって考えられるわ」

「まあまあ、待てよ」

縁側から立とうとする霊夢に魔理沙が手を上げておさえる仕草をする。

「仮にその何かがチビで、誰かがチビを追いかけて行ったんだとしても、どうしようもないぜ。どこへ行ったもんか見当もつかないし……少なくともこの近くで弾幕を撃ち合ったりしてればすぐ分かるはずだろ。でもそんな気配はない」

「……………」

「それと、チビは確かに人の魂を宿してはいるが、姿は人形だ。妖怪から見れば人間じゃない。だから、いきなり一方的に襲われるってこともないはずだ。最悪でもスペルカード戦を挑まれるだけだろ。」

しかも、この間ここで『お披露目』もしたんだ。主だった連中は、チビが霊夢と同居してるってだけじゃなく、レミリアもからんであることを知ってる。チビはそれなりに安全な立場なんだ」

「それはそうかもしれないけど、万が一ってことがあるわ。あの子どっちかっていうと考え込んだじゃうほうだから、いざとなったら体が動かなくなっちゃうかもしれない」

「だからって、お前がずっとチビの後をついて回るわけにもいかな
いぜ？ 昨日の件だって、そういうことを考えた上でやったんだろ。
お前さ……」

魔理沙が軽く息を吐く。

「たぶん身内っていうものに慣れてないのかもしれないな」

「……！」

「身内のことを心配するのは当然だ。でも、お前はチビのことを全
部分かっているわけじゃない。だいたいあいつ自身、自分が何者か分
からないんだしな。だからこそ余計に心配なんだろう、それも分か
る。だが、何もかも面倒みるってわけにもいかない。そういう関係
に少しづつ慣れていく必要があるんじゃないのか、お互いにな」

「なんかさあ……」

すこし伏し目がちにして魔理沙の言葉を聞いていた霊夢は、顔を
上げると手を伸ばして魔理沙の被っている三角帽子のつばを指先で
軽くはじいた。

「今日はずいぶんいろいろとしゃべるのね」

「普段しゃべることがない分、こういうときにはセリフが頭の奥から湯水のごとく湧き出てくるのさ」

「嘘ばかり」

霊夢は座りなおすと自分の湯飲みを手に取り、お茶を一口すすった。

「でもま、とりあえず忠告は承っておくことにするわ……まずは安定してることが肝腎なんだものね」

「安定？　なんだそりゃ」

「うっん、いいのよ。大したことじゃないの」

霊夢は手を小さく振り、空を見上げた。静かな青い空の上には澄んだ光を放つ太陽が高く上りつつあった。

その6につづく

その6

6

「ちょっと、待ちなさいって！」

後ろから叫び声が追いかけてくるが、振り返らずに飛び続ける。とにかく、いきなり「戦い」というのはいくらなんでもきつすぎる。だいたい、スペルカードの発動のさせ方なんて未だによく分かっていないのだ。

それにしても、かなり速度が出ているような気がするのに、振り切れない。こちらの身体の大きさのせいかもしれないが……。

このまま追いかけてっこをしてもらちがあかないな、と思いながらふと下を見ると、建物が密集している区域が眼についた。幻想郷の人々が住むという『里』だ。

頭に閃くものがあつた。私は里に向かって急降下していった。

建物が両側に隙間なく立ち並んでいる本通りと思しき幅の広い道に接近したところで速度を落とし、人通りが途切れているあたりを見定めて道に降り立った。

背後に気配を感じて振り返ると、幽香さんが立っていて、私を見下ろしている。彼女は緑の髪をかき上げ、不満そうな顔つきで息を

吐いた。

「……考えたわね。でも、さっきも言ったけどわたしはちょっとした挨拶がしたかっただけ。別に殺しあうとかそういうことじゃないのよ?」

『分かっています。幻想郷における戦いはいわば儀式に近いものである種の楽しみでもあると……でも、やはりお互いの力を見定めるための行為でもあるわけでしょう。だとしたら、わたしと貴女の間でそんなことをする必要はないように思います』

「なぜ?」

『力の差が歴然としていますから』

「どうしてそう思うの? まだ何もしていないのに」

『まあ、一種の勘です』

実際、なぜといわれても説明できない。だが、幽香さんには何か桁違いの力が潜んでいるのを感じる。見た目ゆったりとした穏やかなその態度が余計にその印象を強くする。

幽香さんは薄く笑みを浮かべ、こめかみを人差し指で軽く叩いた。

「でも、わたしの『勘』だと、あなたもけっこうやるように感じるんだけど……まあ、ここに来られちゃったら仕方ないわねえ」

彼女は周りを見回す。通りにいた人々は立ち止まり、私たちをすこし緊張した顔つきで距離をおいて見ている。

「それに、ここで暴れるといろいろとるさい人がいるしね。いいわ。あなた自身、自分の力をまだ掴みきってないと感じてるのかもしれない。考えてみれば昨日の今日だものね。でも、いずれはきちんと挨拶させて欲しいものね」

幽香さんはにこやかに言った。その笑顔には、恐怖と言わないまでも、少なからぬ圧迫を感じさせる雰囲気があった。

「それじゃあ、また」

彼女はすつと身体を浮かせると、スカートの裾を翻して飛び去って行った。

『やれやれ』

空の彼方に向かって小さくなってゆくその姿を見送るうちに、ふとまだ周囲の視線が私に向かっていていることに気づいた。まあ、いきなり里に下りてきたわけだし、奇異に思われても不思議はない。しかも、私は里は初めてなので、当然彼らも私が何者かを知らないだろう。

『……………』

とはいえ、この場で人々に何か説明するというのもおかしいし、何事もなかったかのように振舞うのが無難だろう。とりあえず飛んだりすると人目を引きそうなので、そのまま通りを歩くことにしました。いますぐに里を離れても、神社に帰る途中で万が一また幽香さんに出くわしたりしたら面倒だし、少し時間をつぶしたほうがよさそうだ。

多少の視線を浴びながらも私は歩き始め、人々も次第にそれぞれ元の居場所へと戻っていった。

初めて見る人里の家並みは、私にとっては懐かしいようでもあり、異国の風景のようでもあった。黒、灰色、褐色、白といった単調な色合いが続く町並み。表通りに面して立ち並ぶ木造の建物の大半は何らかの商売を営む店らしいが、一見して何の店なのかは分かりにくい。看板や暖簾のたぐいをよくよく見ると、屋号のほかには扱っている品物を示す文字や図柄が描かれたりしているという具合だった。

それらから推測するに、古着屋、道具屋、刃物の研ぎ屋、日用品の修繕屋など、いわばリサイクル業に相当するような店が目立つ。このような環境であればむしろ当然なのかもしれない。一般的な食料品を扱っている店というのがあまりないというのも特徴的だった。せいぜい酒や味噌、漬物などを扱う店があるぐらいだ。保存が利くもの以外は商売にしにくいという事情もあるのだろう。

一方、通りを行きかう人々の服装はモノトーンっぽい周囲の風景から浮き上がって見えるぐらいにカラフルだ。生地柄や模様に関しても派手な感じがするが、色使いもかなり大胆に思える。しかもどう考えても自然物由来ではない化学系の染料を使っているのではないか。和風とも洋風ともつかない混沌とした感じのデザインも少なくない。

間近に見えてきた店の軒先で一人の少女が横長の座椅子に腰を降ろして団子を食べていたが、彼女の外見もなかなか奇抜だった。腰まである銀色の髪に白地に赤の模様が入った大きなリボンをいくつも結び、白いシャツの下にはサスペンダーで吊った鮮やかな朱色のズボンをはいていた。色使いという点では霊夢と同じ紅白だが、も

つと鮮烈な印象を受ける。

その少女が傍らの盆から湯のみを取って中身を飲もうとしたとき、ふと眼が合った。というか、私はあまりにも派手なその少女の外見に氣をとられて、立ち止まって彼女を見つめてしまっていたらしい。

少女の瞳が大きく見開かれた。

「わ……あっ!？」

彼女の手から湯のみが落ち、赤いズボンに包まれた膝の上にお茶が飛び散った。

「熱っちちち……!」

『!』

とつさに少女の足元に転がった茶碗を両腕で抱え上げた。左右に眼を走らせると、水の入った桶が店の入り口近くにあった。一気にそこへ飛び、水を掬い上げて少女の元へと戻り、膝の上に水を振りまいた。

「あっ……ああ」

少女はすこし呆然としたような顔つきで水浸しになった自分の膝と私とを交互に見ていたが、すぐに理解したらしく、笑みを浮かべた。

「ありがとう。どうやら、おかげで火傷しないですんだね」

『いや、こんな身体なのでうまく狙いが定まらなくて……余計なところまで濡らしてしまったようだ』

「どうしたんですかい、妹紅さん」

店の中から団子屋の主人らしき男性が慌てたように飛び出てきた。

「ああ、すっかりして湯のみを落としてね。その小さいヒトが火傷を防ぐために水をかけてくれた」

「……いま、布巾をもってきますよ」

男性はうさんくさそうに私を一瞥すると、いったん店の中に引っ込んだ。

『もしかすると、私のせいで貴女を驚かせてしまったかな』

「いや、お前さんのせいじゃないよ。強いて言えばわたしの修行不足かな」

少女はのんびりとした口調で言う。

「妹紅さん、どうぞ」

ふたたび出てきた男性から布巾を受け取ると、少女は私を手招きした。

「お前さんもけっこう濡れてるな。おいで、先に拭いてあげる」

『いや、私は……』

「遠慮するなよ。急いで水を掛けてくれたおかげで助かったんだしね」

そう言つと、宙に浮いていた私の身体を引き寄せて、濡れた服を拭いてくれた。

「わたしは藤原妹紅というんだけど、お前さんは？」

『チビ霊夢という。周りの連中はチビと呼んでいる』

「チビね。そうか、あの巫女と関係があるのか」

『いまのところ神社に居候しているんだが……霊夢とは知り合いかな？』

「そうだな、顔は知っているというぐらいかな」

少女は私を拭きおえると、自分のズボンは適当に拭いて布巾を絞り、男性に返した。

「悪かったね、手間をとらせて」

「いえ、なんてことはありませんよ」

せつかなので、私はこの男性に訊いてみることにした。

『ひとつづかがいたいが、私のような者が昼間からこのあたりを……人里をうろついているというのはあまり誉められたことではない』

のですか？」

「えっ……いや、別にそんなことはないですよ、ええ」

彼はすこし焦ったように手を左右に振る。

「ここは人間もそうでない方も集まるところですからね。人間と同じように振舞ってもらえれば誰も文句は言いません」

すると妹紅が私に向かって訊ねる。

「お前さんが神社に居候するようになったのは最近か？」

『ひと月経ったかどうかというところだな。それに、人里に来たのはこれが初めてだ』

「なるほどね」

妹紅は顎の先あたりを人差し指の先で撫でる。そういう仕草をしていると存外子供っぽい顔にも見える。

「まあ、あまり馴染みのない奴が相手だと、初めのうちは周りも警戒するだろうが、要はお互いに見慣れればいいということさ」

言われてみれば確かにその通りだ。

「なんだつたら、そんなに手間をかけずに里の連中がお前さんのことを知ってくれるという方法がある。わたしがとある奴のところに
お前さんを連れて行って紹介すればいいんだ」

『里の代表のような人か？』

「うーん……まあ、代表というにはどうかという気がするが、わりと知られている奴ではあるんだ。どうだ」

有名な人物であれば、そこを経由して話が広まりやすいということなのかもしれない。

『もしできるなら、それはそれでありがたいが……いいのか、そんなことに付き合ってもらって』

「かまわないさ、どうせ暇なんだ。それに、火傷を防いでもらった恩もある」

少女は長椅子から立ち上がると、私たちのやりとりを神妙な顔で聞いていた店の男性に、シャツのポケットから貨幣らしきものを取り出して手渡した。

「これ、勘定ね」

「毎度どうも……」

男性はこんなのかかわっていいのかね、という感じの顔をしていた。無理もない。

「じゃあ行こうか」

妹紅は私を片腕で抱き上げた。

『あ……』

「飛ぶと目立つからな。それに人形は人に抱かれている姿のほうが
おさまりがいいさ」

霊夢とはまた違った身体の感触だった。

その7につづく

その7

7

移動する道すがら、私は妹紅に自分が神社に居つくようになった経緯を大まかに話した。気がついたときには霊夢の身体の中に魂だけの存在としていたこと、それ以前の記憶がないこと、そして依り代のこの人形の中に多くの人の手をわずらわせる形で移されたこと……。

「そうか、大変だったんだな」

『もう過ぎてしまったことだがね。問題はこれからなんだ』

「というと？」

『自分がどこから来た、何者なのかということを知りたいんだ。そうしないと、自分がこれから何をすべきかも分からない』

すると、妹紅はすこし黙りこんだ。

どうしたのかと気になって妹紅の顔を見上げると、彼女ははつとしたような表情になって小さく首を左右に振った。

「ああ、いや……それもまたかなりの難題だなと思ってね」

『確かにね。ただ、何か目的があつてここに來たのなら、それを思い出す必要がある』

「だが、逆の考え方もあり得るんじゃないか？　つまり、ここに来ることそれ自体が目的だったのかもしれない。だから、ここに来る前のことは必要ない過去だから忘れてしまった、とかね」

『！』

軽い衝撃だった。そういう考えは今までまったく思いつかなかった。

「……なにかまずいこと言つたかな？」

『そんなことはないが、驚いたんだ。そういう風に考えたことがなかったから』

「まあ、思いつきだよ。なにしろこの幻想郷は、外で行き場がなくなった連中が最後に流れ込んで来るような場所でもある。人の魂だつてそういうこともあるかもしれないと思つたのさ」

『なるほど』

行き場がなくなった連中が最後に流れ込んで来る……。

この土地の生まれではないらしいレミィやアリスも、やはりそういった事情をもつ人々なのだろうか。

「自分であつた記憶をなくしたままというのは、つらいものか？」

『いや、つらいということはないが。ある意味ではむしろさっぱりしている感じでもある』

「そうか。まあ、自分が何者かを知らうとする考えそれ自体は大切なことだと思うが、いま現にある自分を尊重することも大事だという気がするな。記憶がないとしても、今のお前さんの考え方を形作っているのはそれまでに積み重ねた年月だろう？　だから、お前さんはすべてを失ったというわけじゃない」

記憶がなくとも、思考の流れそのものを方向づけている性質のよくなものは失われていないということだろうか。その性質が元の私のものだという保証はないが、すべてを失ったわけではない、というのは気持ちの上では楽になる考え方だ。

『……………』

幻想郷に来てからというものの、外見とはかけ離れた知性や風格をもつ人たちに出会ってきたが、この妹紅の場合はほかの連中とは少し違うような気がする。もっと違う次元から世の中を眺めているのかもしれない……。

と、彼女は口に手を当てると、「ふぁ……………」と大きくあくびをした。

『え？』

私は急に現実に戻されたような、妙な気分になった。

「ああ、失礼。なんだか、さっきから少し眠気を感じてて……」

妹紅の歩みが急にゆっくりになり、身体が揺れる。

『……妹紅？』

「うーん、こりやおかしいな」

妹紅はがくん、と膝をつく。その拍子に私は妹紅の腕から転げ落ちそうになり、あわてて空中で体勢を立て直した。

『大丈夫か？ 身体の具合が悪いのか？』

「いや、違う。気分が悪いんじゃない、ただ眠いんだ。しかしどうしたんだろう、こんなことは……」

そう言いながらも、道の上に座り込んでしまった。

「このままわたしがのびたんじゃお前さん困るよな。そのわかれ道の先……左側に大きい家があるだろう」

妹紅は、膝をついたままの姿勢で古い塀の向こうに見える茅葺屋根の家を指差した。

「あそこに紹介しようとした相手が……」

だが、最後まで言い終えないうちに、妹紅はがくりと地面に倒れてしまった。

『妹紅、おい？』

私は空中から妹紅のそばに降り立ち、左の胸に耳を当ててみた。

鼓動はきちんと規則的に聞こえる。特に弱まっているという感じも
しない。

顔色を見てもとくにおかしくはないし、呼吸は穏やかだった。

『眠っているだけか……？』

そのとき、突然悲鳴が聞こえた。

驚いて顔を上げると、何人かの子供たちが道に出てきていて、こ
ちらを指差している。

と、その声に反応したように一人の人物が塀の向こうから出てき
たかと思うと、恐ろしい勢いで駆け寄ってきた。

「お前、そこで何をしている！」

大声で叫ぶその人物の形相を見てこれはまずい、と思ったが、さ
りとしてここで逃げ出せば誤解がさらに重なるだろう。

『参ったな……』

博麗神社の母屋に、魔理沙と入れ替わる形で一人の妖怪が訪れて
いた。

「結局あんたの仕業だったのね」

「そういう言い方はないんじゃない、霊夢」

縁側に腰掛けた幽香はゆったりとお茶をすすりながら言う。

「わたしはただ挨拶をしようと思っただけ。そうしたら、あの子に断られちゃって……というかいきなり逃げ出すんだもの。追いかけてみたくなるのは狩人の性というものよ」

「あんたなんかには狩られた日にはたまったもんじゃないわ。それにしても、チビもよく頑張ったものね。追いつかれずに人里までたりつけたんだし」

すると幽香はむっとしたように言い返す。

「わたしだって全力で追いかけたわけじゃないわ。怯えさせたら悪いと思っただし」

「まあ、その場に居たわけじゃないから分からないけど、あんたに追いかけられたってだけでチビは十分に怯えたでしょうね。見た目はかわいい女の子でも、中身は恐ろしいってことをきくと感じとつたに違いないわ」

「それ、誉めてないわね？」

「誉めても貶してもいないけどね」

霊夢はにやにやする。

「ちえっ、なんだか面白くない」

「どっちにしても、チビにあんたの相手は務まらないわ。手加減しながら遊び道具にするっていうのもお断り」

「……本人にも言ったんだけど、あの子はけっこうやると思うわよ。小さいなりだからって、油断はできない。むしろ力技に頼るような相手よりもやりにくいと思う」

「そうかなあ」

「戦いでは冷静な心というのも大事よ。わたしはこないだの宴会で黒猫とやった戦いをずっと見ていたけど、あの子は戦いの最中にも『考え』て動いていた。計算した行動を積み重ねた上で一撃で相手を倒したのよ。そういう戦い方ってなかなかできるものじゃないわ、よほどの余裕がなければね」

「……………」

「まあ、霊夢の場合はあんまり『考え』て闘っているという感じじゃないから、分かりにくいかもしれないけど」

「それじゃまるでわたしの頭の中が空っぽみたいじゃない」

「空っぽではないわ。心そのものはしっかりある。でも『考え』はない。それはそれでまた戦う相手としてはやりにくいよね」

「まったく、分かりにくい話ばかりするわね……」

霊夢は手元に置いたあった自分用の茶碗を手にとった。

「まあどっちにしても、里でなら大した問題はおきないでしょうけどね」

「分からないわよ。うるさ型がいるじゃない、ひとり。こういうの」
幽香は両手の人差し指を立てて、頭の上で上下させて見せる。角を示しているようだ。

「あの人、あんまりあなたのことはよく思っていないんでしょう？ 巫女の服着た人形なんて目障りだーとか言い出すんじゃない？」

「でもまあ、いちおう人の中で暮らしてるんだから……人と同じ常識ってものはあると思うわ」

倒れている妹紅とその側にいる私の目の前に来たその人物は、仁王立ちになって言った。

「妹紅様に何をした！ 答えによつてはただでは済まさんぞ」

長い裾のワンピース風の服装からして女性であることは間違いないが、頭に小さな箱型の帽子のようなものを乗せていて、すこし風変わりな印象がある。

『いや、私は何もしてないです。突然、倒れてしまったので……』

「嘘をつけ。妹紅様はそんな弱い方ではない。しかも、お前の発し

ている妖気はそのあたりの妖怪など比べものにならん。何者だ！」

『ええとですね』

こつという状況で頭から経緯を説明しようとしても無理だ。

『私は博麗神社に居候している者なのですが……』

「神社に妖怪が居候しているなんて、わたしは聞いてないぞ。だいたい、わざわざ巫女そっくりにしたその姿が怪しい。人目をこまかすためのまやかしに決まっている」

『困ったなあ』

これでは会話が成立しない。おそらく妹紅が紹介しようとした人物は彼女らしいが、かなり気が短いのか、それとも妖怪という存在に対してある種の反感を持っているのか。

と、彼女はふいにすばやい動きで私の腕をつかんだ。

「おまえの妖気の源はここだな。何かついているようだ」

『あ、それは無理に外そうとすると……』

だが間に合わなかった。

「ぐあっ!？」

慧音さんの上半身が激しく痙攣したように震える。あわてて彼女は私から離れ、勢いあまって尻もちをつく。

「なっ……貴様、あやしい術を」

『術っていうか、私自身がやったわけじゃないんですが……』

パチユリーご自慢の自動迎撃魔法が電撃を加えてしまったらしい。

「ええい、言いわけなど聞かん！　こうなったら、わたしと勝負しろ。貴様が負けたら、二度と人間の里には立ち寄るな！」

『そんな無茶な……』

「無茶なものか。これが、この幻想郷での決着のつけかたというものだ」

戦いたくないばかりに里に来たというのに、これでは意味がない。しかし、この状況で逃げてしまつては、かけられた疑いを認めるに等しい。

やはり幻想郷で暮らすからには、この『儀式』は回避できないものなのか……。

私は服の中に霊夢から万が一のために、と渡されたスペルカードがあるのを確かめてから言った。

『やむを得ません。その代り、私が勝つたら、こちらの話を聞いてもらいますよ』

その8につづく

その8

8

「ん……いまなんか音がしなかった？」

人里に置き薬売りの巡回で来ていた鈴仙・優曇華院・イナバは頭の上に立つ兎型の耳をぴくりと動かして言った。

「音なんてそこらじゅうでしてるじゃん」

荷物持ちでついてきていた因幡てゐはめんどくさそうに答える。
実際、里の中心近くはそれなりに人通りもあるのであちこちから人の話し声もするし、職人が作業をしている音なども聞こえる。

「そうじゃなくて。あれは普通の音じゃない……ちょっと行ってみましょう」

気配を察して側から離れようとしていたてゐの腕をつかまえると、鈴仙はひきずるようにして歩き出した。

「なんだよ、そんなのほっとけばいいじゃないか。どうせ馬鹿な妖怪かなんかが暴れてるんだろ。そのうち、例の牛のバケモンあたりが片づけに行くよ」

「いいから来なさい。里で何か気になることがあつたらちゃんと調

べて報告するようにつてお師匠様にいつも言われてるでしょう」

「まったくクソ真面目なんだから……」

ぶつぶつ言いながらてゐは仕方がないという顔つきでついてゆく。

「あつ、ちよつと見て。何か光ったわよ。あれ、弾幕じゃないの」

鈴仙が上空を指差す。

「えつ、マジ？」

昼間から人里の近くでスペルカード戦が行われるというのは尋常ではない。できるだけそのような事態は避けるよう、暗黙の了解が成立しているはずだからだ。

「こりや面白そうだ。鈴仙、わたしちよつと先に行つてみてくるわ」

てゐは持つていた荷物を放り出し、弾幕が輝いている方角に向つて一直線に駆けていく。元が兎だけにその速さは尋常ではない。

「あつ、待ちなさい、てゐ！」

やはり、こんなことで戦いを始めたのは失敗だった。今さらだったが、気の短そうな人だから案外と与しやすい相手かもしれない……そう考えたのが間違いだった。思い上がりもいいところだ。

弾幕の密度が高い。上下左右まんべんなく飛んでくる。どこから撃ち出しているのかさえ分からない。軌道はほぼ読めているし、追尾型の弾はないので回避できているが、気を抜くとすぐにやられてしまいそうだ。

しかも、こちらは反撃ができる状態にない。霊夢の霊気を吹き込んでもらったときに感じた、身体の芯が研ぎ澄まされているようなあの感覚はない。むしろ、内側からなにかが膨れ上がってきて、噴き出てきそうな苦しさがある。だが、それをどう『出せ』ばいいのかが分からない。

動ける空間が広く、弾を回避する際の位置的な制限がないので、その点では楽だ。ただ、相手に逆方向に回り込まれてしまうと、結局はお互いの位置が入れ替わるだけなので、あまり意味がない。むしろ動きがパターン化して、相手につけこまれてしまう。

どうやら今の状態では自分で意識的にスペルカードを発動できないようだ。ただ、さつきから何かが『出そう』な感じはある。何かきっかけがないと駄目なのか……。

「何してんだろう、あいつ……ねえ？」

川沿いの道端に立ち、腕組みをして上空を眺めていたてゐは傍らの鈴仙に向かって言う。

「……何が？」

現場に着いたばかりの鈴仙はてゐの放り出した荷物まで一緒に持ってきたせいで、息を切らしていた。

てゐはそんなことは頓着なく、上空の弾幕戦の様子を見つめながら首をかしげつつ言う。

「あの例の人形さ。こないだ神社の宴会で観たときと同じで、スperlは発動しないで相手の弾を避けてばかりなんだけど、なんだかおかしいんだよね。前は弾避けしながら相手に近づいて行つたのに、今回はそんな感じじゃないんだ。あれじゃ決着つかないと思うんだけど」

「それだけ押されてるってことじゃないの？ それにしても、弾数がやけに多いわ。あのハクタクも大人げないっていうか……あんな小さい相手にかなり本気でやってるみたいね」

「どうも原因はアレみたいだよ」

てゐは上空を見上げたまま、親指を立てて背後に向ける。

鈴仙が後ろを振り返ると、古い廃屋が見え、その軒先の日陰になつている場所に藤原妹紅が横になっていた。目を閉じたまま、ぴくりとも動かない。

「なつ、何あれ……」

「われらがご主人様の天敵だよ」

「それは見れば分かるけど、どういうこと？ 誰かにのされた……まさか、あの人形に？」

「そう考えれば一番簡単だけど。でも、ちょっとそれはないと思うんだよね。あの死にぞこない娘がそんなチョロい奴じゃないってことは、あんただって知ってるだろ？」

「それはまあ……っていうか、妹紅様に対してそういう言い方やめなさいよ」

「だいたい、あのチビはけっこう誰に対しても愛想が良かったじゃないか、まあこのあいだの宴会は『お披露目』だったんだから、当然といえば当然なんだけどさ」

てゐは鈴仙の言葉は無視してそのまま話を続ける。

「わたしになんか最初は『てゐさん』とか言ってたんだよ。そんな『さん』づけなんか気持ち悪いよって言ったら、なんだかすごく目上の人のような気がしたからって。あんなこと面と向かって言われたのはここに来て以来初めてだよ」

「そんなことより……いいの、妹紅様をあのままほっておいて」

「わたしらが介抱する義理はないだろ。だいたい不死人なんだし、どうってことないさ。身体が粉々になったって元通りになるんだから」

「それはそうだけど……」

鈴仙はおそろおそろといった感じで妹紅の近くに歩み寄ってゆき、

そばにしゃがみこんで様子をうかがってみた。

見た限りでは身体にはなにも異常はなく、かすり傷ひとつ見当たらない。それに、かすかだが胸が動いており、呼吸も安定しているようだった。

「寝てるだけ……？」

と、腰のあたりで何かがぴくりと動くのが眼にとまった。

「え……なに？」

ふたたび、ぴくぴくと震えるような動き。どうもズボンのポケットの中でなにかが動いているようだった。

「なんなの……」

そつとポケットの近くに触れてみると、突然さらにばたばたという動きが起きた。

「えっ、何、やっ……！」

「何ぶつぶつ言ってるだよ、鈴仙」

てゐは振り向いたその瞬間、驚くべき現象を目の当たりにするこ
とになった。鈴仙が身を引いた拍子に引っ張ってしまったポケット
の、その内側から細長い札のようなものがすごい勢いで空中に飛び
出していったのだ。

「えっ……！」

あわててその行方を視線で追うと、それは弾幕戦の真っ最中の上空へと向かってゆく。

「まさか……あれ、スペルカード？ 鈴仙？」

鈴仙は眼を大きく見開いたまま震えていた。

「なんだよ、どうしたの？」

「ほんの一瞬だけど、視えたの……すごい力の線……それに沿って飛んでいった……」

「何言ってるんだか分かんないよ！」

が、同時にぞくつという悪寒がてゐの背筋に走った。

その9につづく

その9

9

弾を「見て」いらなくなってきた。

光の列が、目の前に迫る。身体が反射的に横に動いた次の瞬間、腹のすぐ近くを恐ろしい勢いで光弾が通過する。と、反対側から別の光弾の列が飛んできて、また逆方向に身体が動く。

このままでは相手に接近ができない。弾幕の密度が高いし、接近できたとして果たしてスペルカードを発動できるかどうか。

いつそ、相手の攻撃を避けずに当たってしまった方がいいのか？

だが、身体はもうほとんど勝手に動いていた。まるで、『死にたくない』と叫んでいるかのように。

壊れてしまいかもしれない……。

ルール上では殺し合いではないはずだが、私の場合、魂の器であるこの人形が破壊されればそこで終わりになる気がする。

とにかく、このままでは駄目だ。

力は、溜まり過ぎるほどに溜まっている。身体の中で、暴れまわ

っている。

きっかけが欲しい。

この溜まったモノを開けるカギになるものは、ないのか。

朦朧とした意識の中、何か聞こえたような気がした。

『？』

同時に、音を立てて手の中に飛び込んできたものがあつた。

瞬間、頭の芯を言葉が閃光のように突き抜ける。

『蓬莱人形』

胸がはじけ飛ぶような感覚。四肢の先へ炎のように熱の塊が拡がる。

周りの空気が唸りをあげ、身体全体が激しくゆさぶられる。その振動に同期するように、前方に流れるような赤と青の光弾の列が噴き出ていった。

さらに白色の光弾の群れが続けざまに撃ち出される。その中で、赤と青の光弾はまるで一對の蛇のようになり、回転しながら繰り返し相手に向かって攻撃を加え続けていった。

ひどく他人事のような『遠い』感じだった。自分がやっている事だという気がしない。

慧音さんは懸命に弾の群れを回避しようとしていた。

だが、ついに白弾の一つに接触し、そのあとたて続けに赤と青の光弾の列に衝突した。

姿勢が崩れ、短い叫び声が聞こえたよう気がした。

彼女の身体はそのまま力を失ったように地面へ向かって降下してゆく。

『……………』

私の内側にあつた異様な圧迫感が急激に下がり、それと同時に意識が薄くなってきた。

まずい。

このままだと私も落ちてしまう……。

と、そのとき、耳元で声がした。

「お疲れさん。もうくたくたなんだろう？」

『誰だ……？』

「誰でもいいだろ。もう全部終わったんだしね」

声の主はそう言つと、私の身体を抱き寄せた。

「いいから、そのままお休み。あとはわたしらにまかせな」

『……済まない』

気がつくと、私は広い和室に敷かれた蒲団に寝ていた。人形の身には分不相応の、人間一人分の蒲団だ。

周囲は薄暗い。まだ夜ではないようだが、障子越しに入ってくる光はくすんだ色を帯びていて、弱い。

と、穏やかな足音が近づいてきて障子が開き、銀髪の背の高い女性が現れた。赤と藍の二色で上下左右を塗り分けた独特の服を着けている。よく見ると看護婦さんの服のように思えないこともない。

「気がついたのね。ちょうど良かったわ、膏藥を貼り替えようと思っていたから」

枕元に膝を折って座る。

『あの、此処は……』

「永遠亭と呼ばれている家よ。わたし自身はあまりこの呼び名は好きじゃないんだけどね。あ、動かなくて大丈夫よ」

彼女は私を手で制すると、掛け布団をはいで私の身体を抱き上げ、自分の膝の上に置いた。

「気分はどう？ 正直、人形の身体を診るといのは初めてだったんだけど、必要な措置はだいたい見当がついたから勝手にやらせてもらったの」

『ええ、大丈夫です。さつきは全身が焼けているようだったんですが……いまはおさまっている感じです』

「それは良かったわ。まあ、人に喻えるなら消化不良ということだね。身体に力が溜まり過ぎて、吸収することも出すこともできなくなっていたのよ。だから、それを外に出すための薬を貼ったの」

見ると、私の両腕両脚すべてに包帯が巻きつけられていた。

『私はチビ霊夢と言いますが、先生のお名前を伺ってもよろしいですか？』

「わたしは八意永琳という者よ。この永遠亭の主、蓬莱山輝夜の従者でもあるわ」

『……………』

その容貌、とくに切れ長の美しい瞳とくつきりとした細い眉には聡明さとともに意志の強さが滲み出ている。紫さんとはまた違った風格を感じさせる人だった。

「それにしてもあなたの身体、かなり凝った仕掛けになっているわね。相当な知識と技術がないとこんな仕組みは作れないでしょう。ただ、残念ながら実用性というところでは少し問題があったわね。力を吸収するなら、対象をきちんと選べるようにしておかないと」

『それは……？』

永琳先生は口元に笑みを浮かべる。

「要は、力の吸い込みをあなた自身が意識できるような仕組みになつていた方が良かったのよ。たぶん、慣れてくれば制御できると考えたんでしょし、それは必ずしも間違いではないんだけど、設計としては親切だとは言えない」

『なるほど』

「とりあえず応急の処置として、力の伝導路をあなたの左手の人差し指に延長しておいたわ。指先は敏感で意識しやすい部位だから、そこに位置を変えることで制御がしやすくなると思う。どう、いま分かる？」

言われて意識してみると、確かに左の指にかすかな『流れ』のようなものが感じられた。

『分かります。指先から腕の中に通っていく感じが』

「それは意識すれば感じ取れる、ぐらいのかすかなものだと思うけど、自分の意思に沿って制御したいときにはきつと役に立つはずよ」

腕と脚に貼られた膏藥を手際よく替えながら彼女は言う。

「まあ、あとはその仕組みを設計した人に改良してもらうのね。たぶん見れば本人は分かるわ」

『本当に……いろいろありがとうございます』

「これが生業だから。と言ってもまだこんなことを始めてからたいした時間も経っていないけど、そこそ役立っているなら幸いね」

包帯の巻きつけ直しがすべて終わると、私の身体はふたたび寢床に戻され、布団を掛けられた。

「余計な力が出て行ってしまうば、元通りになるわ。あとで神社に使いを出して、巫女さんに迎えに来てもらいましょう。それから念のために言っておくけれど、診察代は今回は無料よ。勝手に連れてきて勝手に処置をしたんだしね。わたし自身もあなたのような特殊な患者を診ることでいろいろと得るところがあったから、それで相殺ということ。それじゃあ、お大事に」

そう言つと、彼女はこちらに何か言おうとする間も与えまいという感じで、すばやく身をひるがえして障子を開閉して部屋から出て行ってしまった。

『……………』

私はしばらくの間ぼんやりと障子を見ていたが、気を取り直して状況を頭の中で整理することにした。とにかく、考えなければならいことが多過ぎる。

その10につづく

その10

10

昼を過ぎ、山の方から雲が出始めた頃。

博麗神社の母屋で、縁側に座っている人間二人と前庭に立つ兎耳の小柄な妖怪が向きあっていた。

てゐの説明を聞き終えた霊夢はやれやれといった表情で言った。

「考えられる限りで最悪のことが起きてるような気がするわね……」

「そうでもないんじゃないか？ こいつの話を聞く限りじゃ、チビは被害者だぜ。勘違いされて攻撃されたから、やむをえずチビが反撃したら相手がやられてぶっ倒れたという話だろ？ で、チビはチビで力の出し過ぎで気絶と」

「そうそう、そういうことだよ」

魔理沙の言葉に、てゐがうなずいてみせる。

「わたしから見ても、どっちかっていうとハクタクの方が考えなしだったと思うね」

「しかしアレだてゐ、現場にいたんだったらまずこっちに連絡を

よこすのが筋じゃないか？　いくら師匠が天才薬師だからって、人形の面倒まで見られるかどうか分からだろ。お前はこないだ宴会に来てるんだから、チビの言ってみりゃ『生みの親』に当たるのがアリスとパチュリーだってことぐらい知ってただろう」

「そんなこと言っただって……」

てゐが言い返そうとすると、霊夢が手を上げてそれを制し、魔理沙に向かって言った。

「この子には、里で騒ぎを起こしたチビの面倒をみなきゃならない義理なんてないんだから、本来なら放っておかれても文句は言えないのよ。わざわざ永遠亭まで運んで助けてもらっただけでも恩の字。感謝するわ、てゐ」

霊夢は縁側から降りてぺこりと頭を下げた。

てゐは一瞬ぎよつとしたような顔をして、一歩後ずさりする。

「ああ……いや、別にそんなことしてもらわなくてもいいんだけど。わたしはあいつのことはけっこう気に入ってるし……礼儀正しくていい子だからね。助けたのは当然さ」

「……………」

魔理沙は訝しげな顔つきで二人を見較べたあと、息を吐いて言った。

「まあ、どっちにしてもチビが無事ならそれでいいさ。霊夢、迎えに行くんなら行って来いよ。帰ってくるまで留守番しといてやるか

ら」

「ああ、そうね……じゃあ、お願いするわ。それじゃ」

てゐるとともに霊夢が姿を消したあと、魔理沙は誰もいない庭を黙って見ていたが、やがて誰かに話しかけるように言う。

「そろそろ降りてきたらどうだ？ いいかげん屋根の上で日向ぼっこするのも飽きたろう。天気も崩れてきたしな」

縁側の前に、人影がふわりと降り立つ。

手にしていた日傘を閉じたその少女は笑みを魔理沙に向けて言った。

「あら、分かってたんだ」

風見幽香だった。

「霊夢に何か言いに来たんじゃないのか」

「うーん……ちょっと迷っちゃってねえ」

「迷う？ お前らしくもない。だいたい、チビがこんな目に会ったそもそもの原因はお前だろ？ 謝れとは言わないが、なにか一言挨拶があってもよさそうなんだ」

「これでもいちおう気にしてはいたのよ。あの後もなにか変わったことがあったら様子を見に行こうと思って、里の近くをぶらぶらしてたし。そうしたら、うまい具合にいいものを観ることができたわ

よ

「いいもの？」

「あのチビさんが戦ってる現場よ。だから、さっきの兎ちゃんの話にはちよつと抜けてることがあるっていうことも言えるわけ」

「どういうことだ？」

魔理沙は眉を寄せる。

「あのおチビさんが歴史喰いを倒した技は、霊夢のものではないということよ。霊夢とは何度も戦ってるわたしが言うんだから間違いはないわ」

「じゃあ、誰の技だったって言うんだ？」

「さあ、それは分からない。残念ながら、わたし自身は見たことがない技だったから。ただ、威力はかなりのものだった。歴史喰いは相当なダメージを喰らってたわよ。終わった後、しばらく動けなかったみたいなもの」

「……………」

「あれが、あのチビさん自身の技だとは考えにくいけど………霊夢以外の奴のスペルを使えるとなると、それはそれでけっこう怖いわよね」

「……………なんでそれを霊夢に直接言わないで、わたしに言うんだ？」

「そうねえ。簡単にいえば、嫌がらせかな」

「いったい、何が気に入らないんだ？」

「気に入らないってわけじゃないんだけど……あのお人形さんは、
霊夢にとってはあまり好ましい存在じゃない気がするのよね」

幽香は屈託のない笑顔で言う。

「なんというか、霊夢の力を『弱める』気がするの」

魔理沙はやれやれといった顔つきで首を振る。

「妖怪つてのはおかしなもんだな。本来はヒトは敵なのに、強い敵
には強くあり続けて欲しいと願うんだな」

「そうじゃなきゃ、退屈だもの」

「お前らしい言い草だよ。だが、霊夢には霊夢の都合つてもんがある」

「友達思いの魔理沙なんて、あんまり見れたもんじゃないわね」

幽香は肩をすくめる。

「まあいいわ。わたしは今まで通りのやりかたで事に当たるだけよ。
相手がヒトであれ、妖怪であれ、何であれね」

そう言うと、幽香は空中へと浮き上がった。

「それじゃ、おチビさんよろしく」

一瞬の空気の震えとともに、飛び去る影。

それを見送った魔理沙は、息を吐いた。

「意地を張り続けるつても大変だな」

「どうやら余計な力は抜け出てくれたみたいね。もう普通に動いても大丈夫でしょう」

私の腕と脚に貼られていた膏藥を剥がした跡を丁寧に布で拭き取りながら永琳先生が言う。

「うどんげ、チビさんの服はある？」

「はい、こちらに」

後ろに控えていた細長い兔耳の少女、鈴仙さんが立って、私の服を持ってきてくれる。

「じゃあ、着るのを手伝ってあげて。さすがにこんな凝った造りの服だとこのひと一人じゃ着れないわ」

『ああ、大丈夫ですよ。もう割と慣れているので』

私は裸の状態で立ち上がると、服を受取って襦袢、袴、白衣の順に身につけていった。

「ふうん、とても人形の動きとは思えないわね……」

先生が感心したような顔をする。

「わたしの印象だと、もっとぎくしゃくとした動きをするものだと思うっていたから」

『この器に入ってから、それなりに時間が経ちましたから』

「服は巫女さんに作ってもらったの？」

『いや、これはもともとこの人形が着ていたものらしいですね。神社に仕える巫女の本来の装束に近いようです』

「確かに、いまの彼女が来ている服よりも和服らしいものね」

足袋をはき終え、いちおう身なりが整っていることを確かめると、私は畳の上に正座して、永琳先生にお辞儀をした。

『いろいろとお手数をかけ、お世話になりました。あらためてお礼申し上げます』

「そういう風に生真面目に言われてしまうとね……ほんとに、たいしたことをしたわけじゃないから。うどんげ、何を笑ってるの」

「いいえ、別に」

眼を細めている鈴仙さんが口元を隠すしぐさをする。

「まあ、とにかく無事に治って良かったわ。正直、騒ぎが大きくなると、もっといろいろな所に飛び火しそうな気がしたから……そういうこともあって、里から知らせをもらったとき、すぐにうちに来てもらうのが無難だろうと考えたのよ」

おそらく私を取り巻く事情に関してはほとんど把握済みなのだろう。だとすれば、彼女が言う『飛び火』の場所も見当はつく。

『ご配慮、ありがとうございます』

私が再びお辞儀をしたとき、障子の向こうから声がした。てゐの声だ。

「お師匠様、霊夢……さんを連れてきました」

「ああ、御苦労さま。入ってもらって」

わずかな間があってから、障子が開いた。

膝をついた霊夢の姿が現れる。彼女は立ち上がると再び膝をついて障子を閉め、それから私の横に並ぶ形で正座して永琳先生と向き合った。

「今晚は。うちの居候がえらく迷惑をかけたようね。少なからず私の責任でもあるから、お詫びさせてもらうわ。本人はちゃんとお礼を言ったかしら？」

「もちろんよ、ついさっきも丁寧だね……それはともかく、この小

さい人は見かけと違って肝が据わっているわね。この幻想郷では得難い人物だと感じ入った次第よ」

「わざわざあなたがお世辞を言う理由はないでしょうから、額面通り受け取ってもいいんでしょうけど。でもまあ、わたしからみると扱いが面倒なやつよ。妖怪や宇宙人なんかより、よっぽどね」

すると、永琳先生はくすりと笑う。

「少なくとも、力押しは効かない感じだものね。やりにくい相手よね」

「そこまで言われる筋合いはないわよ」

私はすこしはらはらした。機嫌が悪いわけではないのだろうが、口調が少しきつい。

『ええと、霊夢』

「なに？」

『永琳先生は、私の治療代はいらないっておっしゃって下さってるんだが……』

態度を改めてもらおうと思って言ったのだが、効果は別の方に向いた。

「それは困るわ。もう借りをつくるのは御免だし」

「本人にもあなたにも了承もなしに勝手に診させてもらっただけだ

から、いいのよ」

「そうは言っても、それじゃけじめというものがつかないわ」

霊夢は首を振り、それから私を見て言った。

「しょうがないわ。チビ、あんた自分の身体で返しなさい」

『は？』

「は、じゃないわよ。他人の世話になっておいて、何も返さないなんて許されるわけないでしょう。どう、永琳。猫の手よりはマシだと思っから、掃除でもなんでも使いどころはあるんじゃない」

「そうね……まあ、そこまで言うならすこし考えておくわ」

先生は苦笑を浮かべる。

「でも、今日はとりあえず帰ってもらって結構よ。何て言ってもまだ病み上がりだしね」

「分かったわ。それじゃ、おいとまさせてもらう……あ、そういえば輝夜にも一言挨拶しておきたいけど、今いるの？」

「ああ、それはいいわ」

軽く首を振る。

「この件はまだ知らせてないし、ここのところちょっと機嫌が良くなくてね。今日は会わないほうが無難よ」

「そう？　じゃあまあ、世話をかけて悪かったって伝えておいて。他の連中にもいろいろ手間をとらせちゃったわけだしね」

「ええ、言っておくわ」

「じゃあチビ、行くわよ」

霊夢が私を抱き上げると、鈴仙さんが立ち上がって障子を開ける。

部屋を出ると、鬱蒼とした竹林に囲まれた庭が視界に広がる。そのありさまはまるで深海の中にいるようだった。見上げると折り重なる緑色の竹の葉の群れが空を覆い隠していて、陽の光はところどころ葉の隙間を縫うようにしてほの白く不規則な模様を浮かび上がらせている。褐色の板が敷き詰められた欄干付きの廊下は薄暗く、少々不気味さえに感じられる。

あらためて見てみるとこの家の造りは相当に古風な感じで、京都あたりの寺院を思わせるようなデザインだった。実際に使われている建材もかなり古い物のようで、建物として持ちこたえているのが不思議なくらいだった。

玄関まで案内され、見送りについてきてくれた永琳先生と再度挨拶をしたあと、私たちは鈴仙さんに先導されて竹林に囲まれた道をたどり始めた。

その１１につづく

その11

11

魔理沙は神社の母屋の縁側に寝ころんでいた。その顔の上には頭周りにリボン飾りのあるつば付きの黒い三角帽子がかぶさっていて、金色の髪が脇からはみ出ている。

その縁側から少し離れた空中に青白く輝く光球がいくつも浮かび、やや複雑な軌道を描いてリズムカルに動いていた。つねに同じ動きを繰り返しているのではなく、連続的に速度や軌道の角度が変化している。いちおう幾何学的な法則にのっとった統一性のようなものが感じられた。

「人魂にしては凝った動きだな」

魔理沙が飛び起きる。とたんに、光球が次々に消えていった。

庭にはサスペンダー付きの朱色のズボンをはいた長い銀髪の少女が立っていた。

「……こりゃまた珍しい客だな」

魔理沙は起きた拍子に飛ばしてしまった帽子を地面から拾い上げる。

「驚かせたなら、悪かった」

「べつに驚いちゃいないぜ。ただちょっと集中してたんでな、気配に気づかなかった」

「訓練みたいなものか」

「ちょっとしたひまつぶしだよ。一人で留守番ってのも退屈だったんでね」

魔理沙はぱりぱりと頬を指で搔く。

「巫女は出かけてるのか」

「永遠亭にな。そろそろ帰ってくるとは思っぜ。もう半刻以上は経ってるからな。ま、座れよ」

魔理沙は帽子をかぶり直すと、縁側をぽんと叩いた。

「ああ……」

妹紅はすこしぎこちない感じで歩み寄ってくると、縁側に浅く腰を下ろす。

魔理沙は横目でその姿を見ながら訊く。

「あれか、慧音との一件のからみか？」

「まあ、そつだ」

「まさか仇を討ちに來た、なんてことじゃないだろうな」

「違う。そもそも、あの人形……チビを慧音と引き合わせようとしたのがこのわたしなんだ。里に知り合いがいないと不便だろうと思つて」

「それは初耳だな。でも、だったらなんであいつらがいきなり一戦交えることになったんだ？」

「慧音もあまり詳しく話そうとしないんだが、チビを寺子屋に案内する途中でわたしが氣を失ったのが原因らしい。それで、わたしが何か怪しい術をかけられたと勘違いしたようだ」

「氣を失ったのか、お前が」

魔理沙は妹紅の顔をまじまじと見つめる。

「死なない身体だからといって、いつも健康だというわけじゃない」

妹紅が憮然とした顔つきで言い返す。

「わたしはけっこう不規則な生活をしてるし、あの時はすこし寝不足だったのかもしれない」

「……………」

「ふだんしぶといわたしがそんなありさまだったんで、慧音はかなり慌てたんだろう。早とちりをしてしまった一因もそこにあると思う。もちろん、いまは自分に非があると認めている。身体が回復したらあらためて詫びを入れたいそうだ」

「チビがそれを聞いたらきつと慧音のところに見舞いに行くって言うと思うぜ。すくなくとも、この程度のことで相手を疎んじたりするやつじゃない」

「お前さんはあの……チビとは付き合いは長いのか」

妹紅が訊くと、魔理沙は少し得意げに答える。

「長いつてほどの時間じゃないが、あいつがあのだ姿になったときからの付き合いだな。あの人形に魂が宿る瞬間に立ち会ったから」

「もし良かったら、そのあたりの経緯を少し話してくれないか」

「それは別にいいが、すこし長い話になるぜ」

「かまわない」

妹紅は口元に笑みを浮かべる。

「興味があるんだ、あのちよつと不思議な『人物』にね」

母屋の前庭に入ると、魔理沙と妹紅が縁側に並んでお茶を飲んでいるのが見えた。

「あら、珍しい組み合わせね」

私を抱いていた霊夢が言う。

「ああ、留守中に邪魔をして悪かった」

妹紅が立ち上がりかけると、霊夢が手でそれを制した。

「話はてゐから聞いたわ。余計なことに巻き込んで悪かったわね。こっちはこの通り元気になったから」

霊夢は縁側に歩み寄り、私を魔理沙と妹紅の間に降ろした。

『やあ……』

まさかその日のうちに再会するとは予想していなかったので、私はちょっと緊張していた。

どう声をかけていいものかとためらっていると、妹紅は少し困ったような笑顔を浮かべた。

「なんだか、かえって迷惑をかけてしまって悪かった」

『いや、私のほうも正直その……途中であきらめて成り行き任せになっちゃったから』

「まあ、巡り合わせが悪かったとしか言いようがないわね」

と霊夢。

「慧音の具合はどうなの？ けっこう怪我とかひどい？」

「そうでもない。もう起き上がって動けるし、大したことはない。寺子屋のほうは一日だけ休むことになりそうだが」

「そう。まあ、いちおうお互い承知の上での戦いだから、わたしとしては何も言うことはないけど、この子はお見舞いに行きたいですよ。かえって迷惑じゃないかと思うんだけどね」

すると、魔理沙がにやりとして妹紅の顔を見る。妹紅はすこし困ったような顔をする。

『……なんだ、魔理沙？』

「いや、なんでもないぜ。まあ、どうなんだろうな。むしろお互いに元通りになってから訪ねたほうがいいんじゃないのか。自分が弱っているところってのはあまり他人に見られたくないもんだからな」

『そうか』

「そつえば妹紅、あなたチビを案内してる途中で気を失ったんですって？ 身体の調子悪いの？」

霊夢が靴を脱いで縁側に上がる。

「……気を失ったというか、急に眠くなったんだ。前の晩にちゃんと眠れなかったのかもしれない。生活が不規則だし、疲れてるとかえって眠りが浅いこともあるから」

「ふだんから血のめぐりが良くないのかもよ。あなた病人の道案内はするのに、自分じゃあその医者世話にはならないもんねえ…」

…」

「さすがにそれはちょっとな……向こうもわたしの相手はしたくないだろう、いろんな意味で」

「まあそうかもしれないけど。お茶、冷めてるわね。淹れ直してくるわ」

二人の湯呑を手を取った霊夢が台所へ引つ込むのを確かめてから、私は妹紅に言った。

『わざわざここまで訪ねてくれてありがとう。あれからどうなったか私には分からなかったんで、心配だったんだ』

「ああ、大丈夫だよ。さっきも言ったが、怪我というほどのことではないから」

『いや、慧音さんもそうだが、妹紅もさ……結局ほったらかしのままで戦い始めてしまったからね』

「目が覚めたときは慧音の家だったよ」

妹紅は苦笑する。

「里の連中がわたしを運んでくれたらしい。あれから特に何もおかしいことはないから、身体の方は特に問題ないと思う」

『それは良かった』

すると、魔理沙が口をはさむ。

「チビ、お前、妹紅のことは妹紅って呼ぶんだな」

『え？ ああ、まあ最初会ったときにそれでいいってことになったからな』

「でもチビは人里に行ったのは初めてのはずだから、誰の紹介もなしに会ったんだろう？」

魔理沙は視線を上げて妹紅を見る。

「その割にはずいぶん気安い感じの仲になってるなと思ってさ」

『まあ、はじめからすこし気安い感じでしゃべってしまったのは確かだな。ごく普通の女の子に見えたから』

私は人里での妹紅との出会いについて説明した。魔理沙はすこし意外そうな顔をする。

「へえー、そりや確かにそこらにいる女の子に見えてもおかしくないな。人形に見られてるのに気がついたからって、湯吞落とすなんてドジもいいとこだぜ」

すると妹紅は少し頬を赤くして反論した。

「うるさいな、ちょっと驚いただけだ。お前だってもし同じ立場だったら驚くに決まってる」

「わたしは初めてチビを見たとしてもべつに驚かないぜ。動く人形ならアリスンとこで見慣れてるからな」

『まあ、霊夢と似たような恰好だったということもあったんだろう。髪型も同じだしな』

「そうだ、むしろそっちだよ。一瞬、巫女が縮んでしまったのかと思った」

「わたしをなんだと思ってるのよ」

後ろから霊夢の声が近づいてくる。

「萃香じゃあるまいし、人間の体が伸びたり縮んだりするわけないでしょ」

「はは、それはそうなんだが」

妹紅は頭をかく。

霊夢は廊下に膝をつくと手にしていた盆から、魔理沙と妹紅に新しいお茶の入った湯呑を手渡した。私はいったん縁側から離れ、入れ替わりに二人の間に座った霊夢の膝の上に座り直す。

「まあ、いろいろあったけど、もし良ければこれからもときどき寄ってこの子に会ってあげて」

妹紅は少し驚いたような顔をする。

「しかし、その……迷惑じゃないのか」

「なんで？」

「いや、何て言うか。わたしが来たりすると、ほかの連中がその…」

「ああ、妖怪どもの間じゃあなたはけっこう有名ならしいのね。でも別に構わないわよ。そんなのはわたしが気を回すことじゃないもの」

霊夢は澄ました顔で答える。

「それに、この子もわたしや魔理沙みたいなのばかり相手にしてるものの見方が偏るでしょうし」

「おいおい、そりやどどういう意味だよ」

魔理沙が口を尖らせる。

「わたしはそんなにへそ曲がりなことばかり言ってるってのか？」

「そついうんじゃないくて。わたしらに幻想郷で生まれ育った人間だし、ひとつのことに集中して生きてきたようなところもあるわ。だから、傍から見れば考え方もけっこう偏ってるのよ」

霊夢はお茶をすすする。

「その点、妹紅は外の世界を知ってるし、わたしなんかには想像もつかないことを見聞きしてると思うわ。そういう人と繋がりをもつのも悪くないってことよ。そうでしょう、チビ」

『ああ、まあな』

妙に物わかりが良すぎるような気もするが、案外こういう発想は霊夢にとってはごく当たり前なのかも知れない。生れついた素質のおかげで若いうちに強大な力を身につけているのだから、もう少し増長気味の考えになってもおかしくはない気がするのだが。

「それに、ひとりで動き回るようになって初めてできた知り合いなものね。そういう意味でも大切にしないと」

『……そうだな』

やりとりを聞いていた妹紅がくすりと笑う。

「でも、そうやって巫女の膝の上に乗っているとやはり自然な感じがするな。収まるべきところに収まっているというか」

「似たような恰好だからでしょ？」

「それもあるが……まあ本人がいちばんよく分かってるだろう」

妹紅はお茶を飲み終えると、慧音さんの様子を見ておきたいということで里へとまた戻って行った。去り際に私がそのうちにまた、と声を掛けると、「ああ、またな」と笑顔で返してくれた。

そのあと魔理沙もアリスの家に寄って今回の件の話をしておくからと言って帰っていった。やがて日も西に傾き、ようやく一日の終わりが近づく。

夕食のあと霊夢が風呂に入っている間、私は縁側から夜空に見上げていた。月齢が進んでいるので、この時間では月はまだ出ていない。

周りに明かりというものがほとんどないので、数えきれないほどの星が見える。本当に綺麗だった。季節柄、南側にはあまり有名どころの星座は見えないが、ペガサスの大四辺形を目印にすると、ペガサス、アンドロメダ、ペルセウスあたりは確かめることができる。ただ、星がたくさん見えるのでかえって星座っぽくない感じではある。これから寒さが増して冬に近づいてゆけば、オリオンの三ツ星や冬の大三角が南側に見えるようになるはずだ。

『……………』

それにしても、自分自身のことは思い出せないのに、こうして空を眺めれば星座のことなどが思い浮かぶのだから不思議なものだ。その星座に関する記憶は間違いないかつての私がおそらく学校の授業あるいは自分の個人的な趣味か何かで学び憶えたことのはずだ。その意味では私という存在は継続しているはずなのだ。だが、魂だけの存在となってしまう、失われた部分の記憶を取り戻すことはできるのだろうか？

できないとしたら、せめて自分がどのような因果の連なりを辿っていまこうした状態に至ったのか、それを裏付ける証拠を集めるしかない。しかしそこから、果たして全体を推測することができるのかどうか。

そして何より、この世界に魂を留められているいまの状態がいつ

まで続くのか。

だが、それに関しては考えたところでいま答えは出ない。

「また何か考え込んでるのね？」

いつのまにか白い寝巻き姿の霊夢がそばに来ていた。肩のあたりから微かに湯気が漂っているのが見える。

『そっという風に見えたか？』

「まあね。もしかすると、外の世界のことを考えてたのかな、とかね」

『……半分は当たりだが、半分ははずれだな。どちらからも見えるものだから』

「どちらからも見える？」

『空の星さ。幻想郷の境界も、星の光までは遮れないようだ。外の世界にあるとも言えるが、幻想郷でも見えるんだから、ここの一部だともいえる』

「星ねえ……ふだんあんまり意識したことがないけど。そういえば、星座とかいうものがあるんですってね。星の連なりに人や神様やモノの形をあてはめたっていう」

『霊夢が星座を知っているとはちよつと意外だな。もともとは西洋で作られたものなんだが』

「それぐらいの知識はわたしにもあるわ。と言っても、魔理沙からのまた聞きだけだね。季節によって星の配置とかが変わると自然界の力の流れとかに影響があるんですって」

『なるほど、東洋に生きる西洋魔術師だったっけ』

すると、霊夢がかがみこみ、私の身体を縁側から両手で抱き上げた。

「……慣れてない、か」

『ん、なんだ？』

「たとえば、咲夜がレミリアの知らないうちにどこかの妖怪と戦ってたからって、レミリアはべつに騒がないと思うのよね」

『だろうな』

「それはたぶん、レミリアが咲夜の力っていうものをきちんとつかんでいて、やったことがどんな結果になるかを見通せているってことなのかもしれない。でも、それは咲夜がいままで何をどう処理してきたかっていう積み重ねがあつてこそだとも思う。いつから紅魔館で暮らしているのかは知らないけど、いきなりメイド長になったわけじゃないでしょうからね」

『……………』

「慣れが必要だっていうなら、慣れるための時間も必要よね。そのための『安定』ってことなのかもね」

私はすこし驚いた。

『紫さんの言ったことを気にしてたのか？』

「気にはしてないけど、考えてはいたわよ」

私が来てからというものの、霊夢には慣れないことばかりさせてしまっているような気もする。私のために礼を言ったり、詫びを言ったり。今日の永遠亭でのやりとりだって、霊夢としてはかなり頑張ったのかもしれない。だが、結界の管理者として、そして幻想郷全体の安寧を陰から守っている者として、果たしてそれがいいことなのかどうか。

それは私自身には判断できない。少なくとも、いまは。だから結局言えるのは単純な言葉になる。

『ありがとう、霊夢』

「そうよ感謝しなさい、チビ」

霊夢が私の身体を胸に押し付けるようにしながら言う。

「あなたがいまわたしにしてくれることは、それぐらいでいいのよ」

その12につづく

その12

1
2

翌日、私は神社まで迎えに来てくれたアリスに連れられて紅魔館へ向った。

アリスは念のためだと言って私の身体を抱いたまま神社の境内から飛び立ったが、魔法の森を超えて湖に達したところでいったん岸边に降りた。

「いちおうね、ここらへんあたりからは徒歩で行った方がいいの。湖の正面側から直接入っていくと、門番さんが飛んでくるから。高速で空中を移動して来る者は危険だっていうとらえ方をしてるらしいし、驚かせるのは良くないものね」

アリスらしい配慮だ、と思った。霊夢はあまりそこらへんは気にしてないように感じる。魔理沙はもっとしていないだろう。

『ところで私を抱いたままだと腕が疲れないか？』

「だいじょうぶよ、あなたの身体は軽いもの。それに、やっぱり人形っていうのは抱いてあげたいものなのよ」

『そうか』

そういえば、例の魔法の施術前に精神を集中させるためと言ってパチュリーが私を抱いてくれたが、もしかすると単純に人形としての私を抱いてみたいという気持ちがあつたのかもしれない。

湖に沿って続いている細い道を進んでゆくと、やがて前方に林に囲まれた建物が見えてきた。湖畔から半島のように突き出ているように見えるその領域が、紅魔館の敷地なのだ。

その風景を見つめながら歩いていたアリスがぼつりと言う。

「……なんだかちよつと不思議な気分ね」

『何がだい』

「こつやつて正面玄関から紅魔館を訪ねようとしている自分がね、全然別の自分のような気がするの。わたし、これまではあまり人の家に行ったりすることってなかったから」

『でも、今回の私の件では何回か通つたんだろう？ それにパチュリーとは前からの知り合いじゃないのか』

「うーん、知り合いつて言えるほどの関係じゃないわ。だいたい、向こうは魔法使いとしての経歴も長いみたいだしね……普通に考えれば目上の人なのよ。ただ、そういう接し方はやめて欲しいって言われたから対等な口のきき方をしてるけど。だから、こういう風にあの人と交流をもてるようになったのは、ある意味ではチビさんのおかげなのよ」

『とはいえ、今回のことも含めて結局は迷惑をかけてるだけなんだから……』

「迷惑ってことはないわよ。手間がかかるのは確かだけど、それが苦になるわけでもないから。ただまあ、あのときのわたしの予感が早々と当たっちゃったのは、ちょっと残念な気もするけどね」

『面目ありません』

湖上にかけられた橋を渡りきって正面の門前に達すると、門柱の側に置かれた折り畳み式の椅子に座っていた緑色の中華風の服を着けた少女が慌てたように立ち上がった。

「こんにちは、アリス・マーガトロイドだけんど……」

「はい、パチユリー様から伺っています」

彼女が門柱の陰に下がっている紐を引っ張ると、少し離れた場所から軽やかな鐘の音が響いてきた。

「すこしお待ちくださいね。いま案内の者が来ますので」

考えてみれば、間近で彼女と会うのはこれが初めてだったかもしれない。

いちおう挨拶をしておいた方がいいと思ったので、私は声をかけた

『こんにちは、美鈴さん』

「うおっ」

身体をのけぞらせる。私が声を出したのに驚いたらしい。

「も、もしかして、あなたが噂のチビ霊夢さんですか」

『そうですよ』

「いやあ、本当にお人形さんなんですネ。なんかお話だけうかがってるとすごい大人のかたなんじゃないかって感じだったんですが」

興奮気味なのか、眼がきらきらと輝いている感じだ。

『話というのは、レミイとかから？』

「いやいや、とんでもない。お嬢様からそんなお話は伺えませんよ。メイド妖精たちが噂してるのを聞いただけです。あ、それから言い忘れてましたが、わたしのことはどうか美鈴とお呼び下さい」

『じゃあ、私のこともチビと呼んでくれるかな』

「あー……、いや、お嬢様のご友人を呼び捨てはできませんから」

美鈴は困ったように笑った。

「とりあえず、チビさんと呼ばせていただきます」

案内のメイド妖精がやって来たので、私たちは美鈴が開けてくれた門を通り抜け、庭園を横切って紅魔館の建物へと向かう。

正面玄関からは少し離れたところにある別の出入り口から中に入ると、明かりを手にした別のメイド妖精がやってきて、案内役が交代する。例によって廊下は薄暗い。窓はどれも小振りでしかも数が

少ないので、光が射し込んでいるのはほんの一部だ。

地下へ向かう長い階段を降りると、天井が低くなり、窓のない廊下が続く。一定の間隔で左右の壁に取り付けられている西洋風の燭台の炎の色は弱々しく、メイド妖精の手にしている明かりが消えたら、ほとんど何も見えなくなるのではないかという感じた。

しばらく進んだあと、ようやく古めかしい扉の前でメイド妖精が歩みを止め、ノックをする。

「パチュリー様、アリス・マーガトロイド様とお連れの方がいらっしやいました」

中から返事が聞こえたのかどうか、私には分からなかったが、メイド妖精は扉に向かって一礼し、引き手に手をかけてゆっくりと開けた。

扉の向こう側には三日月の形をしたがっしりとした感じのテーブルに向かって座っている少女が見えた。とくに備え付けの明かりが見当たらないにもかかわらず、彼女の周囲は薄く光っていて、まるで光を帯びた空気がまわりついているかのようにだった。テーブルの左右、さらにパチュリーの背後には天井近くまである書棚が立ち並び、その輪郭を黒々と浮かび上がらせていた。そして、さらにその奥にも延々と同じような書棚が列を成している。

この巨大な地下図書館が、いわば彼女の本来の居場所なのだ。

「いらっしやい」

三日月のエンブレムと赤青リボンのついた帽子をかぶったパチュ

リーはわたしたちに静かにうなずきかけた。いつもと同じ穏やかな態度だったが、この場所で彼女が積み重ねてきたものを想像すると、空恐ろしさを感じざるを得なかった。やはりこの魔法使いは、ヒトには想像もつかない底知れぬ力をもつ存在なのだ。

「しばらくこのまま様子を見た方がいい」

私の腕を調べ終えたパチュリーはそう言った。

「八意永琳の言いたいことは分かる。霊力吸収を意識しやすいようにするというのもひとつの考え方」

「そうねえ……まあ、一度にいろいろいじっちゃうと、因果関係がよく分からなくなるしね」

アリスは腕を組んで首をかしげる。

「宇宙人の薬の効果なんてわたしたちには分からないし」

『私が余計なことに係わったせいで、めんどろを増やしたみたいだな』

「あつ、そんなことはべつに気にしないでいいのよ。あの薬師さんが自分の判断でやったことなんだし」

碧眼金髪の魔法使いは、はっとしたような顔つきになって手を左

右に振る。

「それに、ほかの人の手が加わったからどうこうとか、そういうことだわりはわたしたちにはないから。ねえ、パチュリー」

「まあ……それはそうだけど」

珍しくパチュリーはあいまいなうなずき方をする。

「ただ、どちらにしても術式の改良は考えてみる必要がある。霊力が溜ったまま出せなかったというのは、問題があるから」

「何か外側の要因ってないのかしら？ 生身の肉体をもっているならともかく、チビさんの場合には力の伝導が『詰まる』ことって考えにくいと思うけど」

アリスは納得がいかないという感じの表情だ。

「何か自然に反した力を取り込んでしまったとか、そういう可能性はない？」

「もちろん、可能性はある。でも、通常は変換不能な力は事前にはじかれるはずだから、術式の制限を超えた次元で取り込まれたものに限られる」

『具体的に言うとなんか感じなんだ？』

「たとえば、霊夢からじかに霊力を吹き込まれた場合は、伝導とかは関係ない。霊夢がもつ想いがそのままあなたの魂とつながって、伝わる」

パチュリーは表情を変えずに言う。

「なぜならあなたは……たとえるなら霊夢の心と共鳴しやすい霊的構造を持っている。だからこそそうした例外的な事象が起きる」

『そういう構造を持つ者はほかには滅多にいないわけか』

「ゼロとは言えないけれど、考えるにくい」

『……………』

「まあ当面、霊力は霊夢からじかにもらうようにしておいたほうが無難でしょうね」

アリスが言うと、パチュリーもうなづく。

「そのほうがいいかもしれない。少なくとも霊夢からの力は『消化』しやすいはず」

「あと、この際あなたのもつ霊的な力を制御する練習というのはしておいたほうがいいかもしれないわよ。スペルカードにしてもある程度意識的に発動できないと不便なのは確かだし」

『練習か……………』

たしかに実際の戦いの場面でしかスペルカードを発動できないというのは問題がある。しかも確実に発動できるという保証もないところない。

「たぶん、意識のレベルを無意識に近づけることで制御しやすくなる。あなたの場合、無意識に近づくということは霊夢の魂に近づくことと同じ。だからこそ、霊夢と同じ霊的能力が使えるのだから」

とパチュリー。

『うーん、でも無意識に近づくとってもなあ……それこそ意識的にできるものなのか？』

「でも飛行術はいつでもできるようになってるじゃないの。基本的にはそれと同じよ」

アリスは腕組みを解き、私に向かって指を立ててみせた。

「要は精神と力の間を接続する通路ができればいいだけの話だから……生身の体を持たない分、チビさんは条件が有利なはずだわ」

「言語的な思考をしない状態を保つ訓練をするといいかもしれない」

パチュリーが考え込むような表情でいう。

「どちらかというとあなたは言葉による理が優る傾向がある。心の中から言葉を消せば、おのずと見えてくるもの、感じられるものもあるはず」

『なるほど』

心の中から言葉を消す、か。たしかにそれは無意識に近づく方法としては有効だという気はする。

今後の術式改良についてはしばらくパチュリーが文献の調査をしてから、ということになり、私は彼女に礼を言ってアリスとともに紅魔館を後にした。

神社まで私を送り届けてくれる途中、アリスはすこしからかうような表情で言った。

「直接霊氣をもらったほうがいい、というのはあなたから霊夢に言いなさいよ」

『え？ ああ、まあ……そうするが』

「照れることはないんだから。あなたの魂を保つための、大切な儀式なんだしね」

そう言いながら、アリスはなぜか妙に嬉しそうな顔つきだった。よく分からないが、どうもなにか誤解されているような気もした。

その13につづく

その13

13

左手の指先から、吸う。肩まで達したその流れが胸を横切って、右肩へと回る。そして、腕を通り抜け、右手の先へ。

一瞬、かすかな振動が腕から身体に向かって走る。

撃ち出された何かの塊が地面の木の葉を吹き飛ばし、舞い散らせた。

「なかなか上手じゃないか」

振り返ると、鳥居の近くに銀髪の少女が立っていた。

『妹紅……』

「邪魔してしまっただか？」

『そんな大層なことをやっているわけじゃないんだ。ただ、なんとか自分でこの力を制御できないものかなと思ってね』

「基本的なところはできているように思えるな。生身の身体ではない分、制約がないんだろう」

妹紅はそう言いながら、私のそばに近づいてきた。よく見ると、背中にずいぶん大きめの荷物を背負っている。

『どうしたんだ、それは』

「昨日、里で宴会があつてね。そこに招待されたはいいが、帰りに土産だといって野菜とかを山のように持たされた。とてもじゃないが食べきれない。それで、すこし押し付けようと思って持ってきたのさ」

『そうか、わざわざ大変だったな』

母屋に案内して、霊夢を呼ぶ。

霊夢は妹紅が来たことに少しびっくりしていたが、訪ねてきた理由を聞くと顔をほころばせた。

「ありがたいわ……ここところ、近場の山菜とかでなんとかしのいでたって感じだったから。それにしても、ここまで運んでくるの大変だったでしょう」

「まあ、このあたりの眺めを楽しみながら来たからね。さほど苦にはならなかった」

『身体が頑丈なんだな』

「ま、頑丈というのは少し違うがね……とりあえず中身を確認してもらおう」

妹紅が降ろした大きな布袋に詰め込まれていたのは、主にイモ類、

根菜、それにキノコのたぐいだった。それぞれの形や大きさが不規則で、いかにも自然の中で採れた野菜という感じだった。

「これはほんとに助かるわ。せっかくだから、今これで煮物でも作ってみましょう。できるまですこしこの子の相手でもしていてくれない？」

「ああ……うん」

妹紅は少しまぶしそうな顔をして、うなずいた。

霊夢が野菜類を運んで台所に引つ込むと、妹紅は私に小声で言った。

「なんというか、家にいると意外に女らしい感じなんだな」

『え？ ああ、霊夢か。女らしい……うーん、まあ普通じゃないのか』

そういう風に考えたことはあまりなかったが、妹紅から見ると家庭的という感じがしたのかもしれない。

「まあ、他人の普段の暮らしというのをあまり見てないからな。自分を中心に考えていると、いつの間にかもの見方が狭くなるのかもしれない」

『妹紅の暮らしは、こういうのとは違うのか』

「わたしの場合、まず自分の家というものがないからな……穴を掘ってねぐらにすることもあったし、木の上で寝るなんてこともよく

あつた」

『今でもそうしてるのか』

「そうだな。季節と状況に合わせて工夫はするが」

『どんな天変地異があっても生き残れそうだな』

「……それこそ、そんな大層なことじゃない。単に家をもつことが面倒だからそうなってしまっただけさ。もつとも、今のところこの幻想郷以外に行くあてはないから、きちんとした家を持っても悪くないかなとは思いついてるがね。でも、なかなかそこまで踏み切れない」

『どうして？』

「家をもつとその土地と縁ができてしまう。土地と縁ができると、その土地に住まう人々とも縁ができる。それが面倒なんだ」

もしかすると、私自身もそんなことを思っているところがあるかもしれない。周りの人々と縁ができることを恐れているのだろうか。自分が何者かも分からない、このふわふわとした状態。いつ消えてしまっても不思議ではない、この夢にも似た時の波間に自分が溶け込んでしまうのを拒んでいるのか。

「要するに、ただわがままなだけなのさ。それより、さっきやっていた技だが、もう一度やってみせてくれないか。ちょっと興味がある」

『ああ、かまわないが』

私は前庭に下り、母屋から少し離れた位置に立った。

右腕を伸ばし、指先を森の手前にある柿の木にむける。

目標は、柿の木の枝に下がっている実のひとつ。枝の先端にあるものを選ぶ。実を傷つけないように、ヘタの部分を狙う。

気を、ゆっくりと吸い込む。

体の中心に張り詰めたものがじわじわと溜まってくる。そして……

『……！』

身体がかすかに震える。ほんの少し間があったあと、木から実が落ちた。

「すごい！」

縁側に座っていた妹紅が驚いたような声を上げ、手をたたいた。

私は木から落ちた実を拾いに行く。手にとって見ると、ヘタの部分がすべて吹き飛んでいた。本当なら枝の付け根のところに当たったのだ、まだずれがあるようだ。

ちなみにこれは死ぬほど渋い柿らしいので、鳥も食べにこない。木自身の栄養になるようにと、根元においておく。

縁側に戻ると、妹紅が感心したように言った。

「さつきは気がつかなかったが、かなり狙いが正確なんだな」

『いや、そうでもない。実は撃ってから軌道修正をかけてるんだ。そこらへんは融通が利くんでね』

「誘導もできるのか」

『撃った後も目標の位置を意識していると弾がそっちに向かってくれるんだ。いまみたいな速い弾だとあまり効かないが』

「……あれなのか、毎日こういう練習をしてるのか？」

『少しずつだがね。とにかく自分の意思で制御できるようにならないと、このあいだのように周りに迷惑をかけることになる』

「慧音の件か。あれはお互いに承知した上での勝負だから、迷惑という言い方はあたらないと思うが」

『まあそうなんだが、自分できちんと制御できていない力を他人に向けるというのは、やはり不本意なんだ』

「なるほどな……そうすると、あのときは無我夢中だったわけだ」

無我夢中というのも事実からはすこし遠い感じた。

『むしろ、気を失いかけてたというのが正しいな。とにかくもう何もかもが限界で、誰か助けてくれ、という感じだった』

「……………」

ふと妹紅の顔を見ると、深刻な表情をしている。

『どうした？』

「あ、いや……じゃあ、自分がどういう技を出したのかも覚えていないのか」

『やたらと弾数が多かったというのはうつすら覚えているが。あと……うねるような赤と青の弾の列が出て行ったかな』

「そうか……」

妹紅はため息をついた。

「それは、おそらく『蓬莱人形』だ」

『蓬莱人形？』

一瞬、既視感に似た気分を覚えた。

「スペルカードの名前だ。蓬莱って何だか知ってるか？」

『……中国の古い伝説に出てくる東方の海上にあるという土地の名だったか。そこには不老不死の人々が住んでいると信じられていたとか』

「その通り。その不老不死の住人たちは蓬莱人と呼ばれる」

妹紅は眼を空に向ける。

「ある意味、この幻想郷は蓬莱に近い存在なのかもしれないな。実際、信じられないような年月を生きてきた者たちもたくさんいる。肉体を持った神さえいる」

『そうだな』

まだじかにお目にかかったことはないが、妖怪の山にある湖のそばには、諏訪の地からやってきた二柱の神が祀られている神社があるという。その神々に仕える巫女も奇跡を起こす力をもつ現人神なのだそうだ。

「実は、私もそういう者の一人だと言ったら、どうする？」

『えっ』

まさか、と思ったが、もともとただ者とは思えない人物だと感じてはいたし、ヒトならぬ何者かであるという可能性は否定できない。

とはいえ、だからといっていまさら態度を変える理由にはならない。

『べつに何も。それを聞いたからといって突然妹紅の何かが変わるわけじゃないんだからな』

「そうか。いずれにせよ、いつかは言わなきゃならないと思ってたからな。わたしはね、まさにその蓬莱人なんだよ。つまり不死なんだ。年を取らないどころか、身体が粉々になっても元通りになる。そういう身体になってしまっている。だからわたしを『蓬莱の人の形』と呼ぶ者もいる。ヒトではなく、人の形をした別の何かだというわけだ」

『不死か……』

私の中には、もはやそのこと自体に驚くという感覚はほとんど残っていないかった。が、ひとつ頭の中に閃くものがあった。

『ということは……蓬莱人形というのは』

「そうだ。『蓬莱人形』はわたしのスペルなんだ」

妹紅は真剣な顔で言う。

「いまさらこんなことを言うのもおかしいんだが……… いったい、お前さんは何者なんだろうな？」

その14につづく

その14

14

湯気をたてている里芋を盛った皿を盆に載せて縁側に戻ってきた
霊夢は、話を聞くとすこしあきれたように言った。

「それじゃあ結局は全部あんたのせいだったってことになるんじゃないの？」

『……かな』

「いやいや、べつに何もかもチビのせいだと決まったわけじゃない」

妹紅はとりなすように言う。

「ただ、原因としてそういうことも考えられるというぐらいだ」

「でも状況からして妹紅から吸い込んだ力でスペルが発動したって考えるのがいちばん自然なものね。ヒトガタとしての本来の呪力がパチュリーの魔法のおかげで強まったのかもしれないわ」

霊夢は小皿に芋をとりわけて、箸を添えて妹紅に手渡す。

「ちょっと味見してみて」

「ああ、ありがとう」

妹紅は小さな丸い芋をひとつ箸で口の中に入れると、おっ、というように眉を上げた。

「……うん、美味しい。料理が上手なんだな、霊夢は」

「そんな、たいしたもんじゃないわよ」

霊夢の照れたような笑顔が妙に可愛らしい。このほのぼのとした雰囲気、水を差すのは少し気が引けたが、私は話を戻すことにする。

『そのパチュリーは力を吸い込めるような相手は滅多にいないと言っただけだぞ』

「だから、それ相応の理由があるんでしょうよ」

すると、妹紅が箸を止めて言う。

「つまり、わたしの側にも何かしら力を吸われる理由があったのかもしれないな。霊夢、そこらへんの見当はつくのか？」

「うーん、まあ本来はヒトガタは厄落としとか、相手に呪いにかかけたりするのに使うから……要は本人とつながりのある分身という扱いなのよね。厄落としの場合は、いったんつながりを持たせた上でそれを切り離す。呪いの場合は、つながりを經由して相手に呪いを送る。でも、チビと妹紅の間にそういうつながりは……」

霊夢はそこで言葉を止める。

「ない、か」

妹紅が言うと霊夢は、いや、と首を振る。

「そうとは限らないわ。『つながる』ためのきっかけは、はたから見るとけっこうささいなことである場合も多いのよ。だから、本人も自覚してないこともある」

「だが、チビとはこのあいだ里で会ったときが初対面だったのは確かだぞ」

「まあ、何か気づかない形で接触しているのかもしれないわ。たとえばチビの魂が宿る前の、ただの人形そのものだね。そのところがはつきりすると」

霊夢は私に顔を向ける。

「あなたが知リたがってる、その人形の出所というのが分かるかもしれないわよ」

『なるほどな』

それは可能性としては十分あり得る。

「出所って、どういうことだ？」

妹紅の問いに、私は答えた。

『この人形、つまりいまのこの私の器だな、これは紅魔館のレミリアがもっていたものなんだ。それも元はといえば誰かから譲り受け

たものらしいんだが……譲った本人に口止めされていて、誰かは言えないというんだ。だから、どこからこの人形の出所がどこかははっきりしない。それを調べたいと思っているんだ」

「だが、それが分かったからといって、チビ自身が何者かということと関係があるのか？ その人形に魂を移すことになったのはあくまで偶然なんだろう？」

『確かに単なるめぐり合わせなんだがね……』

私は前にレミイに話した内容を繰り返して説明した。この人形が外の世界から来たものなら、なぜ霊夢そっくりであるのか。そして私自身も同様に外から来たのだとしたら、霊夢になぜ『憑いた』のか。執着する理由は何か。

そう言うつと、霊夢が微妙な顔をする。

「……あんた、わたしに執着してるの？」

『執着していると言うと何か語弊があるのかもしれないが……でもよほどの理由でもないヒトの魂風情が憑くことなんかできないつて、自分で言ってたじゃないか』

「そうだっけ？ でもま、わたしを前から知っていたんだとしたら、それもおかしな話ではあるわね、たしかに」

「ある意味、神秘的だな」

それまで黙って話を聞いて妹紅がぼつりと言う。

「もしかすると、チビは単なるヒトの魂ではなく、もっと別の次元

の存在なのかもしれない」

「別の次元って、たとえば何？」

「たとえば……神様とか」

『それはないんじゃないか。そんな存在だったら、もっと確固たる自分というものをもっていると思う』

「そうとも限らないわよ」

と霊夢。

「神様っていうのは記紀に出てくるような連中ばかりじゃなくて、もっと曖昧でよく分からない存在もいるのよ。ただチビの場合、自分自身の記憶はなくても外の世界で身に付けた知識とか考えとかがあるみたいだから……それを聞くとやっぱりヒトだったんじゃないかな、とは思っただけだね」

『まあ、少なくともいまの私はヒトであるとはお世辞にも言える状態でないのは確かだな。ヒトではなく、妖怪でもないのなら、何なんだということになりそうだ』

「別に何だっていいわよ。どう呼ぼうと、中身が変わるわけじゃないんだから」

すると、妹紅が皿と箸を置いて縁側から立ち、前庭の向こうに広がる林に眼を向ける。

「だが、こうなるとチビのことを気にする奴は増えてくるかもしれ

ないな。現に……」

顔の前で立てた右手の人差し指に小さな光が灯る。次の瞬間、妹紅は眼にも留まらぬ速さで水平に腕を振った。

林の奥に向かって、光が矢のように飛ぶ。とたんに、がさがと何か動く気配がしたかと思うと、すぐに遠ざかって行った。

『な……なんだ？』

私は一瞬の間に起きた一連の出来事の意味が理解できず、訊いた。

「兎だよ。ただし、食用にはならない奴だ」

妹紅がそう言うのと、霊夢がやれやれ、というような顔をする。

「相変わらず、永遠亭とは険悪なの？」

「険悪ということはないさ。だいたい、病人を案内するときはいつも近くまで行ってるしな。鈴仙とかはちゃんと挨拶してくれるよ」

『……永遠亭と何かあったのか』

「いや、まあ大昔に多少因縁があってね。一時期あそこのお姫様とは、何度もやり合ったんだ。だから、永遠亭の連中から見ると、私はちょっと厄介なやつなんだ」

「でも、わざわざ様子を探りに来る理由なんてあるかしら」

「あのときチビは、永琳に診てもらったんだろ？　だとすると、

さっきの話の件はたぶん永琳も把握している。不死人の靈気を吸ってその技を使える者というのは、なかなか興味深いはずだよ。なにしろ、輝夜もわたしと同じ不死人なんだからな」

『！』

蓬萊山輝夜……。つまり、彼女も蓬萊人なのか。

「まあ、せっかくだからすこし連中のことを話しておいてやるよ。なにか言ってきたときのためにな」

妹紅が帰ったあと、靈夢はなにやら道具箱のようなものを出してきて卓袱台の前に座り、箱を開けて硯を取り出し、墨をすり始めた。

『何を始めるんだ？』

「お札を書くのよ。もう作りおきがなくなってきたから」

『それって、もしかして弾幕に使うのか』

「まあ使い道はいろいろだけだね」

『……何かに備える必要が出てきたのか』

「べつにそんなに心配することじゃないわよ。ただ、ここところちよっと気が緩んでたかなあと思って」

さつき妹紅が話してくれたことと関係があるのだろうか？

永遠亭の主、蓬莱山輝夜との因縁に関する話はかなり衝撃的だった。彼女が竹取物語に登場するヒロインである輝夜姫と同一人物であること、地上に落とされたのは八意永琳の作った不老長寿の霊薬を飲んだためであり、物語とは異なり、罪が赦されて月からの使者たちが迎えに来たとき、使者のひとりだった永琳と謀って、彼らを殺害し、逃亡したこと。一方、妹紅は輝夜姫に求婚を蹴られた貴族の娘であり、その私怨から輝夜に対する復讐を図り、時の帝に贈られた不老長寿の薬を奪って服用し、自身も不死となったこと。そして永い歳月を経た末に彼女たちはどちらもこの幻想郷へと辿り着いたこと……。

正直、彼女たちが過ごした歳月の重みを想像しただけで圧倒されてしまうというか、私ごとがその過去についてあれこれ評することはできないと感じた。

そして、すくなくとも現状においては妹紅によれば「一時休戦状態」なのだという……。

「あなたの好きなようにやればいいのよ」

霊夢の声に、私は考えを止めて顔を上げた。

『うん？』

「幻想郷にはスペルカード戦のルール以外には決まりらしい決まりはないわ。自分のやることが何か他の連中にとって都合が悪いかどうかなんて、いちいち考えるひとはいない。みんながやりたいよう

にやったことが足し合わされて物事が動いているのよ。あなたもその足し算に加わるだけなんだから」

『そうだな』

見透かされているのか、それともただ思ったことを言っているだけか。

『それじゃ、ひとつ提案をしてみようか』

「提案？」

『ああ。私もこれからすることに備えてやってみたいことがあるんだ』

おそらく、霊夢はすぐにはうんと言わないだろう。だが、話のもつて行きかたはいくらでもある。いわば交渉の訓練のようなものだと思えばいい。

その15につづく

その15

15

「チビが戦闘術の修行を？」

レミリアの赤い瞳が、瞬きとともにぴくりと動く。

「ええ。なんでも藤原妹紅が神社にときどきやって来ては、模擬戦をやっているそうです」

咲夜は陶製のポットから紅茶を注ぎ終わると、まずレミリアの前に、次いでパチュリーの前に皿に乗せたカップを配膳した。

「ふうん……例の不死の女ね。この間、チビが里でハクタクとやり合ったって話と関係があるのかしら。パチュリー、あなた何か知ってる？」

パチュリーは小さくうなずいた。

「里に行つて最初に知り合いになったのが妹紅で、そこからいろいろあつて上白沢慧音と一戦交えたらしい。本当は妹紅が慧音にチビを紹介するという話だったということだけだ」

「どうしてそんな風に話がこじれたの？」

「慧音の家に行く途中で妹紅が気絶してしまつて、それをチビのせいだと勘違いされた。もつとも、厳密には勘違いとも言えない」

「どうということ？」

「チビ自身にはそんな気がなくても、あの子のもっている力が妹紅に作用してしまった可能性はなくてはならない」

パチュリーは紅茶を一口すすする。

「わたしの術式がなくても、ヒトガタであるチビは、もともとヒトのもつ霊気や魔力を吸い込む力を持っている。条件次第では、ヒトの身体から直に力を抜き取ることもあり得る。上白沢慧音を倒した技はかなり破壊的なものだったらしいから……その力の源が実は妹紅のものだったということは十分考えられる」

「面白いわね。まるで吸血鬼みたいじゃないの」

「肉体という柵がないから、やり方次第では力をもつと効率的に使えるかもしれない」

「じゃあもしかすると、霊夢の上に行くようなこともあり得るの？ わたしたち、もしかしてとんでもないことをしてしまったのかしらねえ……参ったわね」

言葉とは裏腹に、レミリアは楽しそうだ。

「そんなチビが不死人と仲良く戦いの訓練……その先にはどういったイベントが待ってるのかしら？ なかなか楽しみな」

パチュリーはとくに表情を変えずに紅茶をすすっていたが、ふとカップを置いて言った。

「わたしはあなたに言われたとおり、チビにかけた術式には一切細工をしていない。だから、発動している力を外から止めたり弱めたりすることは一切できないけど……このままでかまわない？」

「もちろんよ」

レミリアはうなづく。

「わたしは小ずるい投資家ではないのよ。自分の行為に保険をかけるような真似はしたくないの。賭けに負けたら、その債務を引き受けるのはすべて自分。それが誇りをもつ者のありかたというものよ」

「分かった。ただ、考えていたよりは大きな賭けになるのかもしれないから、念のために訊いたの」

咲夜は二人の会話を黙って聞いていたが、彼女たちの言う『賭け』の意味について忖度するのはやめておいた。さすがにヒトの想像を超えるものがある。

（魔理沙あたりがこの話を聞いたらなんて言うかしらね）

おそらく彼女は憤慨するかもしれない。少なくともその程度にはあの小さな人形に宿る魂に肩入れしているだろう。だが、むしろそんな気持ちになれる魔理沙がうらやましい、とも咲夜は思うのだった。

炎の弾が列をなして目の前に接近する。私の頭と同じぐらいの大きさだ。ほとんど反射的に斜め後方に移動してかわす。

ほんの一瞬、炎が肩の近くをかする。結界のおかげでダメージはないが、回避がすこしきつくなってきた。ときどき緩急をつけてくるので、気が抜けない。

妹紅はこちらの反応のしかたまで見て撃ってきているわけではないようだが、弾速に変化があるとやりにくい。

相手に先にスペルカード攻撃を発動されると、間髪入れず反撃するのは難しい。相手の弾幕と自分の弾幕が入り乱れるために回避行動がその分難しくなる。むろん、弾には進行方向があるから区別はできるが、視野全体に入る弾の数が多くなるととっさの反応が厳しい。

同時発動での弾幕の混合を避けるには、意識して攻撃の威力や範囲を絞りにとどめるというやり方もある。だが、意識的な制御ができていない私にはまだ無理だ。

そこで、相手の行動を妨害する程度のいわゆる「通常攻撃」を仕掛ける。相手が被弾してもダメージが小さい攻撃であれば、ルール上は問題ない。

霊夢に作ってもらった封魔札を取り出し、妹紅に向かって放つ。霊気に乗せた札は、遠隔制御で繰り返し攻撃ができる。

それを回避するために妹紅が移動すると、その分、彼女からの攻撃に空隙ができる。こちらはそこを足がかりにして接近を狙う。

ゆるい弾に入り混じって、ときおり高速の自機狙いが飛んでくる。似たような形の弾だとつさの動きが難しいが、意識して区別がつく弾を使ってくれているようだ。それでも、回避はかなりぎりぎりだ。

スperl発動の最大の好機は相手の攻撃が途切れた直後だ。そのタイミングを計って集中力を高める。

妹紅の動きに、ほんのわずかな齟齬が視えた。

『！』

身体の内側に、音にならない響きが走る。

燃え上がる弾の群れをすり抜け、カードを取り出した右手を妹紅に向けた。同時に、身体の内奥が震えるような感覚とともに声が出る。

『夢想封印』

白い閃光とともに無数の光弾が現れ、四方に散ってから不規則な軌道を描いて妹紅に向かう。

「わっ？」

妹紅は跳躍するような動きで光弾の群れから身体を引き離そうとする。素早い動きで回避を繰り返す。が、最後に一発だけ命中する。

私の身体から緊張が急激に抜け落ち、攻撃はほぼ自動的に終了する。

そのまま妹紅は地面にゆっくりと降り立ち、私もその後が続いて側に降りた。

神社からすこし下ったところにあるこの野原は、いわば展望台風に山の斜面から突き出た形の場所なので、山に囲まれた幻想郷の領域が一望のもとに見渡せる。

その眼下に広がる風景を眺めながら妹紅が言った。

「今のはちよつと虚をつかれたな」

『そうか？ でも、たぶん次は通用しないだろう。フェイントをかけられたら引つかかるかもしれないし』

「ふえいんと？」

『ああ、つまりわざと隙をつくってみせるといことだよ』

「うーん、そこまではちよつと難しいな。まあ、すこし力押しに頼る戦い方になっていたのかもしれない。反省する必要がある」

妹紅は自分のこめかみをとんとんと叩く。

「結局ふだんやり合う相手がいないと、こついうところが鈍ってくるんだな」

実際には妹紅の身体の動きにはとても人間とは思えないような素

早さがある。長い年月をかけて会得したという妖術とはまた別に、肉体の鍛錬度という意味でも常人とはかけ離れている。私からすれば、どこをどう評価したら『鈍って』などという表現が出てくるのかという感じだが、妹紅自身の基準は遥か上のほうにあるのだろう。

「一息入れよう。かなり動き回ったし、力を消耗したんじゃないか」
『そうだな』

いちおう空中でも霊力の補給はしながら戦っていたのだが、やはり補給の速度に限界があるので、だいぶ目減りはしているだろう。

と、山の斜面に沿ってすると降りてくる影が見えた。なんだろう、と思っているとそれが箒に乗った魔理沙だということが分かった。

「いよう。精が出るね、おふたりさん」

魔理沙はひらひらと片手を振る。

『もうだいたい出し切ってしまったよ。いまちようと神社に戻って休もうと思っていたところだ』

「なら、臨時の運び屋さんになってあげるぜ。人間ひとりと人形一体ならどうってことはない」

魔理沙を乗せた箒は私たちの目の前にふわりと降下して、地面近くまで来て静止した。

妹紅がすこし戸惑ったように私を見た。

『まあ、せつかくだから乗せてもらえばいいんじゃないか。魔理沙の場合、飛ぶのに確か体力はあまり使わないんだろう?』

「ああ。言ってみれば、飛ぶために造り換えた魔力を制御して飛んでるからな。だから実際、荷物を運ぶときもけっこう便利だぜ。ほれ、乗った乗った」

魔理沙は腰の位置を前にずらして、空いた場所を指差して見せる。

「……すまない」

妹紅は遠慮がちに横座りの形で腰を下ろす。

私は魔理沙の肩の上に乗った。

「それじゃいくぜ」

箒はすつと上昇し、木々の並ぶ山の斜面向かって飛行を始める。

「自分ではない誰かの力で飛ぶっていうのは……すこし不思議な感じだな」

妹紅がつぶやくように言う。

すると、魔理沙が後ろを振り向いて妹紅ににやりと笑いかける。

「お前、近頃妙に言うことが女の子っぽくなってないか?」

「な、なんだ急に。わたしはもともと女だし、別にそんなことを意

識してはいないぞ」

「そうか？ まあ、わたしなんかよりずっといろんなことを知ってるんだろっから。ガキのたわごとにしかな聞こえないだろうが……なんだか、さっきの仕草とかも女の子だったぜ」

『?……さっきの仕草ってなんだ』

「チビは分らないのか？ まあ、注意して見てれば気がつくぜ。お前だって、一応は女の子なんだからな」

『……………』

はて、もしかして魔理沙は少し不機嫌なのだろうか？ 私にはちよつとこの態度の意味がよく分からなかった。

母屋の前まで来ると、縁側に霊夢と並んでアリスの姿があった。

「おかえりなさい、チビさん」

アリスが私たちの到着に気づくと、にっこりと微笑む。

『ただいま……』というか、もしかして魔理沙と一緒に来たのか？』

「ええ。まあ、ちよつといろいろあってね。あなたの身体の具合とかも少し見させてもらえたらなあと思って」

「要するに定期検査の前倒しっていうところだ。妹紅、脚を下ろしていいぜ」

「あ、ああ。ありがとう」

妹紅が箒から脚を下ろして立つと、魔理沙は指先を軽くはじくような仕草をする。ほぼ同時に、箒から浮力が抜ける。

「なんだかあれね。こうやって改めて顔を合わせてみると、すごく上品なお嬢さんみたいな感じね、妹紅って」

アリスが言うと、妹紅は少し頬を赤らめた。

「いったいさつきから何だって言うんだ、よってたかって」

「さつきからって？」

『来る途中、魔理沙も似たようなことを言ってたんだよ。女の子らしくなったとか』

「それはむしろ魔理沙の言い方のほうがおかしいわね。元から普通に女の子らしいんじゃないの？」

「わたしは別に前は男らしかったとか言ってたわけじゃないぜ」

霊夢が「はいはい」と魔理沙をなだめるように手を振る。

「とりあえず、これからアリスがチビの身体を診るから、わたしたちは席をはずしましょう。ちょっと手伝ってもらいたいこともある

し」

「わかったよ。妹紅、お前もだ」

魔理沙は妹紅を手招きすると縁側から上がり込み、霊夢のあとについて台所のほうへ引っ込んだ。

私が空中から縁側に下りると、アリスは私を両手で抱き上げて自分の膝の上に置いた。

「このところ、戦い方の修行をしてるんですって?」

『修行と言えるほどの内容かどうかは分からないが、まあ少しずつだよ。無理はしていない』

「それはいいんだけど……服、いい?」

『ああ、自分で脱ぐよ。上だけでいいか』

「ええ」

私は袖をはずし、上着を脱いだ。

「……あなたの動きって、前よりも精確になっているわね。指の一本一本までちゃんとコントロールできている感じ」

『そうだな。最初にこの身体に移ったところに較べると、できるようになったことが増えた』

「それだけ力を効率的に使えるようになったということでもあるわ」

アリスは上着を脱いだ私の身体を横たえて、人差し指で左の二の腕に肩にそつと触れた。そのまま、指をゆっくりとひじに向かって移動させる。

「いまのあなたの身体の中には、前にわたしが張った魔法の系以外にも力の流れがちゃんとできている。必要に応じてそれを感じ取ることもできるようになってきてるのね」

『そうみたいだな』

「……もう、他人事みたいに」

『他人事っていうか、だんだん身体の中のことを意識しないようになっていけるのも確かなんだ。自分が思ったことが、ある程度外に反映されるようになってきたせいなんだろうな』

以前は自分の身体に力を取り込むのも意識的にしなくてはならなかったが、いつのまにか意識せずにやりたいことと結果がつながるようになってきた。

「それと、身体が全然汚れないようになったわね。もしかすると、力場を出せるようになってるんじゃないかしら」

『力場？』

「障壁という言い方をすることもあるわね。要は物理的な力の作用を跳ね返す場のことよ。これを使えないと強い敵とはまず戦えない」

『そつえば、攻撃が近くをかすってもダメージを受けることはな

「いみたいだ。単に妹紅が手加減してくれてるだけだと思ってたんだが」

「直撃を受けたことは？」

『それは実はまだないんだ。妹紅の攻撃はまともに食らうとえらいことになりそうだから、必死に避けてる』

「お互いある程度避ける余地がある攻撃をするのが暗黙の了解っていつのはあるけど……」
「的が小さいというのもあるかしら」

「アリスは今度は右肩に手を触れ、そのまま手首へ向かって指をなぞらせる。」

「もう靈氣の出力の制御もできるの？」

『いちおう、靈氣の塊を撃ち出すことができるようになった。力を凝縮させる感じにすると発光する弾も出せるし、目標への誘導もある程度はできる』

「凄い進歩ね。こうして視た限りでは、内部の靈氣の通路そのものには大きな変化はない。つまり効率が上がったということね。肉体という柵がない分、精神と力の連携が進んでいるんでしょう」

「ふう、とアリスは息を吐く。」

「この調子だとひとかどの人外として扱われるようになるのも時間の問題ね。あなたにちょっかい出そうとする物好きな奴も現れるかもしれない」

『まあ、しかたがないな』

というか、だいぶ前に現れてはいるんだが。

「こう言っではなんだけど、わたしだって戦うこと自体は嫌いじゃないのよ？ 人形の作り手としては一種の応用問題でもあるから。でも相手によつてはあんまり戦いたくないな、と思う人もいるわ」

『……………』

「聞いたんだけど、最初は霊夢や魔理沙に戦いの練習相手になって欲しいって頼んだんですってね？」

『ああ。即答で断られたが。戦いの対象とは全然見なされてないってことだろうな』

するとアリスは心底あきれたという顔つきで私を見た。

「お馬鹿さんねえ。女の子の心つてのをまるで分かってないわ」

ぺしつと指先でわたしの額を叩かれる。

「本当の理由は、怖いからよ」

『怖い？』

私は思わず身体を起こしてしまった。

『どういうことだい、それは』

「自分をさらけ出すのが怖い。戦いの場では良かれ悪しかれ自分の器量というものが出る。とくにスペルカード戦にはそういう性質があるわ。戦いのルールが単純だから、その解釈も、勝負のあり方もそれぞれの考え次第になる。だからこそ自分がむき出しになってしまう」

『だが、彼女たちはもう何度も場数を踏んでいるわけだろう。いまさらそんなことを怖れるだろうか』

「だから言っただじゃない、相手によるって」

アリスは私に身体を元に戻すようにと促して、お腹に手のひらを当てた。小声で呪文を唱えると、その周囲が淡い光を放ち始める。

「あなたは……あまり意識してないのかもしれないけど、あの子たちはまだ本当の意味では大人にはなっていないのよ？ とても真っ直ぐで、でも壊れやすい心を持っている。そんな子たちが、大人のそれも男の人に自分の中身をさらけ出す勇気を簡単に持てると思う？」

『……私が男だっというのはもう確定なのか』

「少なくともいまのあなたの発言ではつきりしたわ。ちなみに、わたしは見かけはこうだけど、それなりに齢はとってるのよ。年寄りというほどじゃないけど」

ああ、そういえばそうだった、といまさら思い出す。彼女は種族的な分類上はヒトとしての存在を超えた魔法使いなのだった。

しばらく眼を閉じていたアリスは、やがて手のひらを私から離し

た。

「魂の核は安定しているわね。今のところ修行の影響というのはとくにはないみたい。いいわ、これで。服を着て」

「わざわざこつちまで来てもらって、悪かったな」

「今回は魔理沙に引つ張り出されたようなものよ。まあ、なんだかんだという理由をつけてたけど、かなり複雑な心境のようよ」

「複雑って、何がだ」

「あなたが練習相手の件を妹紅にもっていったことよ。わたし、今回の件はわりと計算づくだったのかと思っていたわ。断られるのははじめから承知の上で先に霊夢と魔理沙に話をしたんだろうって。でもいまの話を聞くとそうでもないみたいね」

「嫌がられるだろうとは思っていたさ」

私は上着に腕を通し、襟を整える。

「ただ、あそこまできっぱり断られるとは予想してなかった。魔理沙は敵になるかもしれない他人相手に練習なんかできないと言った」

「その言い方はあの子の偽悪趣味よ」

「いや、一理あるとも思ってたさ。争いに決着をつける唯一の手段だというなら、あり得ることだ。鍋に使う味噌を赤にするか白にするか決めるために霊夢と一戦交えたなんてこともあったらしいからな」

「それはじゃれ合いみたいなものでしょうけど……霊夢に言ったときは彼女何て答えたの？」

『自分の鏡みたいなのと戦うのはたとえ練習でも嫌だと』

「なるほどね。でも、それほどの理由とも思えないわ。むしろ自分と同じ能力をもつ者を相手にするのは訓練としてならいい機会のはずだもの」

もしアリスの言い分が正しいとするなら、妹紅を相手にした修行は、あの二人にとってはあまり面白くないということになるのだろうか？ あるいは、そのことについて何か言いたいことがあるのに口に出せずにいるというような状況なのだろうか。

すると、私の心中を見透かしたようにアリスが付け加える。

「いまのあなたはむしろあの子たちを優しくリードすべき立場ですよ。それも、できれば本人たちには気づかれないように」

『むずかしい注文だな。だいたいそれじゃ、まるで保護者じゃないか』

「本当なら保護者がまだ必要な年頃なのよ、すくなくとも精神的な意味では。もちろん、同じ年の普通の女の子に較べれば強い心を持っているだろうし、物事を高いところから判断する力もあるでしょう。でも、すべてバランスがとれているとは限らない」

『うーん……』

「期待をあなたに押しつけるつもりはないわ。でも、ただの居候役

に甘んじている時期はそろそろ終わりじゃないかとも思っただけど

「だが、このまま自分の役どころを見つけてしまっていないのかという気もする。さてどうしたものか。」

その16につづく

その16

16

結局、アリスを送る「ついでに」魔理沙がもってきたという食材を使って、鍋をすることになった。

昼食にはちょっと重いのではないかという気もしたが、夜にやると妖怪が寄ってくるからいいんだという。

障子を閉めた茶の間で四人が掘り炬燵に入って鍋を囲む。

「しかし……それ、こんなものに使っていいのか？」

妹紅が当惑したように言う。

「こんなものだろうとどんなものだろうと使えるものは使う。そのおかげで炬燵の上で鍋ができる。幻想郷広しと言えどもこんなことはわたしにしかできないぜ」

魔理沙は具の煮え加減を確かめながら涼しい顔で応える。湯気をたてている土鍋の下には魔理沙のミニ八卦炉が淡い光を放っている。

なるほど、カセットコンロなどという器具のない幻想郷では、こんな情景は八卦炉だからこそ成り立つことなのだろう。

「あら、妹紅なら簡単にできるんじゃない、火なんかいくらでも出せるんだし」

身体全体を炬燵布団の中に突っ込むようにして顔だけ出している
霊夢が言う。

「パチユリーもやれるかもね。属性魔法得意だから」

と向かい側のアリス。

「もつとも、そんなの魔力の無駄遣いだって言うでしょうけど」

「そういえばチビ、幽香はあのあとちょっかい出してこないのか？」

魔理沙は二人のコメントを無視して妹紅の膝の上の私に話を振る。

『いや、何もないな。諦めてくれたのかもしれない』

「幽香って、風見幽香のことか」

妹紅が言うと、霊夢が顔を上げる。

「あら、知ってるの？」

「たまに里で見かける。人間にしては異様な雰囲気だったから、知り合いに訊いたら、山の奥の花畑に棲んでいる妖怪だと教えられた」

「ふだんは静かにしてるんだけどね。なんだかチビに興味を持ったらしくて……このあいだチビが里に行ったのも、幽香に追いかけられたからなのよ」

「追いかけられたというのは？」

「幽香に勝負しろって言われて、チビが逃げ出したのよ。ただ断れ
ばいいのに」

『霊夢はその場にいなかったからそんなことが言えるんだ』

私は反論した。

『あのときの幽香さんはどうあっても相手をしてもらってという態度だった。ほとんど脅迫に近かった』

「すると、いまチビが頑張っているのは、その風見幽香に対する備えということなのか」

妹紅がすこし眉をひそめる。

『いやいや、そこまでは考えてない。ただ、あれぐらいの相手と戦うこともあり得るというぐらいには思っている』

「もうそろそろ煮えてきたかな」

魔理沙は小皿にキノコの切れ端を乗せ、腕を伸ばして妹紅の前に突き出す。

「ちょっと味見してくれ」

「いつ」

妹紅はひるんだように背をそらす。

「それ……その、大丈夫なのか？」

「死にはしないわよ」

と霊夢が目を細めて言う。

「ま、わたしはこれまで数々の試練に出会ったけど死ななかった」

「それは言い方としてはちょっとキツ過ぎるんじゃない？」

アリスが苦笑する。

「せめて病気にはならなかった、ぐらいいしておけば……」

「……………」

妹紅の口元がひきつる。

魔理沙が憤慨したように口を尖らせる。

「馬鹿、今回の魔法の森じゃない普通のところから採って来たキノコだよ。だいたい、同じ鍋から食うものが毒だったら、わたしも含めて全滅だぜ」

「まあそれはそうだが」

妹紅はおそろおそろ口に入れる。

「…………どうだ？」

魔理沙はなぜかすこし緊張気味に問う。

「ああ、まあ普通に美味しいと思うが」

「そうか」

ほっとしたような顔をする魔理沙に、霊夢がすかさず突っ込む。

「やっぱり自信がなかったんじゃないの」

「違う。雑な味つけになってないかどうか、確かめたかったただけだ」

「味にうるさい奴だと思われたか？ ふだんそんなに上等なものを食べてるわけじゃないから、大丈夫だ」

妹紅は微笑んだ。

「気を使ってもらってすまなかったな」

「いや、まあ……別にそんなんじゃないんだ」

考えてみれば、それまであまり親しく接していなかった人に自分の料理を食べさせるというのはそれなりに緊張する状況なのかもしれない。

「それじゃあ、わたしお爛つけてくるわ」

霊夢が元気よく立ち上がる。

「昼間から酒か」

妹紅がびっくりしたように霊夢の顔を見る。

「だって今日は寒いもの。身体を温める程度ならいいんじゃない？」

そう言つて台所へと姿を消す。魔理沙が鼻を鳴らす。

「手のひらを返すつてのはこういうことをいうんだな……あいつ絶対食えないもの持ってきたと思つてたな」

「それはふだんの行いのせいじゃない？ でもまあ、今日はちよつと違ふみたいだけど」

アリスはくすくす笑い、それから私のほうを一瞥する。それは、さあ、どうするの？ という問いかけのようにも感じられた。

『……なあ、魔理沙』

「なんだ？ お前もコレを試食してみたいのか」

『私は構造上食べられないよ。それより、今日来たのは何か私に話があつたんじゃないか？ あるいは私と妹紅、両方にかもしれないが』

「……………」

『遠慮なんてする間柄だったのか、私たちは？』

「分かつたよ。霊夢が戻ってきたら、ちゃんと話すよ」

アリスが口の端をかすかに緩める。思惑通り、といったところなのだろうか。

「最近、妖怪の間ではチビのことがけっこう話題になってるらしいんだ」

魔理沙は片手で盃に爛酒を注いだ。

「慧音との一戦を見てた奴が何匹かいたらしくて、そこから話が広がったんだ。身体が小さいのに恐ろしくど派手な弾幕で相手を倒したって……で、そいつの正体は神社の居候だという話がくつついた。まあそこまでは本当の話だけどな。そこで誰が言い出した。近々、そいつを使って神社の巫女が人里周辺の妖怪を狩って回ろうとしてるんじゃないかってな」

「考えが飛び過ぎね。なんでそんな面倒なことをわたしがやらなきゃならないのよ。一銭にもなりやしないのに」

「お前のそんな性格をそこらへんの妖怪どもに想像できるわけがないだろ。ただ、話だけならまだ半信半疑ってところだったらしい。だが、裏付けになる情報が出てきた」

「わたしか……」

妹紅がかすかに眉根を寄せてつぶやく。

「ああ。お前のことはかなり昔からいろいろな話が出てたらしいが、その中でも、強力な妖術使いとして妖怪退治を長いこと生業にしていたという話は有名なんだそうだ」

魔理沙は盃に口をつけ、傾けて飲む。

「ただ、幻想郷に来てからはよほどのことがないかぎり自分から妖怪を攻撃することはない。だから、敬して遠ざけておけば問題ないということになっていた。ところが」

『派手な弾幕をご披露した神社の居候、つまり私をその妖術使いが鍛えている……』ということは、まんざらあり得ない話でもなくなってきた。そんなところか』

妹紅が息を吐く。

「疑心暗鬼とはよく言ったものだ……しかし、そうなるとわたしがここに来るのはすこし遠慮したほうがいいのかな？」

「そんな必要はない」

魔理沙が少し力を込めて言う。

「チビの頼みを引き受けただけなんだから、気にすることはないぜ。ただ、ちよつとだけ訊きたいことがある」

「何だ？」

「お前、チビに何かその……」

魔理沙はすこし口ごもったが、顔を上げて言葉を継いだ。

「チビのことが引つかかるというか、気になることがあるのか？」

「……………」

妹紅が虚をつかれたという感じで口を開けたまま魔理沙の顔を凝視する。

「霊夢とアリスもなぜか黙ったままだ。」

私はとりあえずこの奇妙な沈黙を破ることにした。

『それはつまり…………』

「チビ、お前は黙っとけ。妹紅に訊いてるんだ」

魔理沙の口調の鋭さにすこし驚いた。怒っているわけではないの
だろうが、仕方なく黙る。

妹紅はすこし当惑した顔つきだったが、やがて苦笑を洩らした。

「そうだな。確かにわたしはチビに引つかかっているところはあるんだ。まあ、わたしのスペルを使ったということもあるが……………それ以前に、いちばん初めにチビを見たときに感じたことがあった」

そこで、ふと妹紅が魔理沙の手に行っている盃に眼をやる。

「わたしにも一杯貰えるか」

「いいぜ。これで良ければ」

魔理沙は袖の端で杯を拭いて妹紅に渡し、銚子から酒を注ぐ。

妹紅は盃を傾けて中身を干すと、言った。

「最初に思ったのは、何か忘れてることがある、ということだったんだ」

「忘れてる……？」

霊夢が私をちらりと見て問い返す。

「ああ。居心地の悪さというか、とにかく何か忘れてるという感じだ。でも、その理由が分からない。その後で、チビが過去の記憶をなくしてしまっているという話を聞いて……それで、もしかするとこの『忘れてる』という感じと何か関係があるんじゃないかという気がしてきたんだ」

「なるほどな……」

なぜか魔理沙がすこしほっとしたような顔つきになる。

「で、その忘れてるっていう感じについてはまだそのままなのか」

「ああ。もしかするとそのうちに思い出すんじゃないかと思っていたんだが……だから、ただの気のせいではないのかもしれない。それで言い出せなかったんだ。余計な心配をさせなかったからな」

「それはもつともな話ね」

とアリス。

「既視感というのものもあるから。一度も見たことはないはずなんだけどなぜか見たことがあるような気がする、という感覚ね」

「チビを見たことがある、というのとは違う気がする。むしろ、何か大きな出来事をまるごと忘れてるような……そんな感じた」

『だが、大きな出来事を忘れたら普通その前後のつじつまが合わなくなるだろう。すくなくともその直後はひどくおかしい感じがするはずだ』

私が言うと、妹紅が苦笑する。

「うーん、そうなんだが……いままでそういう風に思ったことはなかったんだ」

魔理沙が息を吐く。

「悪かったな、なんだか立ち入ったことを訊いて。ただ、前から気になってたんで、このままだと顔を合わせづらくなってるってな」

「いや、むしろ訊いてもらって良かった」

妹紅は微笑んだ。

「わたしも本当はこのままだとまずいな、と思っていたんだ」

山の端に近づき始めた太陽に向かう形で魔理沙とアリスを乗せた箒がゆるやかに飛んでゆく。魔理沙は両脚でまたがる形で、そしてその後ろのアリスは横座りの形で乗っている。

「すこし風が強いな……もうすこし高度を下げるか」

魔理沙が低くつぶやく。

すると、アリスがぽつりと言った。

「本当は違うんでしょう?」

「何がだ?」

「チビさんに言いたかったことよ」

「……べつに、あいつに言いたいことなんてないさ。もちろん妹紅に対してもな。正直、少しおせっかいが過ぎた」

「でも結果としては、チビさんがどうして妹紅さんと関わっていたのか、その理由がはっきりしたんじゃない? 彼女が『何かに引っ掛かっていた』ということをチビさんも感じ取っていたのよ」

魔理沙はため息をつく。

「あいつ、お前が身体を診てたとき何か言ってたか？」

「妹紅さんのことか？ それは特にはなかったわね。ただ、わたしのほうからはひとこと言っておいたけど」

「何て？」

「あなたたちのことを、もっと考えてあげたほうがいいって」

「なんだよ、それ……わたしと霊夢ってことか？」

「そう」

「こっちはチビに気を使ってもらいたいわけじゃないぜ。ただ、あいつはときどき何を考えてるか分かんない感じがすることがあるから困る」

「まあ、表情が変わらないからね。それに……魔理沙もそうだと思うんだけど、あの人はちよつと勝手が違うって感じなのよ。わたしたちみたいな、普通のヒトから見ればおかしい存在を初めからなんの抵抗もなく受け容れてくれるから……本人はたぶん全然意識してないけどね」

「……………」

「ある意味では霊夢に似ているとも言えるけど……」

「わたしはさ」

魔理沙はアリスの言葉をさえぎるように声を出す。

「わたしは、チビがどこの誰かなんてことはどうでもいいんだ。ただ、あいつと霊夢がうまくやってくれてればそれでいい。このままでな」

「このまま……ね」

だが、『彼』はこのままでいようとはしないだろう、とアリスは思った。おそらく、そのような『在り方』ではいられない存在なのだ。でも、それをいまの魔理沙に理解してもらうのは難しい。

この先何ができるかは分からない。ただ、それは誰にもおしとどめることもできないだろう。

すこし考え方が年寄り臭くなってるかな？

アリスは魔理沙の帽子からこぼれて波打つように揺れる金色の横髪に眼を向け、ひそやかな苦笑を浮かべたのだった。

その17につづく

その17

17

灰色のようできて赤みを帯びているようでもある。青みがかつているようにも見える。見るたびに違った色合いを感じさせる、あいまいな空。

そんな空の下に、これもまた模糊とした色合いの河が流れている。本当に水が動いているのか、定かではない。ただ、その表面に漂っている霧はかすかにゆらめきながら全体としてはゆったりと一定の方向に移動している。あたりには生き物の気配はまるでない。風もなく、音もない。

ただ、この薄明の風景には、陰鬱な雰囲気はない。むしろ、どこか乾いた明るさのようなものさえ感じられる。

河べりに粗末な感じの杭と板で造られた小さな船着き場があり、くすんだ色の小舟がもやってあった。そして、その傍らにはひとりの少女が腰を降ろしていて、川面を見つめていた。髪は赤がね色で、左右の二箇所飾りのついた紐を結んでまとめられ、ツインテールの形で垂らされている。着ている服は裾長のワンピースのように見えるが、上半身は和服に似た前開きの形になっており、胴には帯を締めている。まさに和洋折衷という感じの渾沌としたデザインだ。

と、何か気配を感じたのか、彼女は背後を振り返った。

「おや……」

そこには日傘を手にした風見幽香が立っていた。

「これはまた珍しいね。あんたがわざわざこんなところに出向いてくるなんて」

「お久しぶりね、死神さん」

幽香がにつこりと笑いかける。

「ここところは暇そうね？」

「まあね。魂が来るのにも波みたいなものがあつて、何人かたて続けに来た後は、間があくことが多いよ。いまはちょうどそんな感じだ」

「それは良かったわ。実はちょっとしたお土産があつてね」

幽香は手にしていた布袋からガラス瓶を取り出して見せた。中には淡い褐色の液体が満たされている。

「それって、もしかして酒かい？」

「ええ。わたしがお花たちから分けてもらった花びらを使って熟成したお酒よ。自分で言うのもなんだけど、そう悪くない仕上がりになっているわ」

「ふうん、花の妖怪が作った花の酒か。どんな味がするもんだかな」

「試してみる？」

幽香は腰を下ろし、陶製の杯を取り出す。

「いちおう仕事なんだけどね……まあ少しならいいかな」

三途の河の渡し守としては少々暢気なところがある小野塚小町は、誘惑に勝てず、幽香から杯を受け取った。

瓶が開けられ、中身が杯に注がれると、小町は目を細める。

「なかなかいい香りだね……そんなじゃ、ちょっと一口」

杯の端に唇をつけ、杯を傾ける。

「ん……」

「いかが？」

「ちょっと変わった味だが、悪くないね。何の花を使っているのか分からないが、花らしい味だという感じは確かにする」

「気に入って頂けて光栄ね。もしよろしかったら瓶ごと差し上げるわ」

「ただし……というやつかい？」

小町は杯に残った分を干すと、にやりと笑みを浮かべる。

「出不精のあんたが、この世とあの世の境にまで出張ってきたんだ。何か魂胆があつてきたんだろ？」

「まあ、少なくとも魂に関わる話ではあるわね。実はいま、ちょっと変わったモノが博麗神社に住み着いてるのよ」

「ほう。それはまたどういう？」

そこで幽香は人の魂を宿した小さな人形が巫女と関わるまでの経緯、そして周囲の連中との関係について語った。多少長めになったその話を、小町はわりと興味深げに聞いていた。そして聞き終えると、煙草盆の引き出しを開け、刻み煙草を煙管に詰めながら幽香に訊いた。

「なるほどね……でも、そこでなんであんたがこんなところまで出張ってくることになるんだい？」

「わたしは、その人形に宿ってる魂の正体が知りたいと思っているの。そこで、ヒトの魂についてはいちばん詳しくそうなあなたに相談しようと考えたわけ」

「魂に『正体』なんてものはないよ」

小町は煙管をくわえて火種から煙草に火を移す。

「まあ仮にあつたとしても、あたみみたいな渡し守ごときには分らないことだよ」

「でも、たとえばその魂が死人のものかどうかってことぐらいは分かるでしょう」

「それは分かるよ。っていうか、生きてる人間の魂が身体から出てフラフラするなんてことは滅多にあることじゃないからね……普通は魂って言ったら死んだヤツの魂だよ」

「だとしたらあの魂の面倒を見るのはあなたの仕事じゃないの？ 経緯はどうあれこの幻想郷に入ってきた魂なんだから」

「さあて、そのあたりはちょっとねえ」

小町は煙管をくわえ、味を確かめるように軽く吸ってから、唇を開いてゆっくりと煙を吐き出す。

「ここで死んだヤツの魂ならあたいの担当だけだね。話を聞いた限りじゃ、どうもそういうことじゃないみたいだし……」

「分からないわよ？ 外から来た人間が妖怪に喰われたのかもしれない」

「そんな死に方をした魂が簡単に巫女の身体にとり憑けるとは思えないがねえ？ いちおう相手は博麗の巫女なんだから。まあ、どっちにしても」

小町は今度はもうすこし深く煙を吸込み、ふたたび吐き出す。

「その魂を宿した人形ってやつをこの眼で拝まないことにははつきりしたことは分からないよ」

「だったら、ひとつ神社まで御足労願えないかしら。あなたは距離を操れるんだから、それぐらいいわけもないでしょう？」

幽香がそう言うと、小町は困ったように笑った。

「いやあ、それが、このあいだちょっとヘマをしちゃってね、四季様にお叱りを受けちゃったんだよ。仕事じゃないことでむやみに住人に関わるなってね」

「へえ？ 本人だって暇があるとあちこち説教垂れて回ってるみたいじゃないの」

「あれは仕事の一部だってことらしいよ。そんなわけなんで、しばらくは動き回るのはやめておきたいんだ。できればそのお人形さんをここか、さもなきや無縁塚あたりに連れてきてくれないかね。あそこは時々見回りに行かなきゃならないことになってるから、他の場所よりは言い訳もしやすいしね」

「無縁塚、か……」

幽香は考え込む。無縁塚は呼び出しをかけるにはちょっと向いていない場所ではある。とはいえ、相手が喰いつく餌がありさえすれば多少の危険は冒してでも来るだろう。

「分かったわ。それはなんとかしてみる。あと、あなたの都合にあわせなきゃならないわよね。仕事があるわけだから」

「それはそうだね。それにしても」

小町は最後の一服を吸い終わってから、煙管の灰を落とす。

「どうして、そこまでしてその魂のことを知りたいんだい？」

「一言でいえば、気持が悪いからよ。そういう存在自体が」

「でもあれじゃないか、たしか毒を吐く人形ってやつもいたじゃないか。あいつも似たようなもんじゃないのかい」

「あれは人形が妖怪になっただけで、魂が宿ったわけじゃないもの。それに、霊夢を取り込めるところが気に入らないのよ。根っこのところでは誰も信じてないはずのあいつが、どうしてかアレにだけは心を許しているような感じがするの」

「人形と巫女というのは案外相性がいいのかもしれないね」

幽香が少し驚いた顔をする。

「どうということ?」

「巫女はもともとは神を地上に降ろすための器だよ。魂の依ります器という意味では人形と同じさ」

「……似たもの同士というわけね」

「あんたとしては、そのお人形を追っ払いたいという感じなのかい」

「さあ、そこまでは分からない。ただ、このまま放っておくと良くないような気がするの。そのために相手の方を見極めたいのよ」

「まあいいさ。ただ場合によっちゃ、そいつのことを四季様に知らせなきゃならないね。それは構わないかい」

「構わないわよ。べつに隠す必要はないことだもの」

幽香は立ち上がる。

「とりあえず話をつけに神社に行ってくるわ」

「そうかい。まあ今のところはこっちは暇だから知らせてくれればすぐ行くよ。塚の裏側にここに直に繋がってる『抜け穴』がある。そこを通ればここにはすぐ来れる」

「じゃあここからも無縁塚に戻れるわけ？」

「いや、こっちからだと『穴』にあたるものがないんだ。一方通行ってことさ。でも、こっちはあたいと一緒に行くから問題ないだろ」

「分かったわ。それじゃあ、また」

幽香が去ったあと、小町は腕を上げて大きく伸びをしてからつぶやいた。

「さて……それじゃ今回は先に手を打っておこうかね」

境内の掃除が終わって縁側で一服している霊夢のそばに近寄ってみる。こういうときの彼女はわりと柔らかな表情で、ゆったりとしたお嬢さん育ちの女の子のようにも見える。

『靈夢、ひとつ訊きたいんだが』

「ん、なに」

靈夢は私の身体を持ち上げて膝の上に載せる。

『このあいだ妹紅が言っていた、まるごと大きな出来事を忘れてる、なんてことは本当に起き得ることなんだろうか』

「ああ、あの話？ うーん……そうねえ」

わずかに眉根が寄せられる。

「まあ、まったくあり得ないことではないかもしれないわね」

『というと？』

「あなたが里で一戦交えた例の慧音っていう人はワーハクタクっていう半人半獣なのよ。そのために彼女は歴史を隠したり生み出したることができるの」

『……それはかなり凄い能力じゃないか？ そうなると人の記憶を消したりもできるってことか』

「使いようによってはできるのかもしれない。でも人の記憶をどうこうなんて、軽々しくやるべきじゃないわよね。そういうことをやる人じゃないような気がする」

『そうか……』

たしかに他者の記憶をいじるなどということは倫理的にも問題がある。少なくとも、教育者としての役目を果たしている人にふさわしい行為ではない。

「ただ、慧音は妹紅のことをいろいろと面倒を見てるみたいだし……妹紅を助けるためににかした、ということはあるかもしれないわね」

霊夢は腕を回して私の胸に両手を重ねる。

「例えば、何か相手にとって辛いことがあって、それがいつまでも尾を引いて苦しんだりしたら……自分に何かできることはないだろうか？ 考えるかもね。でも、難しいわね。それが本当に相手のためになるかどうかは分からないから」

『そうだな』

いくら辛い思い出であっても、それを失うことは自分の一部を失うということでもある。

『霊夢なら、そういう手助けはしないか？』

「普通ならしないわね。それって、相手を救うためっていうよりは、辛い思いをしている相手を見ている自分が辛いってことだと思うから」

正論だ。実際、そういう理由で動いてしまう人々は多いだろう。

「でも、相手によるかもしれない」

『……………』

霊夢は、軽く息を吐いて苦笑した。

「まあ、さすが自分が辛くなるほど気になる相手なんていないけどね」

私の場合、どうだろう。例えば、もし霊夢が悲しみにくれているときにそれを黙って見ていられるだろうか。

『正直、私は耐えられるかどうか自信がないな』

「え？」

『大事な人が苦しんでいるときに、何もできないままで耐えるというのは難しいかもしれない。ただ、いまの私では結局何もできるわけではないけどな』

「そこまで卑屈にならなくてもいいんじゃない？ 『相手に何かしてあげる』ということだけが救いじゃないと思う」

『……………？』

じゃあ、何もしなくても相手を救える場合もあるということだろうか？

「ま、それはそれとして、慧音のところに行って話を訊いてみるのもいいかもしれないわね。妹紅とはいちばん親しいわけだし、何か知っていることがあるかもしれない。それに、このあいだの一件に

ついても挨拶しとかないとね」

『そつえばそうだな』

だいぶ時間が経ってしまったが、いちおうけじめのようなものをつけておかないとすっきりしないのは確かだ。

「寺子屋はお昼までのはずだから、昼過ぎに行ってみましょう」

『分かった』

その18につづく

その18

18

「……これはどうも。わざわざこんなところに出向いていただいて」

寺子屋の玄関に出てきた慧音さんは霊夢とその腕に抱かれた私の姿を見て、ひどく恐縮したような顔をした。

「この子がいろいろと迷惑をかけてしまったみたいだから、そのままというわけにもいけないと思ったの」

「いや、迷惑をかけたのはわたしの方です。妹紅様からいろいろ話は聞きました。わたしが勝手に勘違いをしてしまったようで……まあ、立ち話もなんですからどうぞ。もう子どもたちは帰りましたので」

私たちは座敷に案内され、囲炉裏の前に敷かれた座布団を勧められた。先日とはうって変わってひどく丁寧な物腰だった。

「いまお茶を淹れてきますので、どうぞ楽になさってください」

慧音さんは囲炉裏にかけられていた薬缶を手にとると奥へ引つ込んだ。

『慧音さんって、普段はああいう感じの人なのか』

「ああ……うん、たぶんね。実はわたしもあんまりよく知らないのよ、あの人のことは。付き合いがあるというわけでもないから」

霊夢はそこで声をすこし低くした。

「わたしの周りって妖怪だらけだから、たぶんあんまり好ましい相手ではないはずなのよね。あの人は里の人間を守っているっていう気持ちがあるから」

『霊夢だつて妖怪を退治する立場だろう』

「でも、その退治した相手が結局出入りしてるからね……レミリアとか萃香とか。まともな人間から見れば何考えてるんだって感じなんじゃない？」

『なんだか報われない立場だな、霊夢も』

「べつに報われなくてやってるわけじゃないからね。わたし自身が気に入らないって思うからやってるだけだもの」

ややあつて、茶托に置かれた上品な茶碗が二つ、すこし質素な感じの茶碗をひとつ、それに菓子鉢を載せた盆を手にして慧音さんのもどってきた。

「たいしたもてなしでもできませんが、どうぞ」

「ありがとう。遠慮なくいただくわ。あ、それからこの子はしゃべることだけは人並み以上だけど、飲食はできない仕組みだから」

『お気持ちだけいただいております』

「これは失礼、そうでしたね」

慧音さんはかすかに苦笑したが、はつとしたように居住まいを正す。

「あらためてこういう形でお会いすると、ごく自然に人と話しているという感じがします。この間はあまりに狼狽してしまっただけ、え、妖怪呼ばわりした上に一方的に戦いを仕掛け……非礼の段、重ねてお詫びいたします」

深々と頭を下げられてしまったため、私はあわてて霊夢の膝からすべり降りる。

『そんなことをしないでください、私自身にも原因があることですから……』

私はそこで一呼吸置いてから付け加えた。

『ただ、その原因について私自身にも分からない点があります。それをはつきりさせるためにも慧音さんに助けていただきたいのですが』

「……だいたい察しはついています。妹紅様が何か大事なことを忘れていて、という話ですね？」

「！」「！」

私と霊夢は思わず顔を見合わせた。

「その話をあなたがたにしてしまった、と妹紅様がおっしゃっていました。いずれわたしがそちらへ伺って経緯をお話すべきだと思いますが……つい先延ばしになってしまいました」

慧音さんはお茶をひとくちすすると話し始めた。

かれこれ二ヶ月近くも前、服を血にまみれさせた妹紅が夜中に訪ねてきた。身体そのものの傷はすでに治りかけていたが、とにかく疲労困憊した様子で、ろくに話もできない状態だった。とりあえず手当をしてその晩は休ませたが、翌日になって妹紅が、自分はどうしてこんなところに居るのか、と言い出した。来た時のことを説明してやるとまったく憶えていない、それどころか前日の昼間になにをしていたのかもはっきりしないという。

状況から考えて蓬萊山輝夜と戦ったのだらうという気はするが、いくら戦いが激しかったとしても前後の記憶もはっきりしないというのはおかしい。しかも、何かひどく重大なことが起きたような気がするのに、それがまったく思い出せない。

「これまでになかったことだ、と気に病んでしまって……自分の足取りをつかもうと竹林やその周辺を歩き回ったらしいのです。そうしたら、無縁塚の近くで草木が一面に焼けてしまっているところがあって、さほど時が経っていない様子だったと」

仮に輝夜とそこで戦ったのだとして、どんな特別なことが起きたというのか。

「妹紅様は思い余って永遠亭にまで訪ねていったということです。しかし、応対に出てきた八意永琳は、輝夜はその日はずっと屋敷に

いた、したがって貴女と戦ったはずもない、と答えたそうです」

妹紅はますます悩んだ。

「そしてついにはこう言い出したのです」

人というのは自分にとって都合の悪いこと、嫌なことを頭の中から意識せずに消してしまったりすると聞いたことがある。もしかすると、自分ほとんどもなく罪深いことをしてしまっただのではないだろうか……。

「妹紅様は一千年以上の年月を過ごす中でたくさんの罪業を積み重ねてきてしまったという気持ちが強いのです。それゆえに、これ以上の罪を重ねたくはないという思いも人一倍あるのでしょうか」

慧音さんは深く息を吐く。

「わたしは考えた末に、妹紅様に申し上げました。これ以上思い悩んでも手がかりがないのでは仕方がない。ですから、重大なことが起きたはずなのに忘れてしまったという『過去』と、いまの自分とを切り離してしまっただけどうか、と。わたしにはそういう能力があるので」

『それは……記憶を消す、ということですか』

「消すのではなく、認識を弱めるという言い方のほうが正しいかもしれません。ただし、なにか思い出すきっかけになるようなことがあれば、元に戻るといって程度にしておくことにしました」

「ということとは」

霊夢が口をはさむ。

「妹紅はチビを見て、何か忘れていたことがあるっていう気分になったんだから、その『きっかけ』にはなったってことね」

「その通りです」

慧音さんはうなずいた。

「おそらくは、その無縁塚で起きたという何事かと関わりがあるのではないかと思います」

一面に広がる異様に鮮やかな赤。そして、ときおり吹く風とともにうねり、波立ち、ざわめく。それは、この無縁塚に咲き誇る彼岸花の群れだ。

その赤の波間の中に銀色の長い髪に大きなリボンをつんだ少女が朱色のズボンに両手をつ突っ込んだまま立っている。薄い唇を引き結び、切れ長の眼は揺れる赤い波を見るときもなく見ているという風情だ。

「たとえ不死人と言えども、こんなところに長居するのはよくないと思うわよ」

妹紅は気だるそうに顔を上げる。

その視線のすぐ先に、日傘をさした緑髪の少女がふわふわと赤いチエック柄のスカートを揺らしながら浮いていた。そのままゆつくりと彼岸花の群れの中へと降りる。

「もしかすると、はじめましてなのかしら？ 藤原妹紅さん」

「いや、そうでもない。あんたの顔は里で見かけたよ、風見幽香」

「そう。まあ、ときどき里に寄ることがあるものね。この間もたまにただけで行ったし」

「聞いた話では、どうやらお前さんのおかげでチビと逢うことになったようだ。いろいろあったらしいな」

「礼には及ばないわよ」

幽香はにやりと笑みを浮かべる。

「それにしても、あなたもずいぶんとおの人形さんにご執着みたいね。なにかわけでもあるのかしら？」

「……お前さんはどちらかというと、チビのことが苦手なのかな」

「苦手というわけではないわ。ただ、なかなか油断ならない相手だと思っっているの。現に、あなたを含めていろいろな連中があの子に関わっている。それも、どちらかといえば取り込まれているみたいな雰囲気さえあるわ」

「馴れ合いは気持ちが悪いということか？ だが、お前らだってな

にかにつけて寄り集まって宴会とかやっているじゃないか」

「あれは、霊夢の周りに集まっているだけよ。妖怪なんて横のつながりはそんなにあるものじゃないわ」

「なるほどな」

妹紅はうなづく。

「だが、お前さんがチビを警戒するのも分らないではない。あれはヒトの精神が仮の器に入っているだけの存在だ。なまじ肉体というものを持たないだけに、強い意志を帯びるとそのまま霊力として発現する。妖怪にとってはたちの悪い代物だ。おまけにそのそばには巫女がついているときている」

「……………」

「ヒトの精神は祀られて信仰を集めれば文字通り神へと転じることもある。そして巫女は神を降ろすための器だから、その神の威徳を伝えることも……………」

「断っておくけれど、わたしはそんなことを怖れているわけじゃないわ」

幽香は妹紅の言葉を遮るように言う。

「わたしが気になっているのは霊夢のことよ。あのままじゃ、霊夢は弱くなるわ。ただの巫女どころか、普通の女の子になってしまうかもしれない。あなただってこの幻想郷が何によって支えられているか分かってるでしょう」

「……博麗大結界か」

「そうよ。他の誰にも頼らない強い心があるからこそ、霊夢は博麗の巫女たり得ている。その心の力が弱まれば、結界そのものにも影響が出るかもしれない」

「つまり結界を保つためには、巫女を精神を弱めるおそれがある者が邪魔というわけか。考えようによってはそれもひどい話だと思っ
が」

「そう決めつけているわけじゃないわよ。だからこそ、まずはあの魂が何者なのかをきちんと確かめたいの」

そこへ突然、女の子の声が割り込む。

「ふたりとも、そんなところで何してるの？」

同時に、紅白の服を着けた少女が軽やかに降り立つ。その一方の腕には、その少女そっくりの小さな人形が抱かれていた。

幽香と妹紅は啞然とした顔つきで彼らを見つめた。

「何よ、そんなに驚かせちゃったの？」

霊夢が言つと、幽香さんがすこし慌てたように手を振った。

「べつにそういうわけじゃないわ。ただ、気配に気がつかなかったから。ねえ？」

同意を求めるように幽香さんが妹紅を見る。

「ああ……そうだ。ちょっと話し込んでいたからな」

「へえ、あなたたちがそんなに仲良しだなんて知らなかったわ」

「いや、そういうわけじゃない。偶然なんだ」

妹紅もなんだか落ち着きのない口調だ。

『……もしかして、私のことでも話していたのか？』

「……………」

二人が困ったような顔をする。

「まあ、あなたたちの共通の話題といったらそうなるかもしれないわよね。でも、ちょうど良かったわ。実はさっき慧音のところに行ってきたのよ。それで、チビがちょっと調べたいことがあるっていうからここに来てみたの」

「そうか、慧音が説明してくれたのか」

妹紅はほっとしたように息を吐く。

「ちょっとわたしからは話しづらかったからな……ところで、そこ

の花の妖怪さんはどうして少しづつ離れていつてるんだ？」

「いや、ちよっとね」

幽香さんはすこしひきつつた笑みを浮かべる。

「わたしはちよっとお邪魔かなあつて……」

「どうせなら付き合え。わたしがチビに『執着』してるわけを教え
てやるよ。それに、お前さんもチビが何者なのか知りたいんだろ？」

「！」

幽香さんが複雑な表情になる。いったい二人で何を話していたの
だろうか？

しかし、いずれにせよこれからすることはいわば妹紅の個人的な
過去を調べるに等しい。

『いいのか、妹紅？』

「どうせこの手のことは黙っていたって広まってしまっさ、幻想郷
は狭いからな。チビさえ良ければ、かまわないさ」

『まあ、幽香さんが私が何者か知りたいというなら、むしろ歓迎だ。
ぜひ知って欲しいと思う』

「じゃあ、決まりだな」

妹紅はにやりとして幽香さんを見る。幽香さんは仕方がない、と

いうように肩をすくめた。

「それで、調べたいことというのは何だ？」

『とりあえず、妹紅が直後に調べに行ったという場所に案内して欲しい。地面が焼けてしまっていたところがあったんだろう？ その状況を見てみたいんだ』

「だいたいこのあたりだな。草の感じが全然違うだろう」

妹紅が立ち止まって指差す。

たしかに、海面のように広がっていた彼岸花の群れがここだけはぽつかりと穴でも開けたようになくなっている。草が生えていないわけではないが、丈が低い雑草で、まだ生えてからさほど時間が経っていない感じだった。

『どうだ、霊夢？』

「そうねえ……まだ日が出てるからはつきりとはしないけど、結界が乱れてたような跡はなんとなく感じるわね」

「結界？」

妹紅が驚いたように問い返す。

「ここに結界があるのか？」

「おおざっぱに言うと、結界の力はどこにでもあるの。壁みたいなもので囲ってるのとは違うのよ」

霊夢は身振りを加える。

「こっちの線から向こうは違う世界、とかそういうものじゃないの。説明が難しいんだけどね……ただ、このあたりはその結界の力が複雑になって、例えていうなら服の継ぎ当てが重なってるような感じなの。だからときどき穴が開いたりすることもあるわけ」

「そのせいで外界からモノが流れ着くこともあるみたいよ」

幽香さんが口をはさむ。

「場合によっては、ヒトもね」

「じゃあ……そこから？」

妹紅が緊張したような声を出す。

『いや、まだ分からない。それで霊夢、はつきりするのとは夕方なんだな？』

「ええ。結界がいちばん不安定になるのは昼夜の境界、逢魔が時だから」

『じゃあ、いまはそれはおいておこう。そこでひとつ妹紅に訊きたいんだが』

「なんだ？」

『あの永遠亭のお姫様とやりあうときっていうのは、だいたいどういう感じなんだ？ 空中で戦うのか？』

「ああ、まあそうだ。前に竹藪の中でやってたら火事になってしまったことがあったし……地上での戦いはしないな」

『だとすると、もしお姫様との戦いでここが焼けたというなら、おかしいだろう。弾幕の流れ弾が降ったとしてもこういう均等な感じにはならないんじゃないか？』

「それはそうね。たとえ地面が焼けるような激しい戦いだったとしてもこういう焼け方はしないでしょう」

と霊夢。

「ねえ、ちょっと話が見えないんだけど……」

幽香さんがすこし戸惑ったように言う。

「もしかして、妹紅は自分のやったことを忘れてるの？」

「ああ、そうだ。わたしはある晩の出来事をまるごと忘れてしまっているようなんだ。それが、どうもチビと関係があるらしい」

「つまり、記憶がないってわけ。でも、それってチビさんが例のハクタクとやりあったときの状況と似てるんじゃない？ あなた、あのときの記憶ってあるの？」

「えっ？ いや……それは、だって里の団子屋で会って、慧音の家に案内するという話になって、それで……」

そこで妹紅の顔がぼんやりとなる。

「チビ、わたしは……どこで気を失った？」

『……慧音さんの家のすぐ近くだが』

「その途中まで、一緒に行ったのか」

『そうだ。いろいろ話をしたじゃないか。私が神社に居候することになったいきさつも。それは当然憶えてるだろう？』

「それは……神社で魔理沙から聞いたんだ。霊夢がお前さんを永遠亭に迎えに行ってる時に。直かに聞いたという覚えはない」

なんということだ。あのときの記憶は失われていたのか。

幽香さんはうなずいてあとをひきとる。

「つまり、記憶も吸われていたってことなんじゃない？ ということは、その晩の記憶っていうのも、もしかしたら……」

『私が吸い込んでしまったということか』

「厳密には違うけどね」

霊夢が私の身体に手を触れて言う。

「すくなくともそこに魂としてのあなたが関わっていたかどうかは分からない。ただ、人形そのものが妹紅の精神の一部を吸い込んでしまったということは考えられる。そして、もしそうだとすれば、このあいだ妹紅の霊力を吸ってしまった件もいちおう説明がつくわつまり一度形代としての役割を果たしているからその意味で霊的なつながりができているのよ」

『……つまり器と魂を分けて考えたほうがいいのか』

「ええ。その証拠に、あなたにわたしが霊力を分けて記憶が吸われるなんてことは起きないでしょう？ それは形代としての人形ではなく、あなたの魂が力を取り込んでいるからよ」

『だから、慧音さんと戦った時もスペルの発動がなかなかできなかったというわけか』

「おそらくはね。人形がとりこんだ力をチビの魂がうまく制御できなかったんでしょう。そこで妹紅にひとつ訊きたいんだけど、無縁塚に来たことってこれまでにあるの？」

「いや……覚えている限りでは、ない。そもそも、このあたりを無縁塚と呼ぶことも知らなかった」

「でしょうね。正直、此处はあなたにとっては危険な場所よ。まあ、普通の人間にとっても危険ではあるんだけど、あなたにとっては特にね」

「どづいうことだ？」

すると幽香さんが答える。

「不死人だからよ。生命が湧き出る泉のような存在だから、生命に飢えた連中を引き寄せやすいわけ。そしてこの無縁塚は」

山の端に近づいて赤みを帯び始めた太陽に照らされた彼岸花の群れを見渡しながらかつてける。

「悪霊や雑霊の吹き溜まり。なにしろここに迷い込んで妖怪に喰われた人間もけつこついるしね……それを供養するためのお墓が無縁塚だから」

無縁塚に関してはここに来る道すがら霊夢に一通り聞いていたが、たしかにかなり危険な場所のようだ。

『どうする？ 妹紅にこれ以上ここにいてもらうのはまずいんじゃないか？』

「そうね……下手をすれば前に起きたことを繰り返してしまうかもしれないし」

霊夢は腕を組む。

「むしろ、それは望むところなんじゃない？」

と幽香さん。

「もしかしたら人形との関わりだけじゃなくて、なぜチビさんの魂がここに来たのかっていう理由が分かるかもしれないわよ。ここは結界が不安定で、外界とつながる穴が開くことがあるのは確かなん

だから」

「そうだな。試してみる意味はある」

妹紅もうなずく。

「すくなくとも、なにかが現象として起きれば、おそらくわたしは同じように対処する。だから、似たような状況が起きることはあり得るだろう」

私はあわてて妹紅の前に出て言った。

『それは駄目だ。危険すぎる』

「わたしは死なないから大丈夫だ。たとえ粉々になっても再生する身体だからな。チビと霊夢は離れて様子を見ていてくれればいい」

『だがそれでは……』

すると霊夢が突然「しっ」と鋭く声を発した。

「誰か来るわ」

霊夢が顔を向けた方を見ると、二つの人影がこちらにむかって近づいてきていた。ひとつは霊夢と同じぐらいの背丈だが、もうひとつはかなり小柄だ。そして頭には特徴的な耳があった。

「なかなか面白そうな話をしているのね」

背の高い方の人影が澄んだ声を出す。髪を長く伸ばした女の子だ

と分かる。

「せっかくだから、わたしも話に加えていただけない？」

その19につづく

その19

19

「はじめてお目にかかります、チビ霊夢さん。永遠亭の主、蓬萊山輝夜です」

月のお姫様は思ったよりも気さくな感じがしたが、やはり常人とは違う雰囲気漂っている。腰の下まで伸びている黒髪は、まさに平安時代の貴族を彷彿とさせる。ただ、着ている服は長袖のワンピースの下にさらに裾長のスカートをはいているという感じなので、少々変わってはいるが洋服の範疇に入っているデザインだ。

『はじめまして。先日は永琳先生や、他の皆さんにいろいろとお世話になりました』

「あのときはわたしは何も知らされてなくて、あとで永琳に文句を言ったんですけど。まあ、主と言っても隠居みたいなものだから、仕方が無いんですけどね」

そう言うと、彼女は空中に浮いていた私の頭に白い指で触れた。

「もし良ければ、わたしのことは輝夜と呼んでください。確か、妹紅も呼び捨てなんでしょう?」

『まあ、そうですか……』

「じゃあそうして。わたしもチビって呼びますから」

『それでは、輝夜。ひとつ訊きたいのですが』

「なんですか、チビ」

『ここに貴女がいらしたのは、偶然ではなさそうですね』

「イナバたちに頼んでおいたんです」

彼女は脇に控えているてゐをちらりと見る。てゐは私に向かって、
ごめん、というように顔の前に手を立てた。

「妹紅に動きがあつたら知らせるようになって。なにしろ、この人つ
たらこここのところすっかり大人しくなって、顔をみかけることもな
くなってしまったんですもの」

輝夜は私の後ろに立っている妹紅に顔を向ける。

「そのおかげで、さっきの件のことも全然話ができなかったじゃない。
まあ、てゐのおかげで経緯はだいたい分かったけど」

「文字通り聞き耳を立てていたというわけね、兎だけに。感度は良
さそうだね」

と幽香さん。

「……………」

妹紅は黙ったまま、肩をすくめる。

「じゃあ輝夜、あなたも何かこの件について知っているってこと？」

霊夢が妹紅と輝夜の間に入る形で訊く。

「ええ。すくなくとも妹紅よりは覚えていることがありますよ。ここに来る直前まで、二人で戦っていたこととかね」

『では、あなたも一緒にここに？』

「そう。ここは竹林からはそんなに遠くはないんです。その低い山で遮られているけど、その向こうには森と竹林が広がっているが見えるはずですよ。わたしたちは戦いながら空中を移動してここまで来てしまったの。時間もちょうど今ぐらいね、そろそろ日が暮れようかという頃でした。ただ、そこから先がはつきりしないけれど……たぶんわたしたちはそのまま戦い続けていたと思います。なにしろ」

輝夜はそこで薄く笑みを浮かべる。

「わたしたちは、どちらかが動けなくなるまで戦ってしまうのが常でしたから」

「なるほどね」

霊夢がうなずく。

「つまり、ここで二人が戦っていたときに、何かが起こったというのは間違いないようね」

「そういうことですね。そこで、提案があります」

輝夜が私たちの顔を見回して言う。

「わたしと妹紅がここでもう一度戦えば、おそろく似た状況が再現されるはずです。そうすれば、お互いに望みのものを得ることができんじゃないでしょうか」

妹紅がようやく口を開く。

「……お前の望むものって何だ」

「あなたと同じよ。それがたとえどんなに惨めな記憶であったとしても、わたしの一部だったものよ。失ったままでは気分が悪いでしょう？　すくなくとも何が起きたかぐらいは知っておきたいと思うわ」

『だが、それは……』

「わたしたち自身のためにやることなんです」

輝夜がきっぱりと言う。

「チビ、あなた自身も自分の過去の記憶を求めて行動しているわけでしょう？　だったらわたしの気持ち分かるはずです」

『……………』

それを言われてしまうと、どうしようもない。

「どう、妹紅。戦う理由としては何か問題がある？」

「ない。ただ、折角だから何かかけてみるというのも悪くないんじゃないか？」

「そうですね……」

私は霊夢の肩に乗り、耳元で言った。

『あの二人、このまま放っておいていいのか？』

「しょうがないわよ。ふたりともやる気になってる以上は止められない。妹紅はたぶん、あなたのためでもあるでしょうけど、それはあの子自身がそうしたいんだからいいのよ。それより、わたしは結界の変化に備えなきゃならないわ。あなたもそばにいて。手伝ってもらうことがあるかもしれないから」

『何でも言ってくれ。出来ることはやる』

「けっこうキツいかもしれないから、覚悟してね」

言葉とは裏腹に、霊夢はけっこう楽しそうではあった。数々の修羅場を乗り切った彼女にとっては、さほどのことではないのだろうか？

そこでふと幽香さんが姿を消していることに気づく。そもそも彼女がなぜここに居合わせたのかもはっきりしないが……。

「チビ。そろそろ始まるわ。わたしたちは少し離れていたほうがよ

さそうよ

『ああ』

とりあえず今はそんなことを気にしている状況ではないようだ。私は霊夢とともに、対峙している二人の蓬莱人から距離をとった。

「参ったわねえ……こんなときに死神を連れてきていいものかしら」

幽香は霊夢たちのいる場所から離れ、無縁塚のいわば中心部である塚の近くに来ていた。

小町といったん別れてから神社に向かったが、霊夢たちは留守だった。そこで下見を兼ねて無縁塚を先に訪れてみたら、妹紅に出くわし、さらに霊夢たちがやってきてしまった。

あの蓬莱人たちが戦うことになったおかげで、ようやく抜け出てきたものの、この状況で果たして本来の目的を達することができるかどうか。

考え込んでいると、上から声がした。

「おい、その先は三途の川の入り口だぜ。お前、そんなところに用があるのか？」

「……………」

幽香は思わず舌打ちしそうになった。どうしてこんなときに。

「なんだその嫌そうな顔は？　なんか見られちゃまずいことでもしてたのか」

箒にまたがった魔理沙がにやにやしながら幽香を見下ろす。

「別に、何もしちゃいないわ。夕焼けと彼岸花が綺麗だから眺めていただけよ」

「そんな趣味があるとは知らなかったな」

魔理沙を載せた箒は垂直に降下して幽香と向き合う形になった。二人の間は十歩ほど離れている。

「あなたこそ、こんな時間にこんなところで何をしようっていうの？」

「ちよつとした宝探しさ。前に香霖に教えてもらったんでね。ここは日の出・日の入の頃になると結界がゆるんで外界からのモノが入り込むことがある。だが、どっちかっていうと日の入のときのほうが収穫が多い。里の人間はまず絶対に来ないからな」

「そう。それで、お目当てのものは見つかった？」

「まだこれからさ。陽は沈んでるが、まだ正確な日の入じゃない。地平線は山の稜線よりもっと下だからな」

「じゃあ、まあ宝探しを続けてちょうだい、わたしはちよつと忙し

いから、失礼させてもらっわ」

「まあ待てよ」

魔理沙は空中で宙返りを打つような拳動で反転し、きびすを返した幽香の前に立ちふさがった。

「何だっていうのよ」

幽香はいらついた眼で魔理沙をにらむ。

「その抜け道のありかは死神に教えてもらわないと分からない。つまり元々は死神と連絡をとるために使うためのもんなんだよ。そこで、どうしてお前がそんなことをする必要があるか想像してみると、答えは割と簡単だな」

「……………」

「チビの魂を見せようとしてるんだろ、死神に。なんてったって専門家だからな。死神の眼をもってすれば、すくなくともどんな魂なのかぐらいは分かるだろうさ」

魔理沙は眉間にかすかに皺を寄せながら口元を歪めて笑みを浮かべる。

「ついでにそれを餌に、チビと一勝負してみようってどこか？」

「だったらどうだっていうの？」

幽香の表情が一段ときつくなる。

「開き直ったか？ まあ、お前はチビのことが邪魔らしいから……
……とつとと正体を暴いて外に送り返したいぐらいに思ってるんだろ
うが、そうはさせないぜ。だいたい、考えてもみる。霊夢が死神の
眼のことを知らないわけがないだろう？ その気があればすぐに小
町のところに連れて行っただろうさ」

「あなたこそおかしいんじゃない？ あの人形に宿った魂は自分自
身の正体を知りたいと願っているのよ？ それを邪魔するっていう
の？ あなた、友人を気取ってるくせに、不誠実なんじゃない？」

「わたしはチビのやることの邪魔はしないさ。だが、腹に一物もっ
た妖怪の余計なお節介を止めるのは勝手だろう？」

すると幽香は眼を細めて唇に薄い笑みを浮かべる。

「あなた、要するに霊夢に弱くなって欲しいんじゃない？」

「なんだと？」

「あなたが努力家だということは知ってるわ、魔理沙。たいした
資質を持たないのに、その若さで自己流の魔術を使うというのは簡
単なことではないでしょう。なりふり構わずに資料を集めて、研究
を重ねて……でも、どんなに頑張っても霊夢には勝てない」

「馬鹿いえ。わたしは霊夢との勝負には何回も勝ってるぜ」

「スペルカード戦では、でしょう？ あの本質はあくまでも『遊び
よ。殺し合いではないんだし。まして、あなたたちは同じ人間同士
だもの。たとえ霊夢が意識して手加減をしているわけではなくても、

真の力のぶつかり合いではないはずよ」

「話をそらすなよ。わたしはチビのことを言ってるんだ」

「そらしているのはあなたのほうね。霊夢を引きずり下ろして、弱い自分と同じになって欲しいのよ。弱さを慰めあう相手が欲しいだけよ」

「お前こそ、『強い霊夢』を失うことを怖れてるんじゃないか。力があり余ってるお前の相手をまともにするような妖怪はもう幻想郷にはいない。まして人なんかお前には絶対に近づかない。誰からも敬遠されるお前を相手にするのは霊夢ぐらいだ。その霊夢を、ポツと出の正体不明のお人形に横取りされたのが悔しいんだろうが」

赤黒く染まり始めた空の下で、魔法使いと花の妖怪がにらみ合う。

「仕方が無いわね……」

幽香は傘をたたむ。

「あなたのおしゃべりな口を塞ぐには、気絶するまで叩きのめすしか方法がないみたい」

「じゃあ試してみるんだな」

魔理沙は八卦炉を取り出して不敵に笑う。

「人間ってものは日々進歩するんだぜ？ 前と同じだとは思っなよ」

その20

20

炎のような光を背負っているように見える妹紅から列を成した火弾が打ち出され、渦巻のような軌道を取りながら輝夜に迫る。輝夜は流れるような動きで避けながら、腕を振る。瞬間、閃光が広がり、七色に輝く光弾が一気に噴き出て、妹紅に向かう。

妹紅はその光弾の塊の中に縦に突進しながらさらに火焰の列を瞬時に放つ。

恐ろしい量の弾が飛び交い続ける有様は、まさに光の幕が幾重にも重なり合っているように見えた。

『あんな状態が続いて、お互いに身体はなんともないのか?』

「多少当たっても致命傷じゃないんですよ。それにしても、思ったほどじゃないわ」

『何がだ?』

「何て言うか……もっと凄まじい感じの戦いになるかと思ってたの。こうやって観てる限り、花火でもしながらじゃれ合ってるような感じ」

すると脇からぼそりと声がした。

「本人たちはけっこう必死だと思うけどねえ」

「あら、てゐ。いたの」

「いちおう事の次第を見届けなきゃならないからね」

てゐはぶすつとした顔つきで片耳を軽く動かす。

「この件、永琳は知ってるの？」

「たぶんね。まあ妹紅を張ってたのは姫様のいいつけさ。実はあいつが神社に通うようになる前から言われてたんだよ。なんだか妹紅の様子がおかしいからって」

『おかしいというと？』

「ここのところ妹紅と出くわさなくなってたんだよ。前は隙あらば感じて狙ってきてただけだね。姫様がわざと竹林の外に出かけても、全然音沙汰がない。何かたくらんでるんじゃないかって、しばらく師匠も警戒してたんだ。だから、こないだのあんたの『お披露目』にはわたしが代わりに出たのさ。結局何事もなかったけどね。妹紅も来なかったし」

「そろそろ戦うのも飽きたってことかしら？」

「だったら、避ける理由が分からないよ。里から病人を連れてくるときも道が分かるところまで来たらそこで案内は終わりって感じで、永遠亭には近づかない」

「前にここで起きたことと関係があるのかしらね。あんたはそのときは居合わせなかったの？」

霊夢は空いっぱいに広がる弾幕の模様を眺めながら訊く。

「ここでやりあったって話かい？　そういうときは周りの警戒がわたしの仕事なんだよ。だからもつと離れたところにいたと思うね。今回は姫様に連れてこられたから仕方なかったけど」

『霊夢、結界の変化は起きてるのか？』

「そろそろ緩みはじめる頃ではあるんだけど……大したことはない感じ。そもそも弾幕打ちあつてるぐらいじゃ結界にはさして影響ないのよ」

それは意外だ。

『だが、綻びやすい場所なんだろう？』

「結界に影響を与えるのは、本来はもつと別の力なのよ。わたしはあの二人の戦いに何かそういう力がからんでくると思ってただけで、どうも違うみたい」

「まあ、前はもつとお互いに憎らしく思ってる敵同士の怨念みたいなものを……」

言いかけて、てめがぴくりと耳を動かした。

『？……どうした』

「待つて」

霊夢が短く言い、顔を別の方角に向ける。私もつられてそちらを見た。

同時に、閃光が輝いた。その光のなかに、二つの人影が見えた。

「チビ、来て」

「霊夢は私を抱き上げると、いきなり空中に飛び上がった。

「ちょっと、どうするんだい、こっちは！」

てゐが慌てたように声をあげる。

「あんたが見てて！」

叫び返した霊夢は、そのまま一気に移動してゆく。

今度は目の前に星の渦巻のようなものがいきなり現れた。

霊夢がとつさに片手を上げる。瞬間、目の前にぱらぱらと火花のように光がはじける。

「……少し離れた方がいいわね」

霊夢は空中でいったん後退し、地上に降り立った。空にはふたたび眩しい輝線が何本も現れ、交差する。

『なんだこれは……!』

「どうやら、他にもう一組いるっていうことみたいね」

霊夢は手で額の上に庇をつくる。

「幽香と……魔理沙ね」

『魔理沙? どうしてこんなところに?』

「分からない。それはともかく、どうもこっちのほうがわたしが思ってたものに近いわ」

どういう意味だ、と問い返そうとして、私はふと周りを見回した。

異様な気配が満ちてきている。

『……………』

「気がついた? 周りにどんどん妖気が集まってきた。たぶん、あの二人の戦いに惹きつけられているのよ。このままだとまずい……」

霊夢の眉間にかすかに皺が刻まれる。

「時間稼ぎをしないやならないわ。チビ、わたしの肩に乗って。離れちゃだめよ」

『分かった』

いま説明を求める時間はないのだろう。私は急いで霊夢の肩に飛び乗り、しっかりと頭にしがみついた。

「いいわね？ それじゃ行くわよ」

霊夢は二人の戦っている地点を中心に弧を描く軌道を低空飛行で移動し、その途中でふたたび降り立った。

そして群れを無して生えている彼岸花のいくつかの茎を手にとつて結び目を作り、さらにその上に懷から取り出した札を自分の髪の毛で結びつけると、指を当てて小声で短い言葉を唱えた。すると、結ばれた札が僅かの間白い光に包まれ、元に戻った。

ふたたび移動し始めた霊夢に、私は訊いてみた。

『もしかして、結界を作っているのか』

「そうよ」

霊夢は短く答えた。

その後、さらに三箇所で茎の結び目を作つて札をつける作業を行い、ふたたび私たちは元の場所に戻ってきた。

「とりあえず、これである程度は集まってくる連中を防ぐことができると思うけど……まああんまり長くはもたないわ」

『それで、これからどうする？』

「いまは……待つしかないわ」

待つしかない？ 黙ってみているというのか？ いや、いらだつてどうする……落ち着かなければ。」

『戦いが終わるのを待つということか』

「そうじゃないわ。終わるかもしれないし、終わらないかもしれない。ただ、いまここでわたしがこの戦いに介入したり止めたりすることはできないのよ。スペルカード戦の決まりをあなたも知っているでしょう？ しかも、人間と妖怪の間でこの取り決めをまとめたのは博麗の巫女、つまりわたしなのよ」

『それなら、いま結界をつくったのだって……』

「そうよ、本来ならルール違反だと言われてもしかたがないわ。ただ、周りに被害が出るかもしれないっていう名目はなんとかつけられそうだから。それに、あの勢いで戦っているところに割り込むのは厳しいのも確かよ。ちょっと注意がそれただけで、戦ってる本人たちのどちらか、下手をすれば両方が深手を負うこともあり得るわ」

そこまでぎりぎりの戦いをしているということなのか。だが、それはなんだかおかしい気がする。

すると、私の考えを読み取ったかのように霊夢が付け加えた。

「ただ、それほどの激しい戦いをしているのはいつもとは何かが違う。おそらく集まってきている呪霊や雑霊が影響しているんじゃない」

『さっき、戦いに惹きつけられている……と言っていたな』

「もっと正確な言い方をすると戦っている者の心に惹かれているの。何かに強く執着する心は、連中にとっては都合のいい足がかりだから」

『じゃあ、このままだとあの二人はその雑霊たちに取り憑かれてしまうんじゃないのか』

「というより、もうある程度は憑かれてると思う」

ずいぶん冷静なんだな、と思わず言いそうになったが、やめた。幣を握っている霊夢の右手が震えていたからだ。

その21につづく

その21

21

霊夢の言う通り、あれだけ激しく戦っている二人の間に割り込むのは本人たちにも危険が及ぶだろう。かといって、このまま放置していたのでは、いずれどちらかが大きな打撃を受けるのは目に見えている。だが、あれだけ激しく動き回っている二人に同時に精密に弾を当てるのは難しい。

どうにかして、二人を同時に引き離して、戦いを再開させないようにはさせることはできないだろうか。

それとも、二人に惹きつけられているあの瘴気の流れを何とかすべきだろうか。別の、何か身代わりになるものを……。

身代わり？

『そうか！』

「どうしたの、チビ？」

霊夢が緊張した声を出す。

『ちょっとしたことを思いついた』

「……なにをするつもり？」

『前に、辛い思いをしている相手を救いたってというのは、見ていて辛いと感じる自分を救いたいからだって話をしたよな。それはまったくその通りだと思うよ。だからこれは』

私は霊夢の肩から離れ、空中に浮いた。

「あ」

『自分自身のためにやるんだ』

「ちょっと、待ちなさい！」

あごを引き、風圧に備える。

「まち……」

霊夢の声は最後まででは聞こえなかった。空気の震える音と共に地面が一気に遠ざかり、低い山と森に囲まれた無縁塚の赤い領域がはつきりと見えた。

上昇を止めて、自由落下状態になる。

ふたたび身体が振動を始め、正面から赤黒く広がる地面がゆっくりと迫ってくる。

それを背景に、重なり合いながら明滅する光。その中で影が二つ、動き回っている。

なるほど……あれは空ではなく花の色だったのか？

ふたたび二箇所から輝線が生まれ、交差する。

同時に、影が離れる。

ここだ。

身体全体が震え、周りの空気が唸りをあげる。そして地面が一気に近づく。

ほんの一瞬、霊夢の叫び声が聞こえたような気がした。

たぶん、この場で無くなりはいないだろう

そんなきが

矢のような速度で降下してきたチビ霊夢が輝線の交差する空間に突入すると同時に、耳を打つような金属音とともに空間そのものが激しく揺れるような衝撃が訪れた。

「ぐあっ！」「うお！」

魔理沙と幽香の身体は同時に反対方向に吹き飛ばされ、乱雑な回転をさせられた拳句、それぞれ彼岸花の海の下へと叩き込まれた。

反射的に防御の結界を張った霊夢は膝を折ったものの、かろうじてその場にふみとどまった。

「何なの、いったい」

頭を振りながら立ち上がる。

と、背中にぞくつとするような悪寒が走った。ただならない気配が拡がっている。

顔を上げる。

「……！」

空中に、虚ろな点が現れていた。まるで盲点のようにそこだけ何も視えない。だが、その点に向かって地面から湧き出ているどんよりとした気配が渦巻くように流れ込んでゆく。

「チビ？ どこにいるの？」

霊夢はチビ霊夢が落下したと思われる地点に走り寄り、彼岸花の茎をかき分けるようにして近辺を探したが、その姿はどこにも見当たらなかった。

「チビ！ 返事をして！」

「落ち着きなさい、霊夢」

背後からの声に振り向くと、そこには八雲紫が立っていた。

「チビちゃんは、あそこにいるわ」

紫は空中を指差す。

「結界にちよつとした傷口が開いているのよ。ちようどそこ重なっている……というか、チビちゃん自身がその傷口の中心になってしまっているから、見えなくなってしまっているけど」

「……どういうことよ？」

「チビちゃんの『器』が、この無縁塚に溜まっていた者たちを吸い込んでいるのよ。さっきの霊力の放出で、魂は眠ってしまったているだから、『器』の中身は空っぽなわけ。しかも、巫女という魂の器をかたどったヒトガタだから、二重の意味で惹きつけられる」

「じゃあ、そんな連中は抜ってやれば済むことだわ」

「待ちなさい。彼はおそらくこうなることをある程度予想していたのよ」

「だけど、このまま放っておくわけにはいかないでしょ!」

「もちろん。でも、この先にどうすべきかを知っているのは、霊夢でもわたしでもない。そうでしょう?」

紫は背後に近づいてきた人物を振り返って言った。

「ああ。たぶんその通りだ」

銀色の髪の少女はうなずいた。

「妹紅……」

靈夢は眼を見開く。

「輝夜とはどうしたの？」

「いつまでたつても何も起きないから、いったん中座したんだよ。そうしたら、さっきの衝撃波が来たからな」

見ると、妹紅の近くには輝夜とてゐいた。ただ、紫を警戒しているのか、すこし距離をおいてこちらを見ている。

「もしかして、何か思い出した？」

靈夢の問いに、妹紅は首を振る。

「いや。ただ、もし過去の自分が今の『あれ』を見たら何をしたか、というのは見当がつく。そして、その結果何が起きたのかもな。だが、とりあえず説明は後回しだ。あそこからチビを救い出す。そのためには靈夢の助けも要る」

「いいわ、何でも言うて」

「それと、できたらあんたにも助けて欲しい」

妹紅は紫に向かって言う。

「あら、わたし？」

紫は意外そうな顔をする。

「ああ。万が一、結界が破れたりしたら困るんだろう。立ち会ってもらった方がいい。それに、どうしてももう一人、人手がいるんだよ」

すると、輝夜が不満そうな顔をする。

「いちおう、わたしもいるんですけれども」

「お前は見物していたほうがいい。たぶん、前回もそうだったはずだ。わたしの記憶よりもお前の記憶のほうが失われていない理由はそこらへんにあると思う。それに、月の人間が穢れにじかに触れるようなことはやめておいたほうがいいだろう？」

最後の一言が自分に向けられていると気づいたらしく、てめはうなずいた。

「そうだね」

「それじゃ、行こう」

妹紅、霊夢、紫は空中に飛び上がり、瘴気が渦巻くように吸い込まれている『点』の前に移動した。

妹紅は『点』に向かって腕を無造作に押し込んだ。するとみるみるうちに肘のあたりまでが何者かに喰われているかのようにかき消えてゆく。

「ちょっと……」

「いや、だいじょうぶだ」

霊夢の触れようとする手を妹紅は押しとどめる。

「少し待っていてくれ。もうすぐ、チビの姿が視えてくるはずだ」

妹紅の言う通り、やがてチビ霊夢とその腰をつかんでいる妹紅の腕の輪郭がうつすらと現れてきた。

「おそらく、結界に影響を及ぼしているのは、『結界を超えたい』
という意思の力だ。ここには、外界から来て客死した連中の想念が
残っているというから、帰りたいという意味が溜まっているのかも
しれない」

「その意思をチビちゃんが惹き寄せている……集中すると結界が破
れるかもしれないということね」

紫の言葉に、妹紅がうなづく。

「二人とも察しがついていると思うが、人形は魂の器であると同時に
にあちら側とこちら側の架け橋となる空白という意味では『境界』
そのものだ。つまり、チビのこの器自体が結界を開く『門』になっ
てしまう。だから、とりあえずわたしは門に殺到している連中を力
づくで吸い出す」

「わたしはなにをすれば？」

霊夢の問いに、妹紅は静かに答える。

「チビの魂を支えてほしい。チビはあえてすべての力を放出して眠ってしまったが、このままだと身体に満ちている雑霊たちに魂が侵されてしまう。幸い、この腕輪の宝石が霊気の出入り口として使えるようだ。しかも雑霊たちを弾いてくれている。ここから霊気を通じさせてチビの魂と繋がりをつくってくれ」

「分かったわ」

「それから、あんたは……」

「八雲紫、ですよ」

「……紫さんは、結界が破れた時の措置をお願いしたい。判断も含めて、だがな」

紫は一瞬、妹紅の顔をさぐるように見つめたが、薄く笑みを浮かべてうなずいた。

「心得ました」

その22につづく

その22

22

(帰りたい) (帰りたい) (帰りたい) (こんなはずじゃなかった) (帰る) (帰るんだ)

そうだな。こんなところに、ずっと居たいわけがない。自分に何が起こったのかもわからずに死んでしまった人もいるのだらう。帰ってたんだな。その思いがずっと溜まっていた。思いだけが、残っている。それを受け止めてくれる場所がなかっただけだ。誰も悪くはない。

私も想いを受けとめて欲しかった。だが、その相手はただ一人しかいなかった。だから、私はここに来た。それで何がどうなる、というものでもない。結局は、自分を救うためのものでしかない……。

『いいんじゃない、それで』

そうか。

『でも、あなたの想いって何? 何を受けとめて欲しかったの?』

あの子がそこに在る、ということを知って欲しかった。

私だけじゃ、ダメなんだ。それじゃ、辛すぎる。

『その誰かが辛いつてこと?』

辛いのは……私自身なんだ。

私だけが知っているんじゃない、耐えられないんだ。

だから……。

『だから?』

分かってもらえるはずの人に、会いに来た。

『それがわたしなの?』

わたし? わたしって誰だ。

わたしはわたしよ。

私はわたし?

そう。わたしは私なのよ。

「霊夢!」

突然、がくんと身体が落ちそうになった霊夢を紫があわてて支え

る。

「どうした？」

妹紅が問いかける。

「気を失ってるわ。というか……魂抜けしてしまったみたい」

「魂抜け？ チビの中にか？」

「たぶんね……」

紫が困惑気味に答える。

「それはまずい。下手をすれば今度は霊夢の身体が『器』だと見なされるぞ」

「そのようね」

紫の手が薄桃色に輝き、霊夢の身体をかばうようにかざされる。

「妖怪の出す結界ってこういう連中にはあんまり効かないのよね……
…うら若き乙女の巫女だと効果抜群なのだけねど」

「あなた、境界を操る妖怪だろう。空間を切り開いて雑霊どもを吸い込めないのか」

「八雲紫よ」

たしなめるように言ってから、紫は答える。

「空間を切り開いたところで、その穴自身には吸い込む力はないの。形のない雑霊どもは穴を避けてしまっわ。それにここで下手にそんなことをしたら、それこそ結界が壊れかねないでしょう」

「まあ、そうだろうな」

妹紅はかすかに鼻を鳴らす。

「だが、どっちにしろいつまでもこのままではいられない。そろそろ最後の仕上げをしなきゃならないようだ。その手伝いをしてもらいたい」

「何をすればいいの？」

「なあに、簡単だ。境界の力を使って、わたしの身体を破壊してもらえばいいのさ。粉々になるぐらいで構わない」

「……！」

紫は片眉を上げる。

「依代を使った悪霊退治の類は何度かやったことがある。場合によつては、こういう荒っぽいやり方を使うこともあった」

「どんな状態からでも再生するとは聞いているけれど……本当にいいの？」

「ああ。これから一気にチビの身体に溜まった雑霊どもをわたしの中に吸い上げる。おそらく限界までくるとわたしの身体も自分の意

思では操れなくなる。そうなる前に好きな方法で破壊してくれ」

「他の場所に移動すればいいような気もするけど？」

「わたしの身体に取り憑いているモノの量が半端じゃない。送られた先で出くわした奴に迷惑をかける」

「どちらにしても霊夢の身体を支えながらというのはちょっと難しいわね……あら？」

二人の目の前に風見幽香が姿を現した。前髪がぐしゃぐしゃに乱れている。

「とりあえず何が起きてるのか分からないけど、手伝うことがあるなら聞くわよ」

「じゃあ悪いけど、霊夢の面倒をみてやって。どうやら魂抜けしてチビちゃんの中に入っちゃったらしいの。二人を引き離さないようにして、このまま……」

そのとき、何かが割れるような鋭い音がした。

同時に周りからどつと瘴気の群れが押し寄せてきた。

「じゅあっ！」

妹紅の喉が異様な音を出す。その顔は死人のような黒々とした色に変わってきていた。

「……どうしたの？」

紫は霊夢の体をかばうように抱え直す。

すると、今度は輝夜が姿を表した。

「馬鹿ね、結界が破れたのよ。霊夢があらかじめ瘴気が集まりにくいように張っておいた結界が破れたの。それより妹紅がもうもたないわ」

輝夜は妹紅の体を背後から抱えるようにして、チビ霊夢の体をつかんでいる妹紅の手に自分の手を添えた。

「やめ……ろ……」

妹紅の搾り出すような声に、輝夜は苦笑いを浮かべる。

「わたしも記憶を失ったのよ。だとしたら、理由はこういうことだと思うわ。同じようなことが起きたんだとするならね」

「……！」

「わたしはあなたのように呪術の類は使えないけど、同じ不死人だね。生命の泉を抱える者は生命を求める者共を惹きつける」

輝夜の手がみるみるうちに変色してゆく。

「だから、彼らをこの身に吸い込むことぐらいはできる。さあ、一気に……え？」

ぐい、とチビを中心に寄り集まっている一同の体が動く。

幽香もとつさにチビ霊夢の体をつかむが、裂け目に向かおうとする力は強烈で、止まりそうにない。

「引き込まれるわよ！」

幽香が叫ぶ。

「壊せ……わたしを！」

妹紅が必死の形相で叫ぶ。

「……早く！」

違う、と紫は思った。妹紅の言う方法では根本的な解決にならないかもしれない。だからこそ、同じことがもう一度起きてしまったのだとも考えられる。

そこでふと、誰かに呼ばれている気がした。その声は、抱えている霊夢の体から感じられた。

紫はチビ霊夢の腕を握っている霊夢の手に自らの手を重ねた。

（放して）

「え……」

（彼らを放してあげて。そうすれば、大丈夫）

その声は、霊夢の声のようでもあり、チビ霊夢の声のようでもある。

った。

（彼らには帰るべき所があるから）

紫は決断し、妹紅と輝夜に向かって言った。

「すぐに、終わります」

短い衝撃音が二つ続き、彼らの体を白い光が包んだ。

光の中で誰かの声が、ずっと流れ続けている。歌だろうか？

掛け声みたいなものよ。

そうなのか。ところで、ここはどこなんだ。

世の境目。そして、わたしたちそのものよ。

わたしたち……。

そう。ひとつになっている、わたしたち。ここでは、両方が見える。だから、すべての想いが果たされてゆく。ほら、あの人たちは帰るべき場所を視ている。だから想いも果たされて、帰ってゆく。

わたしたちは、繋いでいるんだな。

ええ。わたしたちが繋がることで、彼らの通り道になっているの。ほら、視えるでしょう？

空中に浮かび白い光を放ち続ける霊夢に向かって瘴気は四方の空間から勢いよく流れ込み続けた。その傍らに浮かぶ妹紅と輝夜の体からも瘴気が吸い出され、変色していた肌の色も見る間に元通りになってゆく。

霊夢はチビ霊夢を抱き、眼を閉じたまま、ゆっくりと語りかけるような調子で詠唱していた。

「……此く宣らば天津神は天の磐戸を押披きて天の八重雲を伊頭の千別に千別て聞食さむ國津神は高山の末低山の末に登り坐て高山の伊褒理低山の伊褒理を搔き別けて聞食さむ……」

「これは……？」

「中臣大祓詞ね」

幽香の問いに、紫は薄く笑みを浮かべる。

「ほとんど寝言のようなものでしょうけれど、たぶん彼らを鎮めるための『精神』を維持するにはちょうどいいのね」

「雑霊たちは『向こう側』に出て行ってるの？」

「巫女に鎮められて、穏やかに天地に溶けていつているのよ。あくまでも境界の上だね。だから、『向こう側』への影響はないわ」

「霊夢のもつ巫女としての力……？」

「おそらく、霊夢だけの力ではないと思うけれどね」

紫は軽く息を吐く。

「ちょっと困ったことになったわ。わたしたち、また余計なことをしてしまったのかもしれない」

「……………」

「ま、周りから文句がでることはないでしょうけれど」

光が次第に薄くなってきた。それとともに、浮いていた霊夢たちの体はゆっくりと降下し、やがて彼岸花を押し広げるようにして地面へと横たわった。

紫と幽香も降り立つ。

「……終わったようね。それでは、わたしは退散します」

「待って、八雲紫」

幽香は空間に切れ目を入れようとした紫に呼びかける。

「この二人、このままにしておいていいの？ これからも、また厄

介なことが起きるんじゃない？」

「……言いたいことは分かります。でもね、下手にいじるともつと面倒なことが起きそうな気がするのよ。だから、いまは黙って見守っておくしかないんじゃないかと思っているの」

「……………」

「ところで、そのウサギさん」

並び咲く彼岸花の一部が驚いたように揺れる。

「あなたの師匠によろしくね。いちおうお姫様を傷つけはしなかったから、そのところはきちんと置いておいて」

返事はなかったが、紫は特に気にした様子もなく、幽香に軽く会釈をすると空間の隙間へと姿を消した。

「やれやれ……」

幽香は霊夢たちのそばに座りこみ、疲れ切ったように身を横たえた。

その23につづく

その23

23

『……………』

周りを見回すと、霊夢と妹紅、それに幽香さんが横たわっていた。

三人とも見た感じでは無事のようなのだ。

そうだ、魔理沙はどうなったんだ？

立ち上がるうとしたが、足がふらついてしまう。と、声がした。

「無理しなさんな。もう、すっからかんだろう」

振向くと、赤い髪的女性が笑顔を浮かべながら立っていた。和洋折衷という感じの独特の服を来ているが、なによりも手にしている大鎌が特徴的だった。

『あなたは……………？』

「死神だよ。といっても、別にあんたを迎えに来たとかそういうんじゃないよ。あたしはこの幻想郷の三途の川で渡し守をしている小野塚小町っていうんだ。ひとこと挨拶しとかなきゃと思ってね」

彼女は私のそばに歩み寄ってくると、膝を折って抱き上げてくれた。

「先に言っておくけど、白黒の魔法使いも向こうで地べたに転がってるが、ちゃんと生きてるよ」

『そうか、ありがとう』

良かった。とりあえずこれで安心だ。

「たいしたもんだよ、あんたも。力任せとはいえ、あの二人を引き離れた上に気絶させちまうんだから……ま、そのあ后的ことも見越した上でのことなんだろうけどね」

『見ていらしたんですか？』

「ああ……悪いね。ちよつと立場上、手を出しづらくってね。死神が現世の住人と関わるのは仕事がからむときだけって決まりなんだよ。でも、あたいはときどきその決まりを破っちまうほうなんだけどね」

その口調には、どこか聞き覚えがあるような気がした。

『もしや、前にもここでお会いしてませんか？』

「おや、思い出してくれたかい？ そうさ、あんたがここに『入って』来たときにわたしは会ってるよ。あのときは、不死人二人が戦ってて、その憎しみの心に惹き寄せられて瘴気の渦ができた。その力で結界に穴が開いたちようどそのときに、あんたの魂はその人形と一緒に向こう側から入ってきたのさ。そうしたら瘴気ごと不死人たちは結界の穴に引き込まれそうになって、結局、一緒くたに取り

憑かれた状態になっちまったんだ。あたいはたまたま見回りに来てて、そのまま放っとくわけにもいかなかったから、この鎌で二人の体ごと中身を吹き飛ばして散り散りにしちまったのさ。おそらくそのときあんたの魂も人形から飛び出しちまったんだね」

そういうことか。断片的ではあるが、そのときの状況が蘇ってくる。確かにあのとき妹紅も、あのお姫様もいたようだ。

「まあ今回は、あんたと巫女のおかげでこころへんに溜まってた霊たちの怨念は鎮められた。礼を言うよ」

『いや、私は何もしていないと思いますが……霊夢には伝えておきます』

「だけど、巫女が力を出せたのも、あんたがいたからだとなんか思うよ。まあ、それはそれとして、その花の妖怪にもちよつと言付けを頼みたいんだよね。いいかい？」

『……ええ、かまいませんが』

「言付けは、こうだ。“あの魂はわたしも四季様も関われない”」

シキサマ、というのが誰のことかは分からなかった。ただ、あの魂、が何を指しているかは明らかだ。

『分かりました』

「それじゃあ、あたいはこれで失礼するよ。縁があつたら、また会おうね」

死神とはとても思えない気さくな身振りで言うと、彼女は去っていった。

『霊夢、起きてくれ』

私は霊夢の顔のそばに寄り、頬をぽんぽんと軽く叩いてみた。だが、起きない。仕方が無いので両手で頭をゆさゆさと揺ると、ようやく反応があった。

「うーん……何よ、ひとがせつかく……ん？」

『せつかく、何だ？』

「チビ、どうして？ いや、あれ？」

起き上がり、周りを見回す。少しの間状況が分からなかったようだが、もう一度私の顔を見て言った。

「全部片付いたの？」

『何も憶えていないのか？』

「あなたが上から突っ込んでいって、魔理沙と幽香を吹き飛ばして、雑霊たちを引き寄せる中心になって結界に入り込んだところまでしか憶えてないわ。引き寄せた連中は消えたの？」

『うん、消えたというか……まあ成仏してくれた、という感じじゃないのかな。霊夢が彼らを導いてくれたんだと思うが』

うつすらと、夢の中のような薄い記憶だが、彼らが「帰っていつ

た」というような印象が残っている。

「そうなの？ 魔理沙と幽香は？」

「生きてるぜー」

薄闇の中から声がして、よれよれになった魔理沙が姿を現す。

「いったい何なんだ？ いきりなり吹き飛ばされたと思ったら……
もうこんなに暗くなっちまって」

魔理沙は腰を降ろして、そのまま仰向けになってしまった。

すると今度は幽香さんが起き上がる。

「なによ、うるさいわねえ……もう」

と、二人の声に反応したのか、妹紅の体も動いた。

『大丈夫か、妹紅』

「ああ。なんだ、体はそのままなのか……」

立ち上がって、服のほこりを払う。

「お前さんの体から瘴気を吸えるだけ吸って、体ごと壊してもらっ
という算段だったが、どうも違う形になったようだな」

それに応えるように、霊夢が言う。

「その小さいヤツが言うには、わたしが被い清めて成仏させてあげたらしいわよ」

妹紅は一瞬、考えるような顔をしたが、すぐに表情をゆるめた。

「なるほどな。まあ、みんな無事で良かったが……輝夜はどうしたんだ」

「てゐがないから、たぶん永遠亭に連れて帰ったんでしょう、大丈夫よ。とりあえず、どこかで休みましょう。ここには長居は無用だわ」

霊夢が言うと、魔理沙もうなずく。

「そうだな、もうくたくただ。紅魔館に行こうぜ。ここからならそんなに距離はない」

「そうね。ま、人数は多いけど事情を話せばむげにはしないと思うわ。チビも口添えしてよ」

『分かったよ』

きつとあのお嬢様は話を聞きたがるだろうが、仕方がない。

私たちは足を引きずりながら、闇の色に沈んでゆく無縁塚を後にしたのだった。

その24につづく

その24

24

壁の燭台の温かみのある光で照らされている部屋のほぼ中央で、四人の少女がテーブルを囲んで軽い食事を摂っていた。

「なんだか落ち着かないわね。こんな格好でお客として食事なんかしてちゃ悪いよう気がするわ」

「わたしはそんなに気にならないな。慣れればどうってことはないぜ。たぶん、いちばん変てこなのは幽香だ」

「うるさいわね、仕方が無いでしょう。お風呂から出たらこれしかなかったんですもの」

「……………」

デザインは細かいところで違いがあるが、どれも白と藍色を基調にしたメイド服だ。サイズから考えるに、おそらくは咲夜さんの服なのだろう。四人の中ではわりと小柄な魔理沙にはすこし大きいように、袖口から手が半分ほどしか出ていない。

こうしていると、休憩時間におしゃべりをしている若いメイドさんたちにしか見えないが、言うと一緒に反撃が来そうなのでやめておこう。

なぜか私自身も似たようなメイド服を着せられる羽目になった。だが、私の場合はどうして用意されていたのか謎だ。

扉がノックされる音がして、魔理沙が「はいよ」と返事をする、メイド妖精たちとともにパチュリーとアリスが入ってきた。

「食事中、失礼」「お邪魔しますね」

二人は部屋の中の一同を見ると一瞬ぎょつとしたような顔をしたが、その後の反応は分かれた。アリスは明らかに笑いをこらえるような表情になり、パチュリーはほんのりと頬を染めたあと、うつむいた。

「……お前ら、言いたいことがあるならばつきり言えよ」

魔理沙はぶっきらぼうな口調で言う。

「いや……なんていうか、いろいろな意味ですごい組み合わせだなと思っただけよ」

アリスはそう言ったあと、口元を手でおおい、体を震わせる。

パチュリーは霊夢のそばに歩み寄ってきた。

「……チビの具合を診てみたいのだけれど、かまわない？」

「ああ、ありがとう。お願いするわ」

霊夢は膝の上から私を抱き上げ、パチュリーに手渡す。

部屋の隅から小さなテーブルが引き出されて、私はその上に横たえられた。

アリスが側にやってきて、私の上着とブラウスを脱がせ、体を診はじめる。パチュリーはその様子をしばらく見ていたが、やがて「あとはまかせる」と言ってメイド四人衆のほうへ戻っていった。

「だいぶ無茶をしたみたいね」

『まあ、必要に迫られたんでね』

「そう。いまさらとやかく言わないけど。でも……」

『なんだ？』

アリスは声を低める。

「霊夢はなんだか機嫌が良さそうね。いいことでもあったのかしら？」

『そうか？ あれだけのゴタゴタがあった後だから、ほっとしているとは思っが』

「まあ、いいけど」

くすりと笑う。

「この間神社に行った時よりも、穏やかな感じがするのよね」

いつものように指先を私の身体に当て、なぞるように動かしてゆく。

「霊力の伝導路には異常はないみたい。ただ、限界まで霊力を出したせいで、力の強いものを惹きつけやすくなっているわ」

『どうということだ？』

「空になっているものは、満ちているものを惹きつけやすいのよ。その逆も然り」

『じゃあ、例えば空になっているもの同士はどうなんだ』

「そうね……惹きつけ合うことはないでしょうけど、いつのまにか輪が重なりあうように、ひとつになるかもしれない。空になっているという意味では同じモノだから」

『……………』

「何にしても、しばらくは大人しくしていたほうが身のためよ」

『そうだな』

と、いきなり部屋の扉が開かれる音がした。

「待たせたわね、みんな！」

例によって甲高い声だった。

「ここに来た以上は、たっぷりと話をしてもらわよ！」

レミイのためにテーブルに椅子が新たに追加され、これまでに起きたことについて、それぞれが覚えていることをつなぎあわせるようにして話をした。

妹紅が悪霊被いなどの呪術の使い手としても修練を積んでいるというのは初耳だったが、千年を超える歳月を生きている以上、想像もつかないような数多の経験があるのだろう。

私は最後に死神がやってきたことに関しては伏せておくことにした。おそらく、彼女の立場としてはなるべくこういった『事故』に関わったことは内密にしたいだろうと思ったからだ。幽香さんへの伝言は、また機会があったときに伝えればいい。

「経緯はだいたい分かったけれど……肝腎のチビが何者かっていうことは謎のままなのね」

レミイは紅茶をすすりながら首を傾げる。

すると、幽香さんがにやりとして言う。

「何者『だった』かは謎だけれど、この幻想郷でいま何者たり得るか、ぐらいは分かりかけてきたんじゃない？」

「まあ簡単に言うと、チビは条件さえ整えばその器……人形そのものを『架け橋』にして結界を超えられるということみたいだな」

椅子の背に寄りかかったすこしだらしない姿勢で魔理沙が言う。

「でも、それは霊たちの意思が作用したから、ってことでしょう？」

アリスが問うと、魔理沙は体を起こし、真面目な顔つきで答えた。

「雑霊の集まりだろうがなんだろうが、意思が結界に作用したって
いうんなら、あとはその作用をどう強めるかって問題でしかない。
魔法に例えるなら、より強力な効果を生むための術式を加えればい
ってことだ」

「なるほどね……いずれにしても、チビにとっては使える手段が増
えるということになりそうね」

レミイはうなずき、私に顔を向ける。

「どうなの、その点についてご本人の感想は」

『……まだ何も分からない。少なくとも、いまそんな力が使えたと
して、使う必要があるとは思えないな。それよりレミイ、実はひと
つ提案があるんだが』

「あら、なに？ 面白そうな話なら乗ってあげるわよ」

吸血鬼の少女は鋭い牙を口元からのぞかせて笑みを浮かべる。

「日を改めて、幽香さんとスペルカード戦で勝負をしたいと思っ
ているんだ」

「えっ？」

当の幽香さんが意外そうな顔で私を見る。

「そのときに、ちょっと場所を貸して欲しい。場所といっても、上空ということになるだろうが」

「ふうん？ いいわよ。その代わり、その下でパーティーをやらせてもらうけど、かまわないかしら？」

「それは好きにしてくれ。幽香さん、どうだろう？」

「ええと……」

メイド姿の幽香さんは少し焦ったように眼を泳がせる。

「その場合、何を賭けることになるの？」

「そうだな。私が勝ったら、一日だけ、幽香さんにその格好で神社でお給仕をしてもらうというのはどうだろう」

すると、霊夢が笑い出す。

「いいわね、それ。きっとみんな怖いもの見たさに集まってくるわ」

「それはいったいどういう意味よ」

幽香さんはすこし眉をしかめたが、まあいいわ、と苦笑を浮かべる。

「どうせわたしが勝つもの。じゃあチビさん、わたしが勝ったら、一日中、霊夢とあなたにわたしの家でメイドとして仕えてもらっわ」

「チビに指南をしたものとしてひとこと言わせてもらえば、油断はしないほうがいいと思うがな」

妹紅がぼつりと言う。

「まあ、身をもって知ることになるだろう」

「霊夢まで巻き込むのは不公平じゃないのか」

と魔理沙。

「あら、それぐらいの見返りがないとやる気が出ないわよ」

幽香さんはにこやかに言う。

「かまわないわよ。それぐらいは付き合っわ。メイドの作法なんて全然知らないけどね」

霊夢はあっさりとした調子だった。

「それじゃ、決まりのようね」

レミイはすこぶる上機嫌だった。

「咲夜、パーティーの招待状の準備をしてちょうだいね」

「かしこまりました」

後ろに控えていた咲夜さんはいつもと変わらない静かな口調で返事をする。

「自信のほどはどうかんだ、チビ？」

魔理沙の問いに、私はいちおう見得を切ってみせた。

『勝つつもりのない勝負なんて、しないよ』

その25につづく

その25

25

数日後、私と霊夢はふたたび紅魔館にいた。すでに陽は落ちていて、二階にある部屋のひとつを控え室として提供された私たちは、着替えを終えて出番を待っていた。

中庭には相当の数の妖怪たちが訪れているようで、窓から覗いてみた限りでは、百鬼夜行とまでは言わないまでも、まともな人間なら近寄りたくないような雰囲気醸し出されていた。

「ところで、わたしには教えてくれてもいいでしょう？ どうしてわざわざ自分から、幽香と勝負するって言い出したの？」

霊夢が膝の上で私の服の襟を整えながら言う。

『それはまあ、例の魔理沙の話を思い出したからさ。わたしが妹紅の指導を受けたことで、周りの妖怪たちがいろいろと噂をしているっていう』

「ああ、あれね……でも、幽香と勝負をするとそれがどうにかなるの？」

『きちんと自分の眼で確かめてもらった方が、どの程度のやつかはつきりするだろう。すくなくとも余計な想像をいろいろとしなくて

すむ。恐怖っていうのはたいてい自分で作るものだ。それはヒトも妖怪も変わらないんだろっからな』

「……相変わらずいろいろと考えてるのね。でも、これで派手に幽香とやりあつて勝ちでもしたら、それこそますます怖がられることになるんじゃないの？」

『だろうね。逆に、幽香さんが勝てば、私がさほどのものじゃないという安心感が彼らの間に生まれる。それはそれでいいと思うんだ。すくなくとも、私が妖怪を退治しまくるなんて噂は消えてくれるだろう。ただ、こちらとしても負けるつもりで戦うわけじゃないがね』

「勝負は全力でやるというわけ？」

『もちろん。だから勝負の行方は幽香さんの考え次第ということかな』

幽香さんが全力を出してきたら間違いなく勝てない。それはあの魔理沙との戦いからも分かる。だからこそ幽香さんとしてはそこまでの激しい戦い方は避けるはずだ。だが、私が勝ってしまったら、さすがに幽香さんの誇りが傷つくだろう。となれば、ギリギリの勝負で勝つ、もしくはあえて勝ちを『譲ってみせる』という形を選ぶに違いない。

『まあ、勝負そのものより、こういう場に出て自分をさらけ出すというのが大事だと思うんだ。言葉であれこれ言うよりも、その方が分かりやすいだろう』

「そうね。それはそうかもしれない」

霊夢はそう言うと、私の頭に手を乗せた。

「この間、結界にはまりこんでたとき、何が起こっていたのか全然思い出せないけど……ただ、とても穏やかな気分だったような気がするの。そのままの自分をさらけだしていて、でも安心していられるような」

『……そうか』

「きつと、あそこにあなたも一緒にいたんじゃないかなって気がする」

『そうかもしれないな』

わたしも、あのときのことは思い出せない。だが、アリスの言葉を借りるなら、同じ中心をもつ重なった輪として一緒にいたのかもしれない。

と、扉の向こうから声がした。

「すみません、ちょっとお邪魔してもいいでしょうか」

霊夢が我に返ったような顔になり、勢い良く立ち上がった。おかげで私はあやうく椅子から転げ落ちそうになった。

「あつ、ごめん……ええと、ちょっと待って」

あたふたと移動して、霊夢が扉を開けると、そこには意外な人たちが立っていた。

「お久しぶりね」「こんばんは」

永琳先生と、輝夜だった。

「いろいろと迷惑をかけたのに、挨拶もなしで悪かったから……今回はお礼も兼ねて参上したわ」

先生はいつもの落ち着いた口調で言う。

「この間のことだったら、お互い様だし、お礼なんて。まあどうぞ」

霊夢は二人に椅子を勧め、向かい合う形で腰を下ろした。私はふたたびその膝の上に乗る。

「ありがとう。実はお礼かたがた、ひとつチビさんに謝らなきゃならないことがあってね」

『なんでしょう?』

「ここの主にあなたを預けたのは、実はわたしなのよ」

『!』

「それって、レミリアが人形を譲ってもらったっていう知り合いのこと?」

霊夢はさほど驚いた様子もない。

「ええ、そうだけど……もしかして、分かっていたの?」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……この人形をレミリアから預かったとき、なんかちよつと薬臭いなって思ったのよ。そのときはあんまり気にしなかったんで、忘れてたのよね」

なるほど、薬の匂いか。私には嗅覚というものがないから気付かなかった。

「以前にあの無縁塚で姫様と妹紅が戦ったとき、わたしが現場に着いたのは何もかも終わったあとだったのよ。あなたの器のその人形はそのとき見つけたんだけど、わたしが持っていると誤解を招きそうだと思って、ここの主に押し付けてしまったの。出所を明かさないと約束してもらってね。このあとにまさかこういうことになるとは……名乗り出たからといって意味があるとも思えなかったし、下手に勘ぐられるのも困るし」

「なるほどね……でも、何かと気にしてはいたみたいね」

「姫様がうるさかったのよ。いろいろと探りを入れた形になってしまつて悪かつたけど」

永琳先生が苦笑する。すると輝夜がぼそりと言う。

「妹紅が神社に通いつめているっていうから、なんなのかと思っただけよ」

「まあ、そういうわけだから、これ以上余計なことはもうしないわただ、暇があつたら永遠亭にもまた顔を出してくれる？」 『共通の知り合い』 もいるわけだしね」

『分かりました。そのうちにうかがわせていただきます』

二人が部屋を出て行くと、入れ替わるように魔理沙が入って来た。

「そろそろ出番だぜ。準備はいいか？」

『ああ。だいじょうぶだ』

「なんだか、妙に頼もしくなってきたな。調子に乗って怪我するなよ？」

『ありがとう。気をつけるよ』

すると魔理沙がすこし奇妙な表情になった。

「あんまりそういう素直な返事をするなよ。調子が狂うぜ」

『……魔理沙？』

「なんでもない、さあ行こう。霊夢、チビを」

「ええ」

霊夢が私を抱き上げた。

部屋を出て魔理沙とともに一階に降り、正面玄関から前庭に出ると、どよめきが周りから響いてきた。

以前の神社でのお披露目とは較べ物にならない数の人々、まあ大部分は妖怪だが、彼らが私たちを見ていた。その中には妹紅や永遠亭の面々をはじめ、これまでに知り合った連中もいた。

そして、正面には、彼らに囲まれるような形で幽香さんが立っていた。

「こんな騒ぎに付き合うのは、今日限りにさせてもらっわ」

『そうですか。それなら、悔いが残らないようにしないといけませんね』

私は霊夢の腕から離れた。

『それじゃ、ちょっと行ってくる』

「ええ。行つてらっしゃい」

私と幽香さんはお互いのスペルカードの枚数が同じことを確かめてから、向かい合った。周りを囲んでいた見物人たちが、緊張を感じ取ったのか徐々に離れてゆく。

「いつ始めてもいいわ」

『ええ』

眼を閉じて心を鎮め、自分の中にきっかけが訪れるのを待った。

そして……。

私たちはほぼ同時に上空に飛び上がった。

夜空を背景に、二つの影が動き回り、いくつもの線条が閃き、光弾の群れが飛び交う。

一回り小さな影は、素早い動きを交えながら相手に接近しては光弾を放つ。そのたびに空気を切り裂ような音と、低い振動のような音が響く。

一方の影は、相手との距離を保とうとするように動きながら線条を断続的に放ち、時に連射する。

そんな上空の戦いを仰ぎ見ながら、妖怪たちは楽しそうに騒いでいる。

騒ぎの中心から少し離れた場所で、吸血鬼の少女は戦いが繰り広げられている夜空を見上げながら誰かに呼びかけているかのように言う。

「今回はいろいろと大変だったようね」

すると、何も無いはずの空間から女性の声が答える。

「……なんだ、おどかしてやろうかと思ったのに」

「吸血鬼の能力を舐めてもらっては困るわ。それにしても、人形という呪物が境界そのものになるなんて思わなかったわね」

すると空間が返事をする。よくよく見ると、そこには奇妙な裂け

目が開いている。

「巫女と同じ性質を持っているものだと考えればいいのよ。ただ、こちら側にきたあの魂は、相当に強い願いを持っていたんでしょね。だからこそ境界を超えることができた」

「でも、それが何かは本人は忘れてしまっている……いつか思い出すかしら？　思い出したら、何が起こるかしら？」

「問題はそこね。わたしとしては、霊夢をやっかいな事に巻き込んで欲しくないんだけど」

「でも、そういうやっかい事を呼び寄せるからこそ、あの子は博麗の巫女なんじゃない？」

「……まあね」

「先のことまで考えすぎるのはどうかと思うわよ。まあ、あんたのやることに邪魔だてはしないけどね」

「それを聞いて安心したわ。じゃあ、また」

「勝負の決着ぐらい見ていけば？」

「本当の意味での勝負は、もうついてるわよ。あれはただのお祭りでしょ」

かすかな笑い声とともに、裂け目は閉じた。

「ふん、それぐらいわたしにだって分かってるわ」

レミリアはかすかに鼻を鳴らしてつぶやく。

と、上空から特徴のある衝撃音が聞こえた。

激しい衝撃で、体が揺すぶられる。

至近距離からの光弾の列をよけそこなった。

ほとんど気力は残っていなかった。空中に留まることも難しい。

意識が遠のきかける。と、誰かが近づいてくる気配がした。

「やれやれ、とりあえずこれで終わりよね？」

幽香さん？

あ……駄目だ！

そこで私に触れては……。

「えっ……」

一気に意識が戻る。と同時に、私を抱えている幽香さんの体が落ち始めた。

まずい。

わたしは懸命に幽香さんの体を支えるが、そうするとますます幽香さんは力を失ってしまふ。幽香さんの力を吸い込んでしまっているのだから当然だ。だからといって、流れ込んでくる力を押し戻すこともできない。

地面が近づいてくる直前に、下から何かを受けとめてくれるような感触があった。

「ちょっと……何やってるの、あなたたち」

レミイの顔が見えた……。

気づいたときには、私は紅魔館の一室の椅子の上に横たわっていた。近くのソファには幽香さんも寝ていた。意識はあるようだったが、ぐったりとしていた。

そして、私たちは勝負の判定結果をレミイから聞かされた。

『引き分け……？』

「ええ。そう見なさざるを得ないわよ。だって、二人同時に気絶したまま落ちてきたんだから」

レミイは愉快そうに笑いながら言う。

「もういいわよ、それで。わたしが勝手に空中でチビさんを抱きとったのが悪いんだから」

ソファの上で幽香さんは横になったままの姿勢で片手を振る。

『でも、そのままだと落ちると思ったからでしょう？』

「まあそうだけど。それにしても、妹紅が精気を吸われたっていう意味がやっと分かったわ。まさに身をもって知ることになったわね」

笑うに笑えない。まあ、もともと笑えないが。

「いいじゃない。とりあえずパーティーを彩るものとしては十分役目を果たしてくれたし、わたしとしては二人の戦いぶりをおおいに讚えたいわ。お客たちも十分に楽しんでくれたしね」

レミイは満足そうな表情だった。

「ところで、その場合賭けはどうなるんだ？ 罰ゲームはチャラになるのか？」

と魔理沙。

「何もしないんじゃ、ちよっとつまらないわね」

アリスが恐ろしいことを言う。

「じゃあこうしましょう」

霊夢が軽い口調で提案した。

「わたしとチビと幽香が三人ともメイドになって、神社でお茶をみんなに振舞うの。紅葉を眺めながらお茶を一服というのも、なかなか風流でいいと思うわよ」

「素晴らしいわ、霊夢」

レミイはにっこりと笑う。

「それじゃ、わたしはぜひとも一番乗りを果たさせてもらっわね」

またあのメイド服を着ることになるのか……。

ちょっと憂鬱だったが、にこやかな霊夢の顔を見ると、まあこういう締めくくりも悪くはないかもしれないな、と思った。

その26（最終話）につづく

その26（第2部最終回）

26

翌日、私たちは朝っぱらから神社にそぐわない格好、すなわちメイド服を着けて縁側に腰を下ろしていた。咲夜さんがわざわざ私たちの服に限っておそろいのデザインに仕上げてくれたので、並んでいると、メイド版霊夢（大）・霊夢（小）、という具合に見えるだろう。

「自分が違う世界の人間になってしまったみたいね」

『そうか？ 見慣れてしまうと、やっぱり霊夢は霊夢だが』

「あたりまえじゃないの。何を着ようと、どこに行こうと、わたしはわたしよ」

霊夢は湯呑みを両手で持ち、お茶をすする。

「だけど……そうね、霊夢は霊夢だ、って言ってくれる人が近くにいたほうがいいかもね」

おそらく霊夢にそう言ってくれる人は、この幻想郷にはきっとたくさんいるだろう。

でも、世の中にはそれを確かめることすら、できずにいる子もいる……。

『……………』

なんだろう。何かを思い出しそうな気がする。でも、あともう少し、というところで出てこない。

……焦っても、駄目だ。

『必要なときにそう言えるようになりたいな』

「大丈夫よ。無理にそれを言葉にしなくても……違う言葉でも、伝わるから」

霊夢は笑った。

「だって一緒にいれば、分かるでしょう？」

その笑顔を見て、苦しい、と思ってしまった。

理由は分からない。だが、おそらくこの苦しさこそが、私が私である証拠なのだろう。

私は立ち上がり、霊夢の膝の上に乗った。霊夢は私の頭を軽く撫で、ふたたびお茶をすする。

いまは、この温かい時間が過ぎてゆくに任せるしかない。

ふいに庭先に人影が降り立つ。

ウェーブがかかった緑の髪に、フリルつきの白いヘッドドレスを

つけ、藍色の上着に白いエプロンを重ねている。スカートはすこし丈が短めで、裾からは白いストッキングにつつまれた脚が伸びている。

「一番乗りは幽香か。ちょっと意外ね」

霊夢が微笑む。

「メイドが客より遅く来ちゃまずいでしょ。ま、もう二度と、こんな恰好をする気はないけどね」

『それは残念です。今日の幽香さんを見逃した人は、自分の不運を呪い続けることになるでしょう』

「ふん。とりあえず、わたしにもお茶入れて、霊夢」

「はいはい」

私は霊夢の膝から降り、霊夢は立ち上がって台所に向かう。

それを見送った幽香さんは私を見てぼつりと言った。

「あなた……自分が何を願ってここに來たのか、思い出すのは怖くないの」

『……怖いですよ』

正直に答えた。

『でも、逃げるつもりはありません。思い出せなければ、ここに來

た意味はないんですから』

「そう。あなたがその志を曲げない限り、きっと霊夢は強いままでいられると思うわ」

『……………』

「最後まで踏ん張れるか、見てるから」

『分かりました。見ていて下さい』

しばらくしてお茶をもってきた霊夢が、私たちを見て言う。

「あら、なんだかすっかり仲良しって感じね」

秋の風が、庭先を吹き抜けて行った。

この静かな時の流れは、果たしてどこへ続いているのだろう。答えはまだ、見えそうもない。

(了)

その26（第2部最終回）（後書き）

これで第2部終了です。

ここまでは既に完成した作品の投稿でしたが、第3部以降は構想中ですので、完成次第の投稿となります。

しばらく間が開くと思いますが、ご了承下さい。

以下、余談というか、後書きめいたことを。

これだけ長い二次創作を書いたのは初めてのことですが、ここまで続いたのはやはり東方のキャラクターに奥行きがあつて、自分なりの解釈をして動かすというのが楽しいということがあつたのだと思います。

人それぞれの東方があるというように、私の解釈もかなりバイアスがかかっていて人によっては違和感もあるだろうとは思っていますが、原作のイメージに近づけようとしてもなかなか難しい感じもするので、結局は自分なりのイメージになってしまします。

あまり一般的ではなからうなと自分でも感じるのは、たとえば咲夜さんが霊夢達に対しても丁寧語でしゃべっている点。これは霊夢とレミリアの関係からして、そういう立ち位置でもいいかなと解釈しているのですが。レミリアの前で、霊夢とタメ口でしゃべっているというのはちょっとメイドさんらしくないかしらという。

あと、パツチエさんが某長門さん/某タバサさんみたいな口調になつてしまっていますが、これもキャラの描き分けという必要に迫ら

れた結果といえます。三人以上でしゃべるシーンがけっこうあるもので。

物語は主題であるチビの「自分探し」に関してまだ解決していないことがありますので、もう少し続ける必要があります。展開はどのようなのか自分自身でも読めてません。

いちおう終りがこうなるといふ形はあるのですが、それは仮の終りで、今後の流れによっては変化する可能性があります。

そこらへんも含めてどうか生暖かく見守っていただければ幸いです。

それではまたお目にかかる日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9558k/>

東方傀儡異聞 2 ～ 想い映えたる不死の軀 ～

2011年4月4日10時26分発行